

龍背の聖なる剣

龍背の聖なる剣

唐突、丈を氣附。存、ということであつて、存るといふではない。瞬今將に、此處、といふでもない。

唐突、ただ、そのみに氣が附く。他一切を非知。「前触れもなく突然に〇〇であつたことに氣附」ではない。氣附の主体を知らず、主体があるかも知らず。

主体も客体も、自らも対象もなく。

ただ、氣附。

“ ” であるとか、 “ ” の状態にあるとか、 “ ” に居るとか、そういうことには、未だ氣がついてなく、ただ、氣が附くという處迄で若かない。

唐突、ということとは、突然、という意味よりも、どうして、こうなつたか（経緯）も、なぜ、こうなのか（由来）も、どういうことか（意味）も、それらをわかつていないということも、わかつておらず、どこにも収まっていない、着地していない、すらも遂げないことである。着地点がない。場所がない。占有しない。捉えがない。かたちがない。

上下左右前後も知り得ない、色彩のない、黒すらもない、暗くも明るくもない闇（強いて言えば）透明な闇、むしろ、銀の背景も持たない、喻えるならば、どこまでも無際限に透明な闇。

牽き裂かれるような、ただ、苦しさ。

次から次へと疑情が噴出する。と言っても、そういう氣霧がある丈で、問いなどにはなっていない、と言う以前に、問い方すらもあり得ない、ただ、辛さ。

湧きいずる疑問符たちは、未だ諸考概になる遙か以前の、無碍すらもない空絶の状態から、どうにか何かになろうと足掻き、漫掻き、有機的化學変化から原初の生命へと遷移しようとする状態、かたちの設定仕様をなす uga（“かたち”のアイデア）以前の状態であつた。

もとを糺せば、思考も情緒も精神もインパルス（化學反応による電氣的な発火現象）に過ぎないが。

自分たちが観ている、インパルスという現象が事実であるとすれば、の話だけでも。どこまでもめくりさぐっても、どこまでもつかむべきものがない。

これら喋繰ったことなんて、皆、後から考えて、苦しかったように感じている丈だ。きつとあの時は、ただもう、逃げたい、遁れたい、免れたい、救われたい、楽になりたい、ひたすら只管それ丈だったであろう、とか。

何となく、『存在のないことの、根底からの不安、脳髓が爛れ混ざりそうな、ぐるぐる廻り続く眩暈が裂く、内臓ごと吐きそうな嘔吐の感覚、何も見えなくて、空気があるのかどうかすらも不安になる。あるかどうかともわからないと、空気を吸っていないような気がして、苦しくなる』、だったような感じがしている。

説明が欲しいのなら、そう考えるのは当然だ。人は助かりたいために為す、生き残りたいがために、理由などない、問う莫れ、そういう仕様しかないのだから、と。

真義も真実も、真理も理法もない。正義も本質も、正解も誤謬も、妥当も不当も、真も偽もない。一致も不一致もない。実際、そうだから。

ただ、助かりたい。願いがかなうならば、健やかなまま、無事でいたい。すべてはそのための儀礼装甲に過ぎない。だから、そこに *bag* (アイデア) はなく、無意味な擦り合わせで刹那のみの、仮初めの架空の空漠がある丈。

第一章　じぶん発令、存在、それ以降

言葉ならぬ情、概念ならぬ感覚、それしかない。未だ明確な意識がなかった。混沌である。ひたすら

ただ、只管、助かりたい、遁れたい、と藻掻き、足掻く動機は「わたし」よりも古く在る。「わたし」よりも真実である。しかし、その意識などというものは、数十億年の歴史の累積である無尽蔵の無意識層に操られる、ほんの表層部でしかない。

日の眼を見ぬ深層にある無意識層の、深淵広大なる大海に比すれば、その上っ面に泛ぶ、一枚の小さな枯葉にしかず、波のまにまに翻弄され、主体性など1ミクロンもない。

金粉のような霧のあらはれで、天啓が訪れた。

宙に泛ぶ黄金の天球儀のような彪^{あや}の曼陀羅、ダイヤモンドの燦めきに圍繞され、イユ・イヒルメ（彝兪・彝日婁）という名が降りて来た時、気がつく。

闇に差した最初の黎明は“わたし”だった。それは唐突に来る。次から次へと、何かが起こって、次第に擦り込まれ、徐々に“かたち”が起こり、意識が生まれ、さまざまな異なるかたちが生じ、馴染むうちに心が生まれ、沁みながら納得という心の状態で収まりがつく。諸々の考概^{つくる}を做。時差はない。あるが生まれるのも、同時進行だった。

足掛かり、手掛かりになる“ある”に、必死にしがみつこうとし、断末摩の足掻き、藻掻きのように我武者羅無我夢中必死一所懸命。それが“わたし”であった。

忽然と、氷のような雪礫が頬を打つ。頬に当たる丈で雪だつてわかるものだ。それで自分を明瞭に感じ、説明なくとも、存在を理解した気分になっている。

それって、不思議だけど、不思議じゃない。意識というものが隕石のように衝突して来て、唐突にわかるものだ。

頬丈ではない。腕も打つ。脚も打つ。何でこんな普段着なの？ こんな極寒地で！ おかしいよ。自分が今までどうしていたのか、ここがどこなのか、なぜ、いるのかも、わからない。

ただ、泛び上がる想い、彝兪（イユ）、……

イユ？ 名前？ わたしは、イユ。イヒルメ家の。

碧い海潮を自在にさばくイヒルメ族の娘、海の女神アルテミ・イヒルメに仕える七千年来の一族、眞神族の一氏族で、二千七百年前に海を渡って日本に来て、東北の眞神郡に住んでいた、……はずだった。

凄まじい吹雪だった。なぜ、こんなところに？ 眼も開けられない。正確に言えば、吹

雪だと思われる、が妥当だろう。だが、間違いない。しかも、深い山奥のようだ。怖ろしい嶺が頭上に、見えないのに、その漆黒のシルエットが、とても近くに蔽い被さるように感じられる。

進もうとする。

「あっ」

足下が崩れ、墜ちそうになる。

断崖！ 何も見えないけど、もの凄い空間を感じる。

途方もなく広い空間。

大きな谷の断崖絶壁、もの凄い巖山の、非情な絶壁だろうか。怖い。

何もできない。雪を踏んでいるけど、滑落するかも。怖いよ。待つしかない、きつと、夜が明けるから。そうすれば、わかるはず、きつと。

夜が明ける？ 本当にかかしら？ 証拠がない。でも、こいねが希うしかないよ、祈るしかない。それしかできないよ。だって、何もわからないから。

でも、祈って、どうなるかも、まったくわからない。

あゝ、とにかくにも、寒い、寒い、寒い。

死んじやうよ。手が悴んで動かない。身体が凍えて痛い。ガタガタ震えて歯が合わない。震えを止められない。

あゝ、寒さを凌ぎたいよ。その思いしかない。それができれば、何も要らない。お願い。あゝ、本当にお願います。

暗鬱な哲学少女だった。友だちがいない、というよりは、友だちを求めずに、独りでいつも考えていた。古代ギリシャやニーチェやハイデガー。存在の意味。真実と本質。心の不安から逃れたくて、真理を求めていた。

でも、そんなものは、もうぶっ飛んだ。充たされていなかったけれども、それは結局、充たされている者の安全な領域での遊戯だった。わたしはこの寒さから逃れたい。免れたい。救われたい、助かりたい。必死だった、凄まじいくらい必死だった。

雪を掻く。穴だ、穴、穴！ 掘った。入る。風を凌げた。ある程度だ。それ丈で暖かく感じる。でも、雪を掘ったせいで、手は痛い、完全に悴んで温度が戻らない。口の中に指先を突っ込んで、ちっとも温まらない。

こんなにも絶望的なことであるの？ どうにもならない、どこにも逃げられないよ。どうにもならなさ過ぎる。絶望した。

最初は、涙が流れたが、涙も流れなくなった。もう夜は明けないんだわ、と諦める。諦めないと思えられなかった。もう力尽きて、無気力になった方が楽だ。

それでも、一秒が堪えられないほど長いのは、まだ希望が燃え尽きていないせいだろう。もしかしたら、夜が明けて、黎明が兆し始めるのではないかと。長い苦しい時間。それもあり経った頃、ようやく黎明を幽かに感じる。

そして、次第に明るくなると、自分のいる、恐るべき場所がわかった。

山の巖の断崖、垂直な絶壁の、中腹だ。ほとんど足場がなく、雪が積もっていつでも滑落しそうだった。

遙か上も、蔽い被さるような、巖の壁になっていて、足下には深い深い峡谷、数km下までまっしぐらであった。

風を凌いで少し体温が戻ると、進むしかないと思った。どんな哲学もわたしを救ってはくれない、と。

黎明が希望を取り戻させてくれた。少し幸せを感じる。光は希望だった。見れば、少しの勇氣も湧く。

岩棚とも言えない、わずかな足場を辿って、暴風雪に吹き飛ばされそうになってしがみつ、積もった雪によって何度も足を取られ、あ、墜ちる、って何度も思った。

とにもかくにも、そうしながら進む。足を上げたら、次は慎重に下す。一歩。次にもう一歩。進むしかない。

疲れ果てて力が入らず、もうだめと思う頃、少し広い岩棚が見えた。

「あゝ、あそこまで行けば」

どうにか希望が力を甦らせ、辿り着く。

洞窟があった。あそこなら風がしのげる。その時、

「おい、おまえ」

突然、声がして心臓が止まりそうになった。

声は洞窟の中からする。穴の闇からあらわれた姿は、一人の少年だった。颯爽としている。自信に満ちていた。双眸が輝いている。

風に靡く髪は獅子の鬘のようであった。

「おまえも、ここまで下って来たのか。俺は、この上から滑落して、偶然、この岩棚に落ちて助かった。

彝龍衆（イリユーシュ）って言うんだ。あゝ、仲間がいて嬉しいよ。急にカラ元気でも

出そうかなって気力が湧いてきたよ。

いや、人間らしい気分が甦るなあ。さっきまでは、怯える小動物のようだったが。人間様だなんて言ったって、所詮は、そんなもんだ」

第二章 自己と他者が逢うと装飾が生まれる 普通に生きるための仮象

さて、人間らしい気持ちが生じたのは、イユも同じだった。それまでは、恐怖という呪縛に心を虜にされ、怯えて逃げることしか考えられなかった。

寒さを凌ぐこと丈で必死だった。

人間らしい感情、人格、尊厳なんて、どこにもなかった。

イリユーシユは言葉が続けた。

「でも、実際は、結構、ヤバかった。真っ暗な中、歩み出したんだが」

彼は落ちてからも、歩もうとしたらしい。後になって、それが危険な行為だったことが判ったが、そのときはまったく気がついていなかった。もし、光を観じなかったら、死んでいただろう。突然、背後に光を観じたのだ。気が変わってそちらへ向かうと、どうやら洞窟らしく、その中で、何かが微かに光っていた。

「それがこれさ」

石だった。石だったが、奇妙な石であった。まるで鏢のない短剣のように刀身と柄があり、ぼんやり光っている。蒼白い光で。

「偶然だ。こいつのお陰さ。」

長い夜が明けて、薄明かりの中、外へ出てみると、肝が冷えたよ、何てったってさ、俺の行こうとしていた方向が、ほら、この奈落へ墜ちる断崖だ」

イリユーシユの指差した方は数km下までまっしぐら、垂直に墜ちる絶壁の峡谷だった。イユは身震いする。足がすくんで、それ以上は見ることができなかった。

「もし、あのまま歩んでいたら、って考える丈でも、今でも手足の力が抜けるよ」

彼は笑った。吹雪の峡谷に虚しく響く。木霊する。この広大な空間、怖い。よく笑えるなどイユは思うが、イリユーシユは急に真顔になって、

「あゝ、いい気分だ。久しぶりに笑ったような気がする。」

話をすると安心するね。理性に血が通う。気持ちが呼吸する。人間性が帰って来るよ。

でも、いつから喪われていたか知らないけどね。

気がついたら、闇だった。その気がついた時点がどのくらい前なのか、何時間か前なのか、何日か前なのか、何年か前なのか、全然、見当もつかない」

だが、まだ安心してはいけない。

イユは生き残るために、意図的に不安を呼び覚ました。

「でも、イリユーシユ、これからどうしよう。食べるものも、防寒具もないよ。また夜が来たら」

「ともかく、どうにも、こうにも、寒過ぎるや。とてもかくても、なあ、洞窟に戻ろうぜ」
「えっ」

ちよつと見遁る。髑髏の眼窩の空洞のような洞窟だ。深淵のようだった。少し怖かったけれども、寒ささえ凌げれば、未来なんてもう……、

そういう想いでイユも歩む。

イリユーシユは入口から少し入ったところに、雪で壁を作っていた。一部壊してある。そこから出て来たらしい。

「蝶番のあるドアじゃないからね。出入りのたびに、一々崩して、また積み上げなくちゃならない。

まあ、雪はいくらでもあるけどな」

入った。雪を積んでイリユーシユが再び壁を作る。虚しい作業とも言えるが、意味はある。必要でもある。

風がない丈で、暖かった。あゝ、助かった。すごく安堵した。

暗いけれども、石の短剣が行燈のような明りをもたらす。その熱も感じられた。光と暖かさは原初的な喜びだ。

「何だか、この石、光と熱が強くなったような気がする、おまえと会って。

俺の心の喜びが反映するのかな」

イリユーシユのつぶやきはイユには聞こえていない。彼女も又つぶやく。

「とても幸せ。最初の、あの長い絶望の夜を思えば、天国のように幸せだわ」

雲の裂け目から垣間見える紺青の瞳のように、強い希望が息を吹き返す。同時に、未来への気遣いが理性的なかたちで生じる。

そもそも、不安というもののすべては将来への不安なのだ。生存の畏怖も、存在の不安も、過去の事実が紐解けぬことへの焦燥も、すべて。

「で、どうするの。考える余地はないわ。きっと、行くしかないのね」

イユは話題を戻す。イリユーシユは虚ろを凝視した。二人はいつの間にかあたりまえのように命を託し合っている。

「ここに居ても死ぬなら、行くしかない。わずかな儚い希望を繋ぐ絶望的な闘いだ。それでいいよな」

深刻なことを笑いながら言う。

イユも、そう思っていた。進むのは怖いけど、結局は同じなのだ。

ここに居ても、死ぬ。

救助は考えられなかった。自分たち以外に人がいるかどうか定かではないのだ。いや、いないように感じられた。この世界の広大さは、彼女たちが知っている世界の広大さとは、どこか違っている。

「ならば、明るい今のうちに」

「うん」

石の短剣で手足を温める。二人は雪を少し噛んで、沁み渡るような新鮮な水を飲む。

「たくさん噛むなよ。体温が下がる。俺たち、こんなに薄着なんだから」

そう言っ、イリユーシユが笑った。言われなくとも、わかっていた。言った方もそれをわかっていた。

再び吹雪の中へ出た。道はない。吹雪の中に飛び込んだものの、どうやって行けばいいか、イユにはわからなかった。

「路を造る！」

イリユーシユは決然と言う。

「どうやって」

「どうやってもさ。えいっ！」

彼は石の短剣を絶壁に刺した。肉塊を刺したかのように、グサツと刺さる。角度をつけて上から斜めに刺したので、巖壁は上向きの角度を持って穿たれていた。そこに足を差し、その上を刺す。手を差し込む。壁にへばりつくように一歩ずつ。少しずつ進む。

「俺が来いと言うまで来るな。先の様子がわかってから帰って来る」

待った。戻って来た。

「だめだ。反対に行ってみる」

待った。さっきよりも長い。戻って来た。

「だめだ。真下に行く」

待った。さらに長い。戻って来たが、

「無理だね。ただ、永遠に絶壁だ。どうするか」

イユは言う、

「じゃ、真上に行こう」

「バカを言うなよ、俺はそこから来たんだぜ。おまえだって」

「わたしは真上じゃない。あなただって、上にいたときは、何も見えていなかったでしょ」
イリユーシユは思慮し、

「そうだな。やってみるか」

今度はイユもイリユーシユのすぐ後から行くことにした。待つのが嫌になったという理由丈ではない。

垂直の壁を穿って手掛かり足掛かりを作って攀じ登るのは恐怖が少なかった。下が岩棚だからだ。

しかし、決して楽ではなかった。雪と凍った岩に手が悴み、冷たい風に曝され、感覚がすぐになくなるも、必死で歯噛みして登る。

最初、すぐに墜ちたが雪を重ねておいたので、怪我もなかった。落下した高さも、それほどでもない。墜ちても大丈夫という体験を得たことと、墜ちた衝撃でアドレナリンが上がったためとで、その後は一種の興奮状態で登り切った。

「ふう」

「ここかな」

「たぶん、俺が最初にいたのがこの辺りだと思う」

そこは岩棚というよりは、天然の栈道のような場所だった。肩幅ほども幅がない。坐っていても落ちそうだった。しかも強風と雪礫。岩の剥き出しているところに坐ったが、ひえっ、と声上がるほど尻が凍えた。

それには気がつかず、イリユーシユは或る方角を見て言う、

「これって道のように見えるな。上に向かっているようにも……、おおっと危ない。あゝ、ヤバかったなあ、まじで。……ちえっ、手摺が欲しいぜ」

足を踏み入れて少し滑ったのだ。

「はあ……。夢のまた夢ね……」

「いいよ、ともかくも、上に向かっている、……かもしれない。だろう？」

「ふふ。うん、登ってるね」

「行くか」

「行こうよ」

足下は眼も眩むような数千mもの垂直の峡谷、細い道を絶壁に寄り掛かるように進む。吹雪は下から吹いていた。山にぶつかった気流が上昇し、雲を吹き上げるのだが、ここまでは来られず、雪丈が吹き上がっている。

「うわ、風がきつい。下から来るから、体が浮きそうだな。おい、足を滑らせるなよ」

「そんなのわかってるよ、必死なんだから話しかけるな」

雲に包まれて、何も見えない瞬間もあったが、それはほんの短い時間丈で、やはり雲がここまで吹き上げられることは、ほとんどなかったが、意識は朦朧としてくる。

「ダメ、絶対、ダメ。ああ、神様……、あ」

強風にあおられる。今度も堪えた。何十回目か、もう奈落に真つ逆さまと眼を固くつぶったのは。何度も何度もドキッ!とさせられ、心臓は疲弊しきっている。息は苦しく、指に力が入らない。

理性が「見るな!」と叫ぶのを聞かず、下を見た。

頭を動かすとバランスを崩しそうだな。命懸けだが、見ずにいらなかった。

「あゝ、何て高さなの」

こんな高さなのに、これっぽっちの足掛かり。何て脆弱で、不安で、頼りない。

怖くなって、一歩も進めない。岩壁は垂直なのだ。足場はとても狭く、のけぞって落ちそうだった。

「おい、もう少しだ、がんばれ、氣力を振り絞れ、死ぬ気でやれ、死ぬんだ、捨てろ、肉体を超えて死力を出せ! 超えろ、自分の頭を踏んで登るつもりで凌駕しろ、上がれ。」

そら、もうすぐだぜ、がんばれ、振り絞れ、もうすぐだ」

「うるさい、無茶苦茶言わないでよ、もうすぐって、本当なの! 嘘でしょ! 嘘言わないで、くだらない励まし要らない!」

「それでもないぜ、そらよ、見なよ。どうやら頂上に着くらしい」

「え、ウソ! まじ? 吹雪いていて、何も見えないよ」

「まあ、よくわからない、上ってみなきゃな。でも、そんな感じた」

「嘘だったら殺すわ」

「殺されずとも死ぬさ、……あゝ!」

凄まじい風。手が離れた。間一髪、剣を刺してぶら下がる。

「きゃあ」

叫んで、イユは眼を固くつぶった。いや、つぶろうとした。もう、瞼の筋肉が草臥れ切って、言うことを聞かない。

「大丈夫だ。いや、まじで、やばかった。」

俺丈ならともかく、おまえを巻き込んで落ちるところだった」

「あなたが落ちたら、わたし、落ちなくても、死んだも同然よ、怖くて、何もできやしないわ」

「そうか？ あゝ、ともかく、ラッキーだった。よし、もう少しだ。どうやら頂上らしい。

ほら」

「ええっ、信じられない。頂上に着いたの？ 絶対に、そんな日は来ないと思ってたのに！」

「大袈裟だろ、見ろよ。……ま、俺もそんな気分だったが」

登頂していた。斃れるように、二人ともしゃがみ込む。

眼の前に広がる大光景があった。

不思議なことに、尾根を一步跨ぐと、風はない。静寂であった。

晴れていて、真つ白な雪の斜面がある。物凄い斜面ではあったが、垂直ではなかった。

四十五度以上の角度は上から見下ろすと、垂直に近いように感じるものだが、さっきまで見ていた垂直を見ていたので、四十五度以上の斜面が緩やかに見える。

「ここ、降りられるかしら……。何だか、簡単にできそうな気がする」

「確かに。怖い気はまったくしないな」

「あゝ、でも、救われた感じ。爽やかだわ」

「力が入らない。動きたくないね」

「ねえ、おかしくない？ こんなに高いところにいるのに、……空気が薄くないよ。変じやない？ 不思議だわ」

「傾斜がある。かなり急勾配だが、傾斜には違いない。俺たちのいた側は垂直なのに。変な山だぜ」

「すごい、ずうっと下の方に雲海があるわ。」

ねえ、チヨモランマよりも高いんじゃない」

「何でわかるんだよ」

「何となく」

「確かにもの凄い高さだ」

イユは不思議で仕方なかった。

「何でわたしたち無事なの。こんな高山で高山病にもならず、普段着で凍死もしない。頭がガンガン痛くなるくらい凍えて震えてるけど、指も感覚なくて動かないけど」

「本当だ。確かに不思議だ。」

……やっぱり、ここは普通の世界じゃないんだ」

最後の言葉は彼に似合わず悲しそうな、囁きであった。

「わたしたちしかないかも」

イリユーシユも同じく考えている。だから、黙った。イユもそれ以上は言わない。彼がその可能性は考えたくないようだったから。言っても、意味がない。

空腹を覚えた。雪をゆっくり少しずつ噛んだ。休憩し、しばらく晴れ渡った空を見ていた。疲労困憊で動けなくて、力が入らない。

二人肩をならべてしゃがみ、ただ、ぼうつと眺めていた。

イユは気がつく。

「ねえ、何となくなんだけど、イリユーシユ、あなた、少し変わってない？」

「え？ 変わり者さ、それがどうした？」

「やめてよ、漫才じゃないんだから。」

さっきと変わってないか、って聞いてんのよ」

「何、ばかなことを。」

ほら、何もないぜ」

そう言って立ち上がり、諸手を広げる。

イユはじつと見つめる。真剣な眼で。この人と命懸けで、ここまで来たんだと気づきながら。

安堵した今、初めてそれをしみじみと感じる。初めて会った時の喜び、この広大な世界に独りでいたときだったから、たとえ、どんな人と会っても幸福だったあろう。そして、洞窟に入った時の暖かさ、幸せな気持ち。

でも、彼が何か変わって見えたのは、自分にとって特別な存在であるということ丈ではない。

まるで、この感覚は、いったい……。まるで、いにしへからあるような、不思議な感覚であった。

「そうね、でも、何となく」

オーラを帯びているよ、その言葉を出せなかった。いかにも、バカらしくて。

しかし、イリユーシユも何の違和もなく感じていた。何か堅守すべき、聖なる約束のようなものを。喩えて言えば、この人を護りたい、というような。

「熱っ!」

懐が熱くなっていることに気づいた。イリユーシユは石の短剣を出す。

「あ!」

短剣は長めの鉞くらいの大きさになっていた。光も強くなっている、朝日を浴びた湖面のように。それとともに幽かに黄金の霧を帯びていた。

奇跡のように美しい。二人とも、しばらくは言葉が出なかった。だが、心の奥に何かが湧き上がる。これも不思議ではないという、根拠のない確信が。どこかにいるであろう、見えない、神性を帯びた存在を覚えた。

「見ろよ、この石」

「間違いないわ、変わった。何で?」

薄っすらと彫のようなものすら、見えた気がする。

「おまえ、俺にわかんと思うか」

「おまえって言わないでよ、イユって、名前があるのよ」

イリユーシユは笑いながら、わざと顔を顰め、不愉快そうな眉をふざけて作る。

「初めて聞いたけど」

「初めて言ったかもね。憶えてないわ、そんなことは」

だが、笑顔はすぐに止み、考え込んで深く清んだ、神秘的な表情を為す。イリユーシユはその移り変わりに吃驚し、

「おい、何なんだよ、どうしたんだ、いきなり」

山のこちら側は風もなく、無音だった。真っ白な雪が時折 スローモーションのように粉となって巻き上げられているのは、なぜだろう。清み切った、瞑想的な明晰の世界。

「ねえ、ここって特別な聖域だと思わない」

「え?」

「神様がいる感じがする」

「何だよ、急に」

「ねえ、わたし、思い出したの」

「何を」

「ぼんやりした、ただ感覚的なイメージ丈なんだけど、わたしが（わたしたちが、かもしれないけど）かつていた世界のことを、少し思い出したの。

何となくだよ、ぼんやりした、没骨法おぼろうみたいな感じで。微かな輪郭が臚おぼろに。

思い出したくない思い出……のような気がする。そこは……

不正で、真実のない世界。力があれば、悪であつても勝利の美杯を楽しみ、豪奢と逸楽を堪能できる醜い世界。

物理的法則が謳歌する、力丈の弱肉強食の世界、悪の世界」

「そう言われれば、そうだった気もする」

「わたし、真実の世界に生まれたいって願っていた。それ丈は思い出せるの。あなたも、そうじゃないの、イリュージョン」

遂にイリュージョンも深い表情を泛べた。叡知の面持ちを。

「醜い、不実不正義の世界だった。そうだ、思い出したよ、俺も希っていたということ。でも、それ以外はよく憶えていない。いや、思い出せない」

「そう、実は、わたしも、そうなのよ。はつきりしたと感覚と感情とはあるのに、具体的なことが、まったくないの。でも、きっと、これよ、これが答の一片だわ。ともかくも、わたしたちは、真実の世界に生まれ変わったのよ。

そう思わない？

わたし、感じるの、ここでの過酷な経験で言葉ではない叡知を体験で獲得したわ。だから、変化したの。

何の証拠もない、確認もしていない。けれども、叡知が身体に生じて、明確にそれを直観するわ、疑いようもなく。これが本当の知識、智慧なのよ、きっと。

真実の光燦に満ちて、揺らぎようがない、神的で崇高な確信。真の存在。懐疑を差し挟まれることもない真の叡知。

わたしたちがあの世界で知っていた真理はすべて脆かった。疑うことがいくらでもできた。すべてが無条件で、何の根拠もなく信じられていた。そんな脆弱なブロックで構築された体系の建築だった。

すべての認知（認識・意識）の素粒子、つまり、すべての証左（すなわち論理的証左）の構築要素である「考概」は、すべて思い込みで、それだからそれなんだというトートロジー（同義反復）的な無意味さで、つまりは無条件な是認の下、感覚的な擦り込みで馴染

ませて、納得という心的現象を起こさせた結果でしかなくて、何の証左にもならない、ただの現象だった」

イリユーシユは驚嘆で眼を睜みはったが、それは彼女の論への驚愕でも賛嘆でもなく、強く神々しく語る彼女への愛おしさ、潮のように高まり熾る、守りたいという切ない感情であった。

「おまえ、いや、イユ、哲学少女だったのか、愕おどろいたな」

「何でよ、失礼過ぎるわ」

呵々大笑し、

「俺もストリートのギャングだったが、重ねて穿いていたジーンズのポケットには、いつもニーチェが入っていた。ストリートの哲学者さ。」

読む本は、時には、ハイデガーになった。気が向けば、プラトンやアリストテレスを読むこともあったぜ。まあ、そりゃ、どうでもいいや。

ともかくも、ふうん、何となくわかったよ」

二人は生れて初めて、真実を語り合える友に出会ったのである。

眉を顰めて、イユはからかうように、

「ほんとかなあ、何がわかったのよ」

だが、イリユーシユはイユの揶揄など聞いていない。言ったら、言いつ放しだ。歩き出す。イユも歩くしかなかった。

どこまでも続く広大な雪の斜面、何もない。

いや、あった。

「おい、あれなんだ」

100mほど先にある、五十cmほどの、不自然な、雪の盛り上がり。小さくて、ここに来るまでは、気がつかなかった。イリユーシユが走った。イユは声を上げる。

「待ってよ」

近づく、雪をかぶった、小さな女の子だった。赤いチェックの頭巾をかぶっている。毛織の厚手の服。防寒とは言えないが、イユたちよりはいくらかましな格好だった。

「おい、おまえ、どうしてここに。まさかと思うけど、独りで？ 独りで、ここまで来たのか」

少女はイリユーシユを不思議そうに見上げる丈で応えなかった。イユが訊く。

「あなた、お名前は」

最初は六、七歳に見えたが、よく見れば、十歳か、十一歳くらいか。イユは自分が十四歳であることを思い出した。何となくイリユーシュも同じ歳だと思っている。

「アヴァ・ロキタ・イーシュヴァラ」

「え」

アヴァは「普く」、ロキタは「観る」、イーシュヴァラは自在なる者。すなわち、アヴァ・ロキタイーシュヴァラと言え、観自在菩薩の名に他ならない。

何も気がつかないイリユーシュは、

「おい、このまま坐っていたら、凍え死んじゃうぜ。いったい、いつからここにいるんだ。って言う以前に、^{みひら}どうやって、ここまで来られたんだか、不可思議だが」

少女は双眸を睥^{みひら}いたまま、見つめる目で表情すら変えない。その瞳の輝き方が異常で、ブリリアントカットしたダイヤモンドに、最高に乱反射をする角度で、太陽光を当てたかのように、強烈に燦燦と煌めいていた。

イユは不安を覚える。

「イリユーシュ、やめようよ、何かおかしい、放っておこうよ」

眉を上げて驚く。

「何言ってるんだ、放っておけないぜ。数少ない人間だぜ、仲間だぜ」

「だって、おかしいよ」

「いや、連れて行く」

イリユーシュは抱き上げた。少女は抵抗もしない。むしろ、当然のような顔に、イユには見えた。胸に痛みが走る。何、これ？　そう思うも束の間、イリユーシュがすたすた行くので、慌てて追いかける。

「待ってよ！　わたしは放っておくの？」

「何言ってるんだ、おまえは小さな小さなお子様じゃないだろ」

そういうことじゃないの、と言いかけて止まる。何で止めたんだろ、自分で不思議にも思ったが、実はわかっていることにも気がついていた。

「なあ、おまえ、どこから来たんだ」

面白がらせてやろうと、イリユーシュなりに考えて、肩に担ぎ換えて話しかけても、応じない。絶壁を攀じ登っている間に鍛えられた腕つぶしは幼い女の子の体重などものともしない。

「言葉が出せないのかな。あまり訊いちゃ悪いか。イユ、おまえ、どう思う？」

「知らないわよ」

「まだ怒ってるのか」

「怒ってなんかいないわ」

「なら、いいや」

……ったく、もう！

青い空は静かだった。碧い瞳のように美しい。

しばらく、歩いて下るうちに、また何かが目に留まる。

「何もないように見えて、いろいろなものがあるんだな。ほら、イユ、あれを見ろ。何だろうか」

眼が痛いくらい、まばゆい純白の急降下の斜面。

何の凹凸もなく、広くまっ平に十数kmを一気に下がっていたが、急傾斜の途中に一つ、まるで引つ掛かるかのように、小山のような、いびつな盛り上がりがあった。

白いが、雪ではない。

長い毛のようなものが、さらさらと靡いているのがわかる。

風がないのに。

「何だろう、異様だけど、崇高な感じだ。強く惹かれる。まるで、聖なる遺物のように。

あゝ、行ってみようぜ、逝ってみよう」

イリユーシユの双眸が強い燦々たる光で耀き、誰に言うともなく言って、ずかずかと雪を踏む。

「待って、待ってよ、わたしも行くわ」

雪も微かに積もっているが、雪と見紛うほどに、白くてとても長い毛がゆらゆらと揺れている。毛と言っても、人間の髪の毛ではない。何十倍も太かった。

「牙がある」

イリユーシユが足を止めた。アヴァを肩から、そつと下ろし、歩み寄ろうとするイユを手で制し、

「いや。俺丈で行く。

ここで待ってろ」

牙はとても長く、大きくアンダースローのように湾曲してから、先端でやや下向きに内側へ向かって小さく湾曲していた。

「マンモスだ、白いマンモス」

その時、ぎよろつと大きな眼が開いた。雪が粉のようにさらさらと落ちる。

第三章 生きる喜び 生活が甦る 聖堂、そして、安堵とともに空腹を

「わしは」

その存在者は言った。

切れ長の象眼で、白い長い毛を、風もないのに、ゆらゆらと靡かせている。鼻が微かに動いた。巻いたり伸びたりして、物をつかむための、極太の綱のような、それが。

「マンモスではない」

臉をゆっくり下す。だが、何かを思っ、再び持ち上げた。

「わしはかつて人間であった。

修行によって、神の領域に近づき、神仙となり、聖なる神象となった」

以前のイリユーシュなら驚き、疑ったであろう。しかし、今は違う。言葉の響きが深く、その言葉を信じさせた。言葉の響きの真実を噛み分けることができるようになっていたためでもある。

「今、死があなたに迫っているように見えます。神の領域に近づいたのに」

欣然と神象が笑ったように見えた。

「不死を希う者は死に怯える。わしはそうではない。死を超越した。だから、死を厭わぬ。それこそが真の不死だ。怯えていて、心楽しかろうか」

イリユーシュが腕を組んで唸る。その後ろに、いつの間にかイユが来ていた。話が聞こえて、安全だと覺ったし、興味を惹かれたのである。少女アヴァも、彼女の後ろで、双眸を燦然とさせて。

そして、イユは問うた。

「敢えて死ぬの？」

象眼の眸がゆっくり動いた。緩慢に死に近づいている。静かであった。蜜蜂の亡骸のよう。

「敢えて、ではない。ロゴスの声に聴従し。ダンマ（法）の導くままに。心の機りakiのまに。

おまえは聞いたことがないか、非常な満足に達したときに、人がこう言うのを、『もう死

んでもいい』と」

「あるわ」

「真の願いが本当に叶い、完全なる満足に達した人は、さように感じるものだ。仏陀は覺った直後、入滅しようとした。入滅、すなわち無余依涅槃、死だ」

ちなみに、解脱した聖者も肉体があるならば、生存のための呼吸や飲食の欲が残り、肉体的苦痛もある。それゆえ、この解脱の境地を有余依涅槃と呼ぶ。それらから解放される、死した後を、完全な涅槃とみなし、無余依涅槃と呼ぶ。

「そうなの」

イユはそれを閑かに受け入れた。手を当てる。優しく。

神象の瞼が微かに上がる。

「おお、これは。」

神につながる癒し手。あゝ、魂の癒し手じゃ」

神象の開いた眸が、イユの背後の少女を見つける。

「何と、あなたは。」

あゝ、そういう時代なのだ。時が迫っている」

「何？ どういうことだ」

だが、神象はイリユーシュの問いには応えず、再び瞼を下げた。

イリユーシュは嘆息する。

沈黙の時間。風もなく舞う雪の粉の音丈が、偉大なる山脈と大溪谷、無際限なる紺碧の空に、永遠の鐘のように木霊した。

眼を閉じたまま、神象は唐突に語り出した。誰にともなく。

「間もなく逝く。」

肉は既に乾涸び、繊維を残して空に散るであろう。毛と皮と骨が残る。それを使うがよい。

やがて、恐るべき虎狼たちが来るであろう。自らの身は自らで守るしかない。だが、真の恐怖はそれではない」

イユは驚き、

「え、何なの！」

しかし、イリユーシュは平然と石の鉞（かつての石の短剣）を取り出し、

「おう、敵が来るってことか。闘うぜ」

神象の瞼が大きく開く、

「おお、それは」

イリユーシュが訝しげに、

「これがどうかしたか。拾ったんだ。ちよつと不思議な、石の刃物さ」
神象の眼は睜かれたままだった。

「聖なる龍文が微かに泛ぶ。まさしく聖なる龍剣の一つ、まさか」

「ん？ まさかつて、何だよ」

「よく見せよ」

「ほらよ」

雑に差し出す。

「おお」

象の表情に泛び上がった宗教的な陶醉、崇高なる恍惚の表情。

イリユーシュは眉を顰め、

「何だよ」

「聖なる龍肯の剣。最も偉大なる龍剣、龍肯剣に間違いない。これをどこで」

「洞窟で拾ったのさ、山の向こう側の」

「このイヴァント山の向こう側だと。洞窟……不可思議だ。この世とは、あゝ、実に不可思議だ」

「なぜ」

イリユーシュは問い、イユも答を待った。

しかし、神象は息を引き取る間際であった。

「さあ、時が来た、さようなら、あゝ、何と言うことだ、素晴らしい」

瞼が自然と降りた。ゆっくりと。睫毛が風もないのに無言の微風に揺れる。

イユは涙を零した。

「ふ、逝っちゃったな」

イリユーシュは強がって、そう言ったが、二人ともわずかの間に、白き神象の聖者に親しい感情を抱いている。優しい、智慧深いその声に。

見る見る間に、彼の言葉のとおり、筋肉は空に消え、繊維丈が残った。毛皮と骨が建物のように構え立っている。

牙は城門の双つの塔のようであった。

額と肩が特に高い。眼球のない眼窩には、瞼の毛皮が蔽いかぶさっていた。骨盤と後脚が後方を囲むように組まれ、その上にも毛皮がかぶさっている。

雪上に聳える骨が柱や梁のよう、毛皮が屋根や壁で、古代の家のようにも見えた。毛皮の皮の部分が骨に押さえつけられて、雪の下まで届き、岩山の地に固定され、微動だにしない。

「これって、もしかして、ここにしばらく避難できるんじゃないか」

イリユーシユの言葉にイユも頷き、

「使えって、こういうことだったのね」

「何もかも、お見通しだったってことか」

毛皮のわずかな切れ目を、カーテンのようにめくって入ってみると、暖かい。足下は雪だが、筋肉の繊維が幾重にもなって、藁を敷いたようで、氷冷の刺すような厳しさを和らげていた。見上げると、あばらの太い骨はヴォールト（穹窿）のようである。龍肯剣が茫ぼうっと光って、燈明のようになった。

「すごい、快適よ、何て贅沢なの！」

「ってほどじゃないと思うが、今までが今までだったから、かなり控えめに言っても、天国だな」

「すごい幸せ」

暖かい丈ではない。明るく、乾いて、清々しい。

聖なる気が満ちていた。

聖者のブレスだ。神の祝福のごとくに。きよらさやか。

森林浴の快さであった。イユは思う、しあわせ、でも、初めてイリユーシユの洞窟に入った時ほどではないけれども、と。

「骸とは思えないな」

「あゝ、何だか、とても気持ちいい。生臭さなんて、欠片もないわ。爽やかよ。ねえ、イリユーシユ。神象の聖堂と呼ぼうよ」

「あゝ、いいよ。さてと」

イリユーシユは外に出て、雪を掘り、いくつか穴を開けて、ようやく戻ってくると、両腕に、いっぱいになるほど玄武石を持っていた。

「足りるかな」

そう言いながら、炉を組み上げる。

細く砕けた骨を擦り合わせて、摩擦熱を起こし、あらかじめ短く切っておいた繊維に火を点ける。空気が乾燥しているので、繊維はとても乾いている上、油分が灰に残っている、よく燃えた。

「うわ、あったかい！ げほっげほっ、煙い！」

「そうだな、一酸化炭素中毒になっちゃうな。煙突かあ。難しいな。あ、そうか」
急角度の傾斜であることを利用することを思いつく。登り窯の原理だ。炉の後部を、斜面を登るようなトンネル型に造って延長し、傾斜地を煙が上るように造る。

炉の開口部の上の方を、半分ばかり組石でふさいで、低い位置のみ小さく残し、煙が斜面を昇り易くする。

「調理には向かないが。まあ、いいだろ。暖が取れりゃなあ。

……料理しないしな」

「だって、材料も、道具もないよ」

「へえ、ありゃあ、するんだ。凄いな」

「どういう意味」

アヴァは表情を変えず、じっと、ただ、虚空を見つめていた。

暖くなれば、眠くなるものだ。しばし、緊張から解放されたせいもある。喧嘩しながらも、いつしか安らかで健やかな眠りへと、はらりと落ちた。

ふと、イユは目を覚ます。

夜も深くなっていた。外でしくしく泣く声がある。

「イリューシユ！」

「あゝ、聞こえてるよ。何だろうな」

「幽霊？」

「だったら、いいんだが。少しは賑やかになる」

イリューシユが外に出る。

すると、雪明りに、とても小柄な人物が膝を突いて祈り、慟哭しているのが見えたが、その人はイリューシユに気づくなり、

「うわあっ！」

と叫んで、後方十mくらいまで、一気に跳躍した。

「凄いバネだな。しかも、しなやかだった」

そんな暢気なことを言っていると、相手は、

「何者だ」

「ここに棲んでる者さ」

まだ一日も経ていないが、イリユーシユはそう言ってやりたい気分だったので、そう言った。

毛皮をめくって、イユが顔を出す。

「大丈夫？」

それを見て、小柄で痩身の、おかっぱ頭（かぶろ）の少女のような少年、と思われる人物は吃驚し、

「何！　どういうことか。あゝ、空洞だ？　まさか、貴様ら、師匠の肉を喰らったのか。」

聖者の肉を喰らうと力が備わるなどという迷信を信じて」

「何、それ！　聞いたこともない。違うわよ！」

「ええい、黙れ」

「自然に風化したのさ、一瞬でな。さすが聖者だ。おまえ、弟子らしいが、それもわからんようじゃ、まだまだだな」

イユが眼を丸くし、

「イリユーシユ、あなた、いつから阿羅漢（アラハント、涅槃に至った聖者）になったのよ」

「いいじゃねえかよ、おまえ、どっちの味方だ」

「だって、おかしいでしょ」

「まあな」

それを見ていた小柄で細身の禿者は腹が立ったらしい、

「戯れるな、貴様らを成敗する」

雪を蹴散らし、杖を振り上げて襲い掛かってくる。技の切れ、タイミング、スピード、呼吸、すべて理に適い、巧みだった。雲や花片や微風や水の流れのように自然で、軽く滑らかで美しい。イリユーシユは小柄で年下の少年らしき人物に軽々とあしらわれ、転げ倒れる。

「くっそうっ！」

急ぎ立ち上がった。

再び撃たれ、ふらふらと回転しながら、どっと倒れる。

「もうやめて！　あなたの誤解なのよ」

イユが叫ぶも虚しかった。

「あははは」

禿が笑う。容赦なく、舞うように杖で打った。

その動きを、雪明りでどうにか捉えるも、イリユーシュは追いつけない。機 راکیを読まれているからだ。彼の動きは、すべて予測されていた。

「畜生！」

齒嚙みした。

禿が杖を大きく振りかぶり、襲い来る。するつもりはなかったのに、無意識に聖劍を懐から出した。

「何！」

もう、だめかと思っていたイリユーシュは相手が弾かれ、昏倒するのを見て、吃驚する。

しかし、驚いてばかりもいられない。我に返り、禿の少年を取り押さえた。小柄な細身で喚く、

「放せ、畜生、下郎め、卑怯者！」

捉えてしまえば、腕力が上のイリユーシュが有利だ。抑え込まれて、禿は口汚く罵ったが、虚しかった。

「沙門の端くれならぬ言葉を。おまえこそ成敗してやる」

そう言つて、蹴りを入れる。息が止まって蹲る禿を、イリユーシュは神象の聖堂の中へ引き入れた。

「やい、おまえに訊くが、この辺じゃ、どうやって食糧を手に入れているんだ」

イユも、それを思い出した。

「そうだね、おなかペコペコよ！」

イリユーシュは振り返って笑い、また禿に視線を戻し、

「な、女こどもが腹空かせてるんだ、沙門の端くれなら教えるのが筋だろう。

ところで、おまえ、名は？」

禿は中に入った瞬間から、様子を見て、意外そうな顔だった。幼女アヴァ、十四歳の少女イユ……辛うじて少年イリユーシュが禿よりも強そうだ（実際、強かったが、どう見ても弱者の集まりだ。師匠の肉を貪り喰うふうには、到底、見えない。

「僕はリンレイ（玲鈴）」

「ちょっと、待て。じゃ、女か」

「そうだ」

「手荒なこととして悪かったな、今更だが。沙門だから、男女差を消しているのか。まあ、いいや。」

とにかくにも、誤解があるようだから、説明してやる。いいか？」

イリユーシュは意外にも細やかに、諄々に説明し、リンレイは納得した。

「食糧は秋に溜めた木の実しかない。肉を食う気なら、野ウサギやシカなどがいるが、僕たちは沙門なので、食べなかった。」

木の実でよければ、分けるが」

「ありがたいね。早速、取りに行こう。いや、悪いが、取りに行ってももらえないか。彼女らを、置いて行くのも、連れて行くのも危険なので」

「わかった」

出る前に振り返り、

「僕が逃げないと思っているのか」

「まあな」

「ふ」

リンレイは二十分もしないで帰って来た。さまざまな木の実があり、ほとんどのものは炒ってあった。イユはクルミを頬張り、歓喜した。

「おいしい！ 幸せ！」

「うわ、まともなものを食べてなかったから、凄いうまい。こんなに複雑で深い味だったのか、木の実って」

「まともなものって言うか、雪食べた丈で、食べ物を口にしてなかったわ。クルミって、何でこんなにおいしいの。」

あゝ、木の実の油脂って、最高！ サーロインステーキみたい。滋味深くて体から力が湧いてくる！」

「確かに、元気になるよ。俺たち、前の世界では、あたりまえのように、いつも栄養のあるものばかり食べているから、効果を感じることが少ないけど、やはり、医食は同源なんだ。」

あ、自分のことばかりでごめんな」

イリユーシュはアヴァの前に差し出し、

「せっかくだから、好きなものを選べよ」

松の実を一粒食べて、飲み込むと、アヴァは首を振る。もういらないという合図だった。イリユーシユはうなずく。初めての意思表示だった。イユは横眼で見いていたが、気がつかれないようにすぐ視線を戻す。リンレイも心が温かくなった。自然に笑みが出る。厳しい修行に明け暮れていたのも、何かほっとした気分になり、懐かしさが込み上げる。

イリユーシユはリンレイの様子を見ていた。

禿かぶと言って思い出すのは、『平家物語』の少年密偵の集団だが、彼女は少女だ。踝くるぶしの腱が筋硬く、きりつと締まって、冷凜とし、まだとても青い、少年との区別も定かではない、女の子だった。

それでも、炎に当たって、仄かに頬に血の気の差す横顔は、女らしかった。

流麗な顔立ちだ。繊細で壊れそうな。その頬の上で、揺れるオレンジ色の炎に、黒い影が舞い踊る。宴の踊り子のように。

リンレイは木を削った椀を一つ持っていた。雪を溶かし、火で熱くした石を入れて、白湯として、皆で回し飲みした。温まる。

至福の晩餐はかくして平穏に終わった。

第四章 時々垣間見える現実、アガメムノンの悲劇

幸せとは儚く、永く続かないものである。

リンレイとともに暮らし、何日か過ごしていた。急斜を下って、高山特有の五葉の松、這松を伐って乾燥させ、薪にしたり、さらに下った針葉樹林で雪に埋もれた木の実を採集したり、神象の聖堂を住み易くするために手を加えたりして、時を過ごす。

椀も作った、各々に。太めの枝が雪に半分埋もれて、落ちているのが見つかったのだ。重みで折れたのか。彼らには神が与えてくれたように思える。いつも近くに感じた。その太い枝を断って削って彫って、イリユーシユが細工をする。

又、イリユーシユは自分の武闘的能力の低さを大いに感じ、リンレイから武の技巧を教わった。

素が直で、かつ知識が零であったため、砂に水が沁み込むように吸収する。呼吸法を学び、坐禅も学んだ。大きな石の上に坐して何時間も瞑し、心を無にすべく集中した。単純な性格が功を奏し、疑うこともなく邁進し、又、テレビやゲームなど様々なものの刺激が

ないため、図らずとも、魂が希うがまま、存分に集中できた。

リンレイが言った。

「イユが看破したとおり、ここは真如の世界ですから、精神的なものが直接、強さに繋がっていきます。

武技丈でなく、瞑想で精神を清め研ぎ、呼吸で身体を整え、心と体の機らきが一致するように調整するのです。やがて体による武のみならず、心の機らきを武として機らかせられるようになるでしょう。この世界では、それが要です、自分の信じるものを護るために」

「俺たちが何となく、ここでの経験で変化しているのも、そういうことか」

「そうです。そのうち、もっと如実に、眼に見えるような、大きな変化があるかもしれません」

食糧や薪の採集に当たっては、リンレイが一人で行くか、全員で行くか、いずれかであった。イユやアヴァを残せないし、イリユーシュ一人では、未だ道に迷う可能性があったからである。

全員で下方にある針葉樹の森に入った時であった。

雪を踏む、重たい足音。獣の唸り、生臭さ。

餓えて、凶悪そうな狼であった。狼と言っても、なみの狼より遙かに大きく、シベリア虎くらいの大きさで、しかも、人面のシールでも貼りつけたかのような見掛けで、顔が人間である。リンレイは表情をさっと硬くし、鋭く囁いた。

「人狼です。墮落した人間が狼化した化け物です。身も心も、化け物です。さあ、どうか逃げてください。

後は僕が闘います。少しの間、防ぐからその隙に逃げ果せてください」

その表情に決死の覚悟を読んだイリユーシュは、

「いや、おまえを犠牲にできるか。

それに急斜面を数km、女や子どもを連れて逃げ果せる訳がない。闘う。それしか選択肢はない」

イユがイリユーシュの傍によって、イリユーシュの背中にそっと手を当てた。

光が体内にあふれるのを観る。

前の世界の時だったなら、そんなことはバカバカしくて絶対にしなかっただろう。しかし、ここでは意味がある気がした。そういう確信が湧いていて、疑いようなものとして、魂魄に存している。

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥

イリユーシユは鬨氣が嵩じ、自然の鳴動に呼応するかに感じた。何かに気がついて、聖劍を懷から出すと、真言の靄霞が絡まって、輝きながら伸び、聖劍に彫られていた聖句がくつきりとする。

リンレイが構える。端正な顔に冷凜なる殺気が走った。それを見て、イリユーシュも何をなすべきか、心機を探る。俺が為すべき行動は何か。

あゝ、魂の聲に、声に従え。どこだ。鎮めよ、心を、感情を。余分なものを削り落とし、本当の自分の声を。俺は……

「俺の殺気にビビった？ いや、そんなことはあり得ない、なぜ。わからん、なぜだ、なぜ、なぜ、なぜ」

確かに、人狼が怯んだのは、リンレイやイリュウシュのせいではなかった。百戦錬磨の人狼は彼らなど舐め切っている。

28

その隙を逃すまいと、イリユーシュが飛び出し、剣を打ち込むも、人狼は軽く躲す。だが、避けた方にリンレイが待っていて、杖で頸椎を打った。非力だが、機をつかんで打つ側と撃たれる側の呼吸を合わせ、絶妙の時機に当てたので、大きな衝撃を与える。

猛然と怒り狂った人狼。火に油を注いだ。飛び上がって、リンレイを斃し、蔽いかぶさる。

「やばいぜ」

イリユーシュが助太刀に入ろうとしたが、尾の一振りで吹っ飛ばされた。

「つつ！」

「あゝ、イリユーシュ！」

イユが走り寄ろうとする。

「来るな！」

「いや！」

イリユーシュは懸命に立ち上がる。来させないために。

「あふむづさらだとうむそわか（唸跋折囉駄都鏐蘇婆訶）」

イユは無意識的に毘盧遮那仏の金剛界真言を唱えていた。応ずるように、聖剣が輝く。その光が人狼を刺した。

「ぎゃわん！」

人狼は霹靂を轟かせる雷霆に撃たれて跳ね、一目散に逃げた。

「待て！」

イリユーシュが叫ぶ、毛を逆立てて。アドレナリンが噴出し、興奮状態と恐怖の呪縛から解き放たれた欣喜とで、雀躍していた。

「止まって、イリユーシュ、やめてください。やめて。」

ええ、そうです。追っても無駄です。追いつけません。道に迷う丈です。

いや、むしろ、深追いすれば、待ち伏せがあるかもしれません。とても危険です。冷静に。

勝ったと思う時が危ういのですから」

「うぐつ。そうか。そうだな。人狼って言ったな、何なんだ、あれは」

「文字どおり人狼です。人が狼化したと、さっき言いました。そのとおりです。」

ただし、彼らは独特です。この辺り特有で、他では見られません。人狼はどこにでもいますが、彼らのような者はいません。或る意味で、妙法に通じています。知恵に長けてい

ます。

このアカデミア天領にしかいません。

元は皆、沙門でした。真理の探究に固執し過ぎた亡者のような存在です」

「何だって？ 沙門？ アカデミアって、何だ？ そう言えば、おまえも、師匠もそうだが、ここは沙門だらけだな」

「アカデミア天領という巨大な聖域で、このイヴァント山も有名な聖地なのです。だから、沙門がたくさんいるのです」

「沙門なのに、捻じ曲がった者がいるんだな」

「ええ。しかも、たくさん。この時代に、何かが大きく変化しようとしているのです。物質主義もその一つです」

イユが嘆息した。

「哀しいわね。ここは違うと思っていたのに。真実の世界じゃなかったのね。そうなら、何で来ちゃったのかしら」

黄昏の時の長い影のように草臥れ果てて、どうにか歩いて神象の聖堂に戻り、ようやく安堵する。ドカッと腰を下ろした。

「疲れたわ」

イユがつぶやくように言う。イリユーシユも顔にも疲労が泛んでいた。

リンレイが気を取り戻したように問う。

「あの稲妻のような光は何だったんでしょう。イユが咒を唱えた時に、聖剣が強く光りました。人狼はそれに怯えた」

イリユーシユは考えるのも怠そうだった。

「俺にもわからない」

リンレイはそういう応えが返ってくると思っていたのであろう、ただうなずいた。

「聖剣の神秘ということですか。僕は師匠から聖剣については何も聞かされたことがありません。いいえ、出さなくても結構です。

その類のものって、意外に危険です。選ばれた者以外は触らない方が無難でしょうね。むろん、イリユーシユは選ばれた人だと思います」

「そうかなあ」

イユはもうわからないことだらけなので、疑念も起こらず、あまり興味が湧かなかった。ただ、ぼんやり炉の炎を見つめている。

暖かい、幸せ……

「疲れたよ、くたくただ。いつも緊張が抜けないな。もう寝るか」

平和な時であっても、漠然とした不安がつきまとう。早く時が過ぎて、何もかもが解決して欲しい。それまでは、あゝ、眠り丈が救いだ。

リンレイも応え、

「そうですね」

雪冷えと静寂の夜、神象の聖堂の周りを一匹か、もしくは二、三匹の獣が雪を踏む音が聞こえた。

イユが最初に飛び起きる。アヴァはすやすや眠っていた。

「イリユーシユ、聞こえる？」

「うん、聞こえてるよ。静かにしろ」

「だって」

「イユ、静かにしてください」

「わかってるわ、人狼？」

誰も応えなかった。

身を寄せ、息を殺し、音も立てずにじっとしている。短い時間であったが、かなり長く感じた。

足音が聞こえなくなる。去ったようであった。

それでも、彼らは息を殺し続けていたが、ようやくイユが囁く。

「去ったかしら」

イリユーシユは別のことを考えていたようであったが、

「らしいな、そっと見てみよう、いないと思うが」

「やめて、人狼よ、去ったと見せかけている丈なのかも」

「いつの間にか人狼のプロになったようだな。ふ、危険か。まあ、そうかもな。」

いや、見よう。見なくてはわからない。見たものを信じよう。敢えて、そう決断する」

少し丈開けた。いない。

もう少し開けた。心臓が早鐘を打つ。映画のように、いきなり怪物の顔が鼻先に出てき

そうな、そんな予感がして、背筋に怖気が走った。

いない。死角に入ったのか。

「ええい、面倒臭い！」

外に飛び出す。雪上の足跡がある丈であった。広漠とした雪の斜面に、動く者は見えない。

見上げれば、夜空は広大な宇宙で、光の速度でさえ何百億年もかかる無際限な深淵であった。

この広大な野生の中、彼らはとてもか弱い、脆くて小さな存在である。

食糧や燃料が蓄積すると、心にも余裕ができてくるものだ。樹木や針葉樹の葉で、インテリアなど作って、生活を楽しむ気風も出て来た。

石を聖剣で削って、器や鍋も作る。煮炊きは可能だが、煮炊きする食材がなかった。マダとリンレイが煎じて飲んでいたという茶の葉で、薬膳に近い茶を啜る。

しかし、ちらちらと炎の燃える炉を囲んでくつろぎ、団欒する時にも、炉の火に踊る影のように、不安が揺らいでいた。

「ええ、そのとおりです。狼やオーク、もつと恐ろしい者たちがいます。師匠があなたたちと言ったとおりです」

イリユーシュは腕を組んだ。

「それもそうだが、何かあの時、それ以上の意味を感じたんだ。たとえば、もつと恐ろしいものがあるような。

お師匠さんはアヴァを見て、それを確信したらしい様子だった」

「さて、僕にはわかりません」

そんな日々の或る早暁、眼を覚ましたイユは怯えた眸を震わせ、不安そうに尋ねた。

「ねえ、何の音？ 人狼？」

イリユーシュも耳を澄ます、眼をきつくし。

「少なくとも、獣だ。低いうなり声で、口で息をしている。首を振って鼻で強く息を吸い込む音。うろうろと雪を踏む音がしている。たくさんいるな」

しかも、牙の隙間から漏れる獣の唸り声に混ざって、人語が聞こえた。リンレイも杖を握る。耳を澄ましていたが、

「どうやら、いつぞやの人狼が仲間を連れて来てしまったようです」

リンレイの声も掻き消されるほど外が騒がしくなってきた。人間の言葉で、ぶつぶつ言っている。

「神仙の肉を喰らえ。そうすれば、真理は我々皆のものだ」

「奴は死んだ。死ねば抵抗もない。今なら喰らえる。何で奴が真理を獲得したか、神は不公平だ。」

平等が正しい。真理は民衆のものだ」

「喰らえ、奪え。あの毛皮の下だ。入って存分に喰らえ、がさつに、自由に、本音で素直に。あゝ、遠慮はいらない、俺ら大衆が崇高だ」

「あゝ、憎き奴、自ら真理を獲得して我らに寄越さぬ奴、誰にでもわかるべきだ、真の真理とは。それを知る我らこそ真の真理の体現者であるべきだ。」

さあ、待てぬ、諸君、入ろうぞ」

「独占者、専制君主に等しい、この瞞り怨みを知れ。復讐だ。行くぜ」

リンレイが言う、

「ほら、こういう感じなんです。」

おぞましいという以外の何者でもない。論調は一応の筋らしき旋律を持っていますが、正しい動機がありません。論が正しければよいというものではないのです。人間は清み明けき心がないといけません。そうでなければ、自分も他人も不幸になる。人間の求めるものは幸福です。

真理の探究も、それです。時に、悦びが幸福であり、時には、ただ、単に無事でいられることが幸福です」

イリユーシユは驚いた。

「まさしく、そうだな。」

いや、驚くべきことだ。到底、元が沙門だったとは思えない。すべてに異叛している。見当違いな怨み、嫉妬だ。こんな自分勝手に瞞りがあるのか。とんでもない浅ましい奴らだ」

そう言っ、飛ぶように移動し、聖剣を針に、乾燥した筋肉の繊維を糸にし、主な出入り口である毛皮の切れ目を縫い合わせた。数秒後に、はたと思いつて、眼窩の洞を垂れ幕のように閉じている瞼の皮をも綴じる。

縫い目から覗く。また未明の、黎明の兆候の時、朝を孕んだ雪の空気が、きつと、晴れだ。などと意識が勝手に暢気なことを想うが、見えているのは恐るべき光景であった。

「人狼だ。何て禍々しい。おぞましい悪鬼のような、憎悪と嫉妬しかない陰険な人間の顔をした狼だ」

イユも覗こうとするが、

「きゃあ！」

激しい衝撃で弾き飛ばされた。

狼たちが中に入ろうとして、猛烈に毛皮の壁に体当たりをしている。しかし、毛皮は頑丈に骨にくっついていて、獣どもが噛みついて引っ張っても、びくともしなかった。彼らの顎の力を以てしても、引き剥がせない。

「怖いよ、イリユーシュ」

がくがくとイユが震えた。イリユーシュは落ち着きを取り戻す。

「どうやら、入って来られそうもないな。これも神仙の加護か」

しかし、安心も束の間。

物凄い咆哮が天地に轟く。狼どもが激しく動揺し、口々に喚く。

「しまった、奴だ。来やがった。已むを得ん、撤退だ、出直した、後でボスとともに来ようぜ」

それを聞いて訝しく思い、イリユーシュはリンレイに尋ねる。

「いったい、何が来たんだ」

「大御所です。説明しても、わからないと思いますよ。どうぞ見てください」

イリユーシュは再び隙間から覗く。

「何が来るんだ、あいつらが怯えるなんて」

小さな隙間から覗いた途端

「うわっ！」

思わず退く。

巨大で寧猛な眼が、こちらをにらんでいた。その凄絶な闘気たるや。雪が溶けて蒸発しそうであった。存在の威圧感が、地の底から轟く重低音のようでもある。

そして再び、物凄い咆哮、すぐ近く、眼の前ぐらいの距離で聞こえ、毛皮がびりびり振動した。

同時に凄まじい体当たり。さすがの巨神なる象の骨も大きく揺らぎ、崩れそうになる。

「やばい、これは、やばい」

イユも怖くても覗く。巨大な白虎だ。長い牙が剣のように外に出ていた。象のように大

きい。

「どうしよう、イリユーシュ」

怯えて泣きそうなイユの顔を見た途端、激烈な闘志が沸き上がった。その沸騰した熱い滾りは豪火となって、臍下丹田から顱骨頂までをぶち抜く気魄へと変ず。

「くっそう、破れかぶれで闘うか」

「無茶よ」

しかし、イリユーシュは聖剣を出す。まぶしい！

「あゝ」

驚いたことに、出した瞬間に剣は光を放って成長した！ 見るうちに、普通の剣の大きさになる。彫も浮き上がり、又は凹み、その見事さ、とても石には見えなかった。

「まただ。大きくなった。ずいぶん、立派になったぜ」

「え、以前にもこんなことがあったんですか。それにしても、見たこともない細工だ。とても美しい。いや、神聖ですらある」

「最初は短剣に似た石だったのに……」

いや、今は、そんなことを言っている場合じゃない。逝くぜ」

リンレイが慌てて、

「いいえ、その剣に何かがあるのは体験で知っていますが、戦うのは無理です」

「そうよ、やめてよ、無茶だよ」

イユも言う。

すると、外から、

「おや、何と人間の匂いをするではないか。まさか篡奪者か。いや、そうに違いない。ええい、憎し、憎し！

うぬああ、おのれっ、おのれっ、我こそが究竟究極ぞ、完璧ゆえに、一切と矛盾せぬ全方向の真実真義、すべてを網羅する全知全能、ありとしあらゆる何もかもとてもかくてもなるに、何奴が神仙の真義を奪いたるか」

イリユーシュとイユは顔を見合わせた。リンレイも、わかっていたことだけれども、歎息せざるを得ない。

イユが言う、

「無茶苦茶ね。もし彼の言うとおりなら、それは誰の、いや、誰と限らず、何者の手にもあるわ。そんなもの、奪えるかしら。何者にも奪えない、どのようにも奪えないわ。」

だって、奪えないことができないから。あゝ、草臥れる。彼って、言ってることが矛盾してるよ」

そんなことも知らず、猛虎は延々と恨み節を。

「あゝ、この憤り、さても憎し、憎き奴們やつばいかな。我こそが神象の肉を喰らうべき者、正統に正義の法の血脈を継ぐべき者ぞ。

おお、愚か者には悟り難し。

おろ癡かな者が喰らうなかれ。その身肉が炎に炙られ爛れるぞよ。

人に悟り難い、完全にして完璧なる真実真義には一切の遺漏がない。万能万全だ。人の誰もが、いや、草木にすらも理解され、それゆえ誰にも知覚し得ない。それでこそ完璧だ。完全なる真理は、完璧で差異なく、教わらずとも誰もが知り、それゆえ誰にも知覚し得ぬ。無空なるぞよ。

いかなる者も、人も岩も水も星も土も草も蜥蜴も知り得る真理をぞ、いかに知覚し得ようぞ。真の無空ぞ。我こそこの究竟究極の真実真義を知る大聖者なるぞよ」

イリユーシユは呆れた。

「どこが聖者だ。行動がまったく矛盾だ。真理に憑かれた亡者だ。ただ、権威・権力が欲しい丈だ。ただの自己肯定欲だ」

「待て、アガメムノン」

そう呼ぶ声があった。彪あざやかな白虎は訝しげに眉を顰めて振り向き、相手が誰だかわかると、低い、唸るような声で応える。古代ギリシャの王の名を持つ虎は、

「ほう、これは。いずこからともなく現れて、森に住むようになった沙門マコトヤ・アマヤス（真兮天易）ではないか。

奇天烈な聖の聖なる狂人よ、何用だ。俺の邪魔をするなよ」

確かにその人物は奇天烈であった。

まず到底、沙門に見えない。

頬髯を広げ、口髭を蓄え、顎鬚が臍まで垂れている、腰まで届く長い髪に、いつも同じフェルト地の尖がり帽（つばが子供用の傘くらいに大きいウィザード・ハットだ）をかぶり、ハリガネのような脚には十六オンスデニムの破れたリーヴアイスを穿く。弛んでずれ下がった蛇側のロング・ブーツ、羽織っているのは青いパステル・カラーの縹子で縫製し

た儀装用のミリタリー・ロング・コート（よれよれだ）、大きな襟とカフスを着けて、口髭で見えぬ唇にキャラバッシュ・パイプを銜え、片眼にモノクル（片眼鏡をした、顎（見えないけど）と鼻先とが細く尖った若い男。

髪をかららかにさらさらと靡かせ、奇人とも言える聖者は、

「小生、敢えて言うぞ。敢えてな。敢えて、だ。

さても生命を得てこそ、叡智も受け継がる。生命は生の奥義である。明晰なる魂である。死肉を食らって何とするや。しかも、既に骨と毛皮を遺すのみ。慮れよ、偉大なる聖人が血肉を残すものは。

マガダの生命は、もはやそこにはない」

神象となった聖者の名は「マガダ」ということをイリューシユは知った。リンレイに訊かなかった自分らも迂闊だったが。

疑り深い狡猾な面持ちで、猜疑に満ち、アガメムノンと呼ばれた白い巨虎はマコトヤをねめつけた。

「なるほど、一理あらん。俺も阿羅漢に至らんとする修行者、どうしてそれを解さずにいるか。浮足立った狼どもに、狼に堕ちた修行者どもに唆されてしまったわい。

ふむ。おまえの言うことも、もつとも。しかれども」

「しかれども？」

「しかれども、かつての修行者仲間の亡骸を不法に占拠する者を見逃してはおけまいぞ。さにあらずや」

マコトヤはわざと、さも驚いた表情を做り、

「まださようなことを。

中に人がいるというのか。ふ。

もし、そうならば、死に際のマガダがこの厳しい環境を凌ぐため、自らの亡骸を使うよう殊に勧めたものであろうよ。

アガメムノン、聖なる遺志に逆らうか」

「マガダがさように言ったかどうかは見てもおらず、確信できるものは。それが科学の精神、正しき明晰判明なる精神ぞ」

「疑ごうてばかり。論はかり正しくとも、あまりに執拗なるは既に不正だ、小人。論など、おもちゃと同じ。如何ようにも構築できる」

「真偽正悪を糺すは求道者の務め。はてさて、何を言わんや」

イリユーシュが毛皮をめくって出て来る。

「やい、黙って聞いてりゃあ、浅ましいことばかり言いやがって。俺はな、マガダから使つてよいと言われたから使っているんだ。そのマコトヤという人の言うとおりさ。

やいやい、アガメムノンとやら、仲間の肉を喰らおうとしたくせに、何を言うか。いやさ、おまえが言わんとすることは、もうわかる。

証言は証拠にならない、言う丈は誰でも自由にできる。この俺がマガダに言われたのは俺とマガダしか知らない、確かめようがない、だから、疑わしい、とな。へ、おまえが言いそうなことさ。

俺の眼を見よ。真実が燃えているぜ。それでも疑うなら、もう何もない。論争は無駄。いざ勝負だ」

そう言つて、龍肯の聖剣を懷から出した。アガメムノンが眼を丸くした。

「おお、それは、まさしく」

しかし、言葉を止め、狡賢くイリユーシュの顔や眼の色を観察し、吟味し、分析した。

「そんな奇妙な石を、どこで手に入れた」

「ああ、これか。拾ったんだ。洞窟で」

「どの洞窟だ」

「この山の向こう側さ。垂直の絶壁の途中だ」

「そんな馬鹿な、あり得ない」

「なぜ」

「いや、何でもない」

「何か知っているな」

イリユーシュは嘲笑にも似た笑みを泛べる。アガメムノンはますます訝しがった。眼を細めるも、恍惚^{とほ}けて、

「いや、何も知らん。知るものか、何を戯けたことを。知って堪るか、いや、絶対に知らんぞ、疑うな」

「疑っているのはおまえ丈だ、臆病者」

「何を！」

いや、その石だ。いや、どうだ、どうせ拾ったものなら、俺にukれないか。ただとは言わん、うまいトナカイの肉をやろう。塊でな」

「肉持ってたんだ？ 破戒僧かよ。」

そんなもの、いらなげ。自分で狩る。依拠しない。自在がよい。自らを由とし、自らに因って在る。そうでなきゃな、楽しくないぜ」

と言つても、狩りはしたことがない。

「それならどうだ、俺のこの見事な尻尾をやろう。この美しい彪あざやかな模様を見よ。高く売れるぞ」

彪とは虎の毛皮の縞模様が鮮やかなさまを言う。

「へえ、商売がこの世界にもあるんだ。人もたくさんいるのか。もしかしたら村や町があるのか」

「むろんだ、なあ、そんなことはどうでもいい、これでどうだ、俺の毛皮をやろう」

「それじゃ、おまえは生きたまま皮を剥がれ、終いには苦痛のうちに死ぬ丈じゃないか。おかしいことを言う奴」

「そんなんことは構わん。それが欲しい」

「本音が出たな。バレバレだぜ。」

へえ、そんな価値のあるものなんだ、これが」

「た、頼む」

イリユーシユは呵々大笑した。

「そこまで言うなら、可哀そうだ。くれてやろう。どうせ拾ったものだ」

「イリユーシユ！」

イユが慌てて止めようとするも、イリユーシユは無造作に虎の目の前、雪の上に、ぽいと投げた。白虎が飛びつく。

「よせ、慮った方がよい、アガメムノンよ」

マコトヤのその忠告も遅い。聖剣を牙で捉え、口に咥えた途端、アガメムノンは、

「ああ！」

と叫び、昏倒した。

イユが、

「これって、聖なる物を邪悪な者が触っちゃって、どろどろに溶けちゃったり、石になっちゃったり、塩になっちゃったり、燃えちゃったり、炙られ爛れちゃったりする、っていうパターン？」

皮肉な笑みのマコトヤは、

「いや、その可能性はない。ないが、念のため、アガメムノンを止めた。結局は、止めて

「正解だったようだ」

虎の表情は安らかだった。

見る見る姿を変え、凛々しい若者に変ずる。

イユが尋ねる。

「もしかしたら、これが虎になる前の、元の姿ってこと？ まあ、古代ギリシャの彫刻みたい。イケメンね」

「葡萄酒色なす海」

マコトヤがそう口ずさむと、イリユーシユの頭に、黒地に線画が神話を描く古代ギリシヤの壺絵が想起される。

「さよう。」

元々の姿だ。なかなかの美青年、身の丈は普通の人の倍以上。怪力は天下無双で、五百kgもある猛牛を、片手で持ち上げて、投げ飛ばしたこともあるという。

軍人だった頃は、一人で千人の兵を斃すほどの猛者だったと聞く。

世界最強のうちの一人だろうね。

祖先は元々、北大陸の南沿岸部の王族で、誇らしい王家の面影を残している。ふむ、名に相応しいという訳か」

歴史を思慮しつつ、マコトヤが静かに言葉を紡いだ。

その説明に違わず、金髪を豊かに垂らす、胸板の厚い、丸太のように二の腕が太い若者だった。筋骨の太さ、頑丈さは丸太や巖の類である。突然、吃驚したように眼を開けた。

「俺は、いたい」

立ち上がる。見上げるように大きかった。

「闘わなくてよかったぜ」

イリユーシユがそうつぶやくと、マコトヤすらも笑った。イユが突っ込む。

「もう、何言ってるの、虎のときの方が獰猛そうで怖かったわ。大きさだって、たぶん変わんないんじゃないの」

アガメムノンはぼんやりしている。空虚な眼が雪の上の聖剣の上に留まると、

「うわっ」

叫んで後ろへ飛び退いた。

「うわあああ、た、助けてくれ、赦してくれ、あゝ、何てことを、俺は」

「どうした、何があったんだ」

イリユーシュは訊く。

「恐ろしいものを見た」

「何を」

「荒野だ。何もない侘び寂びた場所だ。とてつもなく広くて、どこまでも透明で、果てがない。果てがないものを初めて見た」

「果てがない？」

イリユーシュのその疑義には、マコトヤが応じ、

「なるほど、それを見たか。よきかな。何、わからない？」

そう、たとえば、空に果ても仕切りもないが、どこまでも続いているとは言っても、我々の眼には青い壁がある。

同様に、無限の透明とは言っても、それを頭の中に思い泛べるときに、我らは自然に、無意識的に、銀色の背景を置く。本当に無限の透明を想像できやしないもんだ。

だが、それを見てしまったら、どうなると思うか」

「なるほどね、何となくわかった。確かにそうだ」

イリユーシュが同意する。

アガムノンには、それは聞こえていないかのようにであった。

「上下もなかった」

「上下がない？」

「左右もなかった、前後も」

「何だか最近、経験したな。おまえはその経験なしで、ここまで来られたのか」

イリユーシュがそう言うのと、マコトヤがまたも補足し、

「人によって、異なるさ。時代によっても。」

選ばれた者にしか超えられない試練もある」

これもまたアガムノンには聞こえていないようであった。

「初めて見た。どこにも確かなことはなく、頼れる場所もない。溺れるよりも、途方もない溺れ、足掻き、藻掻き。足掻いても、藻掻いても、あゝ、何もつかめない、手応えもない」

イリユーシュは腕を組んだ。

「つまりは、現実を垣間見たってことだ」

筋骨たくましい巨漢は大きな手のひらに顔をうずめた。

「あゝ、真実も真義も真理も虚しい。何もかも現実でしかない。現実、どこまでも、捉えられない無色透明の。」

あゝ、悟りも名誉も虚しい。龍背の聖剣など得ても、何の足しになろうか。魂の救いは、どこにもあり得ない。在りようがない。在り方があり得ない」

第五章 危機を前に迷う余裕はない、心の機らきに遵え

アガメムノンは土石流の跡のように雪の上にしゃがんでいた。モニュメントのように、人が脆いことを告げる、継ぎ接ぎだらけの旗のようであった。

しかし、その双眸の奥底には、微かに叡智の光があった。それは失墜によって何かから解放された、生命の自由の兆しの萌芽であった。

とは言え、実存的には、トーガ（古代ローマで着用された上着。一枚布を巻いてドレープ（巻いた布を弛ませて做る襞）をつける）の上に虎の毛皮を巻いている丈で、とても寒そうに見える。

「中に入らないか」

ところが、アガメムノンの体が大きすぎて、あばらの間や、眼窩の穴からは入ることができない。背後は骨盤があつて入れないし、あばらと骨盤との間には折りたたんだ足があつて、やはり入り込めない。どうにも外れない智慧の輪のようであった。

「これ、ダメだよ、無理！」

イユは早くも匙を投げた。雪の上に尻を突いて空を見上げる。

マコトやは他人事のようにニヤニヤしている丈だった。

「そうだなあ」

何かできないか、神象の周りを廻りながらも、同意する。雪を踏むザクザクという音丈がする、静寂のみであった。

「困ったなあ、本当に」

イリユーシユも困り果てた。

「すまん。俺のような者のために」

すっかりしおらしい。

それを見ては、イユも可哀そうに想い、

「可哀相ね。虎だった時なら、大丈夫だったでしょうけど、人となって、その姿じゃねえ、凍えちゃうわ。きついよね。どうしようか。」

この白い神象の聖堂もね、大きさは十分なはずなんだけど、入り口がねえ、ないのよねえ。どうしよう。

材料があれば、新しくテントみたいなものを作ってもいいのかも」

「ぼんぼんと気分で簡単に言うなよ、俺は棟梁アルケーじゃねえぞ。物事ってものはな、そうそう簡単にいくもんじゃねえんだぜ」

「あなたに言われたくないわ」

「本当のことだからな。地道に、よく考えなきゃ、実現しない」

「そりゃそうね。ねえ、こんな一般論、繰り返しても虚しいわ。何も解決しない」
埒の開かぬ会話にやれやれという顔で、マコトやは、

「さて、さりとて何かとでも、入れてやるべき姿なれども、実際、入らないものは仕方ない、か。うむ、実存は本質に先行してしまったなあ。さて、やはり別宅しかあるまいよ。解決できぬものを論じても、仕様がな」

イリユーシユは現実とは面倒臭いものだのと頷きかけたが、はっ、とした。

マコトヤの言葉が終らぬうちに、いくつもの遠吠えが聞こえたからだ。不気味な、異様な、戦の法螺貝の響きのようにも響き、悲しげでもある獣の長咆え。背筋に寒気と戦慄が走る。

不安と緊張が空気を蓋った。

畏怖に由来する憤怒を覚えつつも、イリユーシユは髪靡かせ、身に込み上げる魂魄の横溢を感じ、敢えて悠々と見回す。

「ちっ、もう帰って来やがったぜ。嘘じゃなかったんだな。嘘でもよかったのに」

呵々大笑。

リンレイが蒼白になる。

「人狼どもですね」

その言葉と同時に、白い雪の上に、白っぽい灰色の狼たち、虎のように大きな、禍々しい人狼どもが次々と現れる。

その中には、数十のオークの群れが混ざっていた。粗末な毛皮の鎧、黒く、毛の生えた、赤い眼と黄色い牙を持つ禍々しい亜人種。

さらには、巨魁なトロールも数匹。体に苔や草や低木を生やし、糞掃衣をまとった体は

異臭を放ち、不揃いな歯と小さな頭、落ち窪んだ暗く小さな眼、癡かさそのもの。さまざまなトロールの種族の中でも、最も凶悪な類だ。

「何て汚らしい、おぞましい者たちなの！」

イユが恐怖で半ば憤りながら叫ぶ。リンレイも杖を構える。

しかし、イリユーシユは違うものを見ていた。

「おい、あれは何だ」

その時、アガメムノンはむっくりと起き上がった。危機に瀕して気魄が甦ったのだ。イリユーシユが指差すものを見ようとする。

その指の差す方向には、翼のある獅子、黄金の大蛇を絡ませた黄金の獅子がいた。咆哮が地を揺るがす。鬣はとても長く翼以外の全身を覆う。風もないのに棚引く。

アガメムノンは言った。

「おい、あれがマハールシャだ。最も苦行した苦行者であつた。いつしか生命の黄金の理論に囚われ、あのように変じたのだ」

「生命の黄金の理論？」

「生命は正しい。生命感が正義の基準であると考え、強く美しい者が正しいと言い始めたんだ」

「間違っていないな」

「しかし、それは自己肯定のためだった」

「仕方ないだろう。人の営みはすべてそれだ」

イリユーシユは懷に戻した聖剣を再び取り出した。

アガメムノンも金の鍔が打たれた革の鞘から大剣を抜く。牙が太い剣になったのである。なったというよりは、戻ったと言うべきか。元々それは彼が軍人時代に有していた剣で、冗談のように大きく幅広で、半ば伝説となった『アガメムノン』という剣であつた。彼の綽名の由来である。キラリと照つた。

マコトヤが言う。

「嫌かもしれないが、イユ、あなたは中に入った方がよいだろうなあ」

「いやよ、イリユーシユが」

「さもありなん。思ったとおりのことを言う娘だ。大丈夫さね。二律背反する力が来るから。止揚（アウフヘーベン）さ」

「え？」

言葉と同時に、ミサイルのような火矢が次々と飛んで来て、狼たちを殺傷する。

「え、何なの！」

イユもイリユーシユも驚く。

その矢の大きいことと言ったら、矢と言うよりは太昔、モーヴィーディックを狙った銚のようだ。太くて一メートル以上の長さだ。

「誰、どうして、味方？」

イユが矢の飛んで来た方向を見ると、山賊のような、異様な風体の男が二人。

一人は顎鬚を蓄えた巨漢で、熊皮を羽織った身に大中小の肩掛け革鞆をいくつも下げ、道具や武器を満載。鹿皮の太いベルトにも、さまざまなアイテムを下げ、袖なしの羽織にはいくつものポケットがあつて、細かい器具が溢れんばかり。背負ったリュックも荷物がぎっしり。

独り軍隊と呼ばれるリヨン（璃与御）・アルド・デ・ヴィンチ。

機械装置と言つてもよい、途方もない弩であつた。野戦砲のように櫓に乗せて、二頭の大羚羊に牽かせている。

ちなみに大羚羊とは、現象世界にはいない羚羊の種で、ヘラジカのように大きい、ニホンカモシカのように山岳地帯の岩の崖を軽々と上り又下り、自由自在に移動する。

オタクらしからぬ朗々たる声で、

「そうら、喰らえ、うらあ、やつちまえ」

さらに物凄い太弩があつた。

その矢の長さは五m。鉄製で数百kg。それが三本同時に発射できる三連射式。梃子の原理と、大小の歯車の組み合わせで、鋼鐵の線を擦った特製の弦を巻き上げる機械だ。弓の長さは四m。これもまた、四頭に牽かせていた。到底、山賊の輩の製作ではない。

マコトヤが言う、

「ミカエロ（美香叡臣）・アンジェロという男がいて、天才なのさ。元々は宮廷に仕えていた。彼があれを造ったのさ。正確に言えば、リヨンという男の企画を実際の設計にした、ってこと。

撃っているのがリヨンさ。武器マニアで、操作やメンテ、製作に通じている。しかも見たとおり莫迦力の持ち主だ」

超弩級の大弩の矢先には動物の脂が塗られた薄布が巻いてあり、火が点されている。火を点している無精鬚の痩せた男がミカエロだった。暗鬱な、どこか狂気を帯びた眼、濃い

栗色の長髪は艶やかで毛が太い。元は立派であったと思われる革製の鎧を着用し、

「撃て、撃て、撃て」

狼たちは逃げ惑うが、マハールシャ丈が飛び出し、砲撃のような矢をもとめせず、イユらを直撃しようと雪を蹴散らせ、急斜面を猪突猛進し、向かって来る。

怒涛のような怒りを漲らせ、突如勇躍するアガメムノンは歯噛みし、胸を叩き、

「うぬ、来させるものか」

豪傑英雄の激突。振るう太刀を牙で受けてねじり折ろうとするも蹴り斃し、踏みつけつつも串刺しにせんとすれば、黄金の大蛇が絡み締める。あばらも折れそうな力なるも、アガメムノンの無双の怪力、引き離す。されども、それはまた獅子なるマハールシャが離れ、間合いを取ることに繋がり、必殺の機を逃す。

再び両雄激しくぶつかり合えば、天も地も震え、鳴動した。

イリユーシユが心配するのは、

「大丈夫か。雪崩が起きるんじゃないか」

マコトヤは落ち着いている。

「この斜面、イヴァント峽へ落ちる広大なる斜面は、未だかつて雪崩なんて起きたことがない。神懸かりじみた偉大な奇蹟だが、事実だ。

壁のように南北に長く続く山を見よ。この山の嶺を」

イリユーシユは何かを感じた。

「ううん、よく見りゃあ、こりゃあ、まるで長い龍の背だな」

ほお、とマコトヤはふざけた顔で感嘆して見せ、

「なるほどね。何かが、おまえにさように観せしめるという訳だね。ふむ、ふむ、まさに、そのとおり。この脈々と続く一個の山は龍神の背と呼ばれている。

またの名は東の壁。アカデミア天領の東の国境線であり、中心たる聖都アカデミアの東に当たるからだ。東は青龍の方角だから、理に合う。

本来、盤石。実際、永遠に盤石、かつてはそう言われていたが」
そう揶揄して笑う。

「かつては？」

「さよう、かつては。

今や、物質主義が蔓延し、永遠であったものが永遠ではなくなった。まあ、それも時節つてもんだがね。

時間や空間さえも、絶対的に一定なものじゃない。延びたり、縮んだりする。相対的な存在なんだ。それと同じさ」

「少し筋が違わないか。意味が通じないぜ」

「構わんさ、些少な事など。」

さても、物質主義は、神聖シルヴィエ帝国の台頭が最たるもの。

この国は、聖イキ教を中心に、数千年前からあったが、四、五百年前から、大いに侵略征服制覇の国となって帝国化し、国土を拡大、北大陸の大半を占めるようになってしまった。

特に、ここ数十年、爆発的に科学を発展させた。

すべての国々が弓と剣と槍で、騎馬戦の一騎打ちをする中、巨大空母に音速で飛ぶジェット戦闘機を積み、大陸間弾道ミサイルで威嚇し、七十七億の人口を背景に、予備隊含めて十億の兵から成る軍を擁し、世界最強最悪の宗教軍事国家となっている」

「到底、太刀打ちできないじゃないか。」

むしろ、彼らが世界制覇していないのが不思議なくらいだ」

「アカデミアの力つてもんさ。」

知っているかもしれないが、ここは真如の世界ってことになっている」

「知ってる。」

リンレイも言ってたし、俺たち自身も、俺たち自身そのもので、それを覚っていた」

「精神の高貴と正義と真理への通暁が最大に力を振るう（はずの）世界だ。」

アカデミアの真理の灯火が潰えない限り、物質科学実証主義が絶対専制君主として権威を天下に振るうことはあり得ない。

実証主義は有効な思想だが、大いなる欠点がある。我らが見る世界が、確かに見たままであるということを前提にし、それを無条件に是認している。

しかしながら、それを証明することは、論理的な思考法に依っている限りに於いては、論理的な思考法に起因して、未来永劫に不可能になる」

「へえ、何でだ」

「論理思考は規定する。実証とは、客観的な、かつ証明済みの方法によらなければ、信用に足るものではないとする。だからさ。」

ところが、我々は思考と観察が正しいかどうかを証明していない。しかしながら、思考と観察を使うしか、証明の方法を持っていない。

ふ、笑える。どうにもならない」

「なるほど、絶対無理だな。」

論理思考は論理思考の法則によって、絶対矛盾のアンチノミー（二律背反）に陥っている、ってことか。ふうん、言われてみれば、そうかもな。

で、アカデミアがそれを超越して屹立しているという訳か」

「この東の壁をジェット戦闘機が越えられないのも、高さや上昇気流のせい丈ではないってえ訳さ」

「龍神のご加護か。」

いつかは行ってみたいものだな、アカデミア」

「あゝ、それまで篡奪されないことを祈ろうぞ」

「何だって？」

ぐわっちゃ！ ごん！ ぐをわわん！ 重くて硬い物と物とが激しくぶつかり合う音にすべてがかき消される。

「どうおっせえええいいい」

「うおりゃあああああ」

アガメムノンとマハールシャの闘いは、あたかも関羽雲長と張飛翼徳とが闘うかのようであった。ぶつかるたびに天地が揺らぐ。

その間に弩のミサイル攻撃で、忠誠心のないオークは逃げた。標的になりやすい、巨大で愚かな트롤ルは斃れて雪に沈む。

人狼は射程距離を推し測った。退いて遠巻きに見ている。近づいてくる様子はなかった。イリユーシユは訝しむ。

「しかし、何であいつらは俺たちの味方をするんだ、あの弩の二人」

「リヨンとミカエロのことかな。味方じゃないね。山賊の一味だが、伝説の聖なる剣を奪うために、山賊を離脱して来た。それ丈さ。二人丈のものにする気であろうよ」

「伝説？ そいつあ、知らなかったな。でも、何で聖剣のことを知っているんだ」

「むろん、小生が教えたから」

「何で、おまえは知っているんだ」

「マガダが夢に出て、告げた」

「何て世界だ。」

やい、その言いつぶりじゃ、奪いに来るであろうことも予測できてたんだろ？ なぜ、

奴らに教えた」

「マハーラーシャが来るから。アガメムノンじゃ、役不足の可能性がある。ま、そんなふうにも思ってみた訳だね」

「マガダの肉（ないけどな）を狙う奴らと、聖剣を狙う奴らをぶつけたって訳か。何でもお見通しだな。諸葛亮孔明みたいな奴だ」

「光栄だ。」

アウフヘーベン（止揚）さ。相剋する者を対立させ、昇華する」

「孔明じゃなくてヘーゲルか」

「さ、そういう訳だ。では、いよいよ鉄を金に変える賢者の石の出番でござい」

「何だって？ 錬金術か？」

「ふ。わからぬか。さあ、剣を抜いて。では、イユ、聖句を唱えよ」

「え？」

「イリュージュの持つ、あの聖なる龍肯剣は、あなたの聖性によって昇華する。あなたがあの剣のフリダヤ（心臓）ってえ訳だ。」

又は補充し合っている。小生にも詳細不明だが。研究途上ってどこかね、かんらからから」

笑うマコトヤ。

イユは眼を瞠った。

「どうということ？」

「いや、わかつているはず」

「でも、何をすれば」

「陀羅尼を、どうぞ。真咒、真言、マントラ^{Mantra}、心咒、明咒、神咒、いずれにせよ、魂が希うものを、機らしきを心鏡に映し、噛み選りわけて味わい、呼び覚まし、唇に乗せて空に泛べよ」

イユは遠くを見た。遙かなる彼方を、この世を超えた彼岸を。振り向くと、アヴァと眼が合った。幼女の双眸は光線を当てたダイヤモンドのように燦燦としていた。あゝ。彼女はわたしを導き援ける、神の精髓。観自在菩薩の御魂。言葉にならない神代の考概で天啓を授ける。

イユは覚った、何をなすべきかを。

「ぐわふてゐ」

つぶやく。

「ぐわふてゐ」

二つ目は、ようやくつぶやく感じであった。

堰を切ったように言葉が続く。

「ふわらぐわふてゐ、ふわらさむぐわふてゐ、ぶをでひゐ、すうわあふわあ」

読み方は人口に膾炙したものと異なるが、これは「羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅羯諦 菩提薩婆訶」、すなわち、般若波羅蜜多心經の陀羅尼であった。

イリュージョンの懷から光線がはみ出る。まるで衣の下に、太陽を隠してでもいたかのようであった。出す。

「とうわあっ！」

一瞬、すべてがホワイトアウト、いや、ゴールドアウトした。光が落ち着くと、剣は鉄に変じている。

すべての衆生は驚愕した。それまでは、アガ멤ノンとマハールシャはこう言っている。アガ멤ノンは、

「すべての価値はツクリモノだ、捏造だ。捏造という言葉も、空虚という感覚も、無という考概も。

名を冠すべき当の本質はない。それそのものがそれたるべきアイデアはない。無のアイデアもない。無ですらもない、現実丈しかない。

恐るべき空莫、あゝ、空莫などと生易しい、実にリアル、現実であった。執著を持つ者は一秒とても生きられない、堪えられない。現実、この道なき道しか道はない。平常道、名もなきこの道しかない。

臨機応変せよ。一向に『生の横溢』などと言うは、片鱗でしかない」

「およそ愚かなことを。

ならばこそにあらずや。ならばこそ、心が真に希うものに遵いてあれ。信すべきは心の機らき。生けとし生けるものは生を求める。欣求する。渴仰する。単純な事実、太く強い真理。

一度、是非を諸とも捨てよ、畢竟、考概を捨てよ。その枷から解脱し、自由の空気を胸いっぱい、吸えよ、味わえよ。解放されたるの爽快を覚えよ。さすれば、自ずと道は晰らかならん。睿らかならん」

重機装甲戦闘車輛のようにぶつかって斜面を揺るがし、闘いいつも大論理をもぶつけ

合っていた二人の超弩級の大豪傑は聖剣の光にぶっ飛んだ。「うわっ」「あひゃあ」

その滑稽なさまを見て、腹を抱えて笑うイリユージュ。

「あはは、おかしい、おかしい、英雄も所詮は人か。あはは、その吃驚した顔。聖人も酔を吸えば酸っぱい顔をするというが、まさに、さもありなん。

ちよっと、聞けよ。

古代中国の南北朝から隋の時代を生きた禅僧、慧可は疑念を解けずに煩悶していたが、嵩山の少林寺にインドから来た達磨大師がいると聞き、大師に自らの覚悟を見せるために腕を切り落とし（雪中断臂）、命懸けで問うた。

だが、心が苦しくて堪らないと言う慧可に大師は「ならば、その心とやらを出して見ろ、たちまち解いてやる」って感じのことを言ったらしい。すると、どうだろうか。摩訶不思議、慧可は苦しみが解け、頓悟したらしい。

同じ科白を言っても、時とところが違えば、効果はなかっただろうよ。それが機らきというものだ。今、俺もそれを実践してやる。

俺は何も知らんし、わかっちゃいけないけどな。だが、結局、そういうことなのさ」

何々大笑。大股で歩き、雪上をずかずかと進み出て、豪傑の間に立った。

聖なる龍肯剣を挙げる。それは既に立派な鉄の長剣となっていて、複雑精緻な彫で燦燦とし、神剣と言うに相応しかった。

「そりゃっ！」

剣を雪に突き刺して立てる。

「どうだ」

アガメムノン、マハールシャは、それぞれ聖剣の東西に立っていたが、崩れるように雪に膝を突いて埋めた。

「マハールシャよ、正しく聞けば、おまえの言うことは正しい。正しいも、間違いい、とてもかくも、であるが」

「アガメムノンよ、正しく聞けば、おまえの言うことと俺の言うことは同じだ。同じも、異なるも、とてもかくても、であるが」

その不可思議な有様を遠く見ていたリヨンとミカエロは勇躍し、

「そら、聖剣だ。奪えや、奪え、あははは」

イユがそれを見て焦る。リンレイも杖を構え、

「あ、ダメだ、来ちゃうよ」

マコトやは微笑み、

「まあ、見ていなされや」

イリユーシュも微笑して待った。

熊皮を羽織った武器オタクのリヨンが弩を持って、イリユーシュに狙い定めつつ、歩み寄りながら、

「さあ、その剣を寄越せ。じゃなきや、撃つぜ」

「やれるもんならやってみな、なーんて、安っぽいセリフは言わないぜ。ふ。そうかい。ほらよ」

イリユーシュは剣を雪から抜いて、巨漢リヨンと瘠せた黒髪無精ひげのミカエロの前に擲った。

「いい子だ、へ、もらったぜ」

ところが、二人とも聖剣の傍にいざ近づく、途端に崩れるように雪に膝を突き、感涙を滂沱のごとくし、

「あゝ、素晴らしい」

「心が清み明けく」

と言った切り、しばらく諸手を突いて臥せていたが、

「このようなものを俺らごときが扱えません。どうかこの身を、聖なる龍首剣を護るお役に立てさせてください」

イリユーシュは心得顔で欣然と微笑んだ。

「よからう」

そして、人狼の方を見遣る。

「おまえらは、どうだ」

すると、その言葉に呼応するように、いかなる愚劣者にもわかるように、聖なる龍首剣は自らに於いて自らを顕示し始めた。自由自在ということ。光あふれ、こぼれ、漲り、満ち、終に光を花火のように打ち上げた。

聖剣の光輝はイリユーシュの頭上で、炎となつてから、直径十mの円形と三角形と菱形と四角形の三次元的な組み合わせで成される、聖なる黄金の紋を象った。その周りを衛星のように、聖句がいくつも廻り、中央には龍文字で構築された龍首の文字を安置し、荘厳した。

驚くべき奇跡が起こる。

人狼は皆畏れ、崇高さに打たれ、崇拜して平伏し、見る見る間に人の姿に戻った。人狼は沙門に還ったのである。しかしながら、狼の野性をも多分に残していたので、人狼沙門とも呼ぶべき存在となっていた。

マハールシヤは黒い髪と黒い鬚を伸ばした野蛮な大豪傑の人となって、聳え立っている。ぎよろつとした大眼玉で、非情冷厳な荒神のごとく昂然と頭をもたげ、野性に渦巻く黒髪を、暴流のごとく靡かせ、天を衝く威風たるや、人に非ず、明神か神霊のごとしであった。そんな魁偉な大偉丈夫がイリユーシユとイユと聖剣の前では、怒れる神の前に平伏す人のように狼狽えるのは、滑稽なほどである。

かくして、イユとイリユーシユはたちまち多くの仲間を得た。仲間ではあるが、畏怖と崇神の念によって、アガメムノンもマハールシヤ以下も、ミカエロもリヨンも、皆イユとイリユーシユとを鬼神であるかのように畏れ奉った。

そのような畏怖も、崇敬も、面倒臭そうに振り払って、イリユーシユは首を捻り、マコトヤに尋ねた。

「何だか煩わしいことになったなあ。

いや、さても、それはともかくも、さっきの話が気になっているんだぜ。説明してくれるんだろうな、俺やイユが無関係ならともかくも」

「あゝ、そうだと。お前たちが無関係なはずもない。すべてを話しておかなければ、いけなかった。そう、むろんだ、話そう。

そもそも、シルヴィエは常にアカデミアの征服を画策していた。当然であろうぞ、物質世界で頂点に立つても、このIE（イデア・アース）では、精神世界で頂点に立たなければ、根本からの把握、心底からの納得、真奥の獲得、神髄の会得ができないゆえに。

実際、先の大戦で物理的に圧倒的に有利な状況下にありながら、シルヴィエはアカデミアの守護者であるクラウド連邦に壊滅させられている」

「復讐、野望、いいね」

マコトヤは肩をすくめた丈だった。言葉が続ける、

「最近、コプトエジヤ（世界最古の国。古王国と呼ばれ、各国から崇敬されている）の友人の手紙でわかったことだが（それもあって、ここに来たのさ）、彼ユリアスは言う、『アカデミアの大いなる力となるアイテムを彼らは狙っている。それも何十年も前から、計画

されていた。この時代に出現することも知っていたようだ』と。

小生も天文占星で、その動きを臆に感じてはいた。我がアマヤス（天易）家は代々天文占星の家柄だからな」

「それって」

「そうだ、聖剣のことだ」

「そもそも」

「この聖剣は何だと、イリユーシユ、おまえは問うか」

「そのとおりぜよ」

坂本龍馬を真似たつもり。

「教えよう。一般論だがね。シルヴィエなどは、恐らく、もっと具体的な情報を持っている。そういう前提で聴くがよい」

マコトやは雪上の戦いが先ほどもであった場であるにも拘らず、大学の講堂で特別講義を行う学長のように威を糺した。

「この広大なアカデミア天領の極北に、アカデミアの坐するイデア山以上に神聖と言われる山がある。それが眞神山だ。世界一高い山で、標高四万四千四百四十四m。

全面垂直の絶壁で、そう、通常の山のように円錐型ではない、立方体に近く、麓も頂上も、水平に切ったときの面積は同じだ。（ちなみに、アカデミアのイデア山もそれと似ているが）

その頂上には磐代があり、天之眞神巖と呼ばれるが、そこに龍の形をした縦の亀裂があり、それは彝龍之裂と呼ばれている。※イ（彝）は不可説の聖なる語（文字）である。

永遠不動で絶対に毀たれることのない巖だが、もし、それが缺し、人の手に渡る時、聖なる剣になると言われていた。それが龍肯の聖剣だ。

聖なる龍肯の真理に基づく神聖を帯びた剣。龍肯とは、龍のごとき肯定という意味だ。人間のそれではない。

龍のごとくに大いなる、無際限な肯定という意味で、人間には理解できないとされている。

もつともなことだ。無際限な肯定は人間には知覚し難い。二律背反するものが互いに矛盾なく肯定される。一切と対立しない、矛盾しない、差異がない、（結果的に）特性がない。あたかも、現実 に於いて、すべてが現実として存在するように。

知覚し得ないそれを知覚し得るかたちで顕現し、具象せるもの、それが龍肯の聖剣であ

る」

「ただ、洞窟で拾ったただぜ。信じられないな。だって、なぜ、あそこにあったのか。眞神山は、きつと遠いだろう？ 飛んで来たのか？」

「逆に、それがいかにも龍肯的とも言えなくもないが。」

確かに、眞神山は、ここから遙かに離れている。しかし、悠久の時間の流れの中、さまざまなことが起こったはずなのだ。現実には現実ではない。

摩訶不思議の因縁で、長い歳月を経て、洞窟までたどり着いても、まったくあり得ない話ではない。起こったことは、まさに起こったのだ。

不可解ではあっても、それが何であろうか。事実、それが眼の前にあるのだ」

半信半疑の顔で、イリユーシユは考え考え言う、

「超絶の力を得るために、この剣を欲していると言うのか、奴らは」

「だろうね。少なくとも、超絶の力があること丈は確実だ」

「もし、この剣がその剣ならば、奴らがこれを求めるのも、あり得ない話ではないが」

「神聖シルヴィエでは、百年以上前から、聖剣について研究機関によって多方面に調査研究されている。しかも、篡奪者はシルヴィエ丈ではない。スパルタクス帝国の動きも同じだ。」

スパルタクス帝国はシルヴィエの情報を、どこかでキャッチしたか、或いは意図的に情報をつかまされ、利用されているのか、いずれかであろう。彼らスパルタクスのアカデミア侵略の理由も聖剣なのだ」

「侵略？ そんなことが起こっているのか。何てこった。巨大な力が二つまでも。」

「どうしてよいのか、見当もつかないな。コプトエジヤの手紙にヒントはないのか」

「彼（ユリアス）も詳細を知る訳ではないからな。無理であろう。コプトエジヤの長老や王ならば、もっと何かを知るかもしれないがな。」

このことは、秘中の秘らしい。数十年前にシルヴィエの調査団が非公式に古王国コプトエジヤに来たこともあると言うが。

むろん、聖剣に関して調査したらしい。調査の結果、シルヴィエが何を知ったか、それはユリアスにはわからないようだ。

王族でも深奥の一部のものしか知らないとのこと。ユリアスは王族だけでも、庶子だからな。限界がある。彼の身の安全を思えば、無理強いはできない」

「不詳不明か。ふふ、ともかくも、かなりヤバいつて訳だ？」

「さよう」

「ふ」

鼻先で嘲りながらも、イリユーシユは突如、表情を曇らせ、

「イユは」

少し悲しげな声であった。

「ついてないな」

青い空を見上げる。

ただ、青い丈だ。

「おい、聞いたかい」

ゼイゼイと雪を掻き分けながら、なりふり構わず逃げまくる老婆のような顔のオーク。その醜さ浅ましさ。涎、凍水、長年の汗が腐敗した体臭、糞のような息の臭さ。兜はずり落ちて、耳に掛かっている。

「あゝ、確かにな」

相方も太腿に尿を漏らしていた。もう一人の極端な金壺眼のオークも、

「俺にも聞こえたぜ」

オークの聴覚や嗅覚は動物のように鋭い。百数十m離れた場所で、逃げ惑っているようにも、イリユーシユとマコトヤの会話は聞こえていたのである。

「おまえ、知っていたか」

出張った頬、天狗鼻、縮れ髪のオークが豚鼻のオークに訊くが、豚鼻は、

「へっ、知るもんか」

老婆のようなオークは窘めるように、

「だがな、凄い宝のようだぜ」

豚鼻も同意する。

「ちげえねえ」

天狗鼻もそう同意し、金壺眼も、

「だな」

「ともかくも、今は生き延びようぜ」

老婆のようなオークがそう言って話を打ち切る。

「言われなくとも体が解つてらあ、俺の指示なんざ、必要ねえのさ」

さて、そんなことは知らず。イリユーシュたちは考え、歩む。
黒き長髪のミカエロが進み出て来て、言った。

「山賊どもが（昨日まで自分らも山賊でしたが）間もなく来るでしょう。我々のいなかったことに気がついて、何事が起ったかを悟るでしょう。

畜生にも劣る彼らにすら、知性はあるのです。知恵があるのです。何て始末の悪いことか。

たとえ、剣のことは知らなくとも、あなた方を見れば、襲つて来るでしょう。女性がいれば、尚更です」

「では、防備をすべきだな。一足す一は二。当然のことだ」

「大樹で塀を作りましょう。どうです」

そう言葉を挟んできたのは、さっきまで人狼だった男だ。リカオン（利哥御）という名で、むろん、元は沙門であった。出家前は将兵であったが、学生時代は建築を学んでいた。

途中退学し、放浪生活の後、軍に入った変わり種である。

口髭を伸ばした細い顔のリカオンは言葉を続け、

「物見のできる櫓やぐらを立てて、門は一か所に限りましょう。当面は、それがよいでしょう。それから、小屋も。マガダの亡骸丈では全員が入れませんから」

イユが訊いた。

「でもさ、道具は」

リカオンは腰の袋から鑿を取り出す。石を割ったり、削ったりするためのものであった。

「かつて、我々が普通に沙門だった時代、山上で生活するための鉋や斧を全員が使っていました。それが今もあります」

マハールーシャは得意げにアガメムノンに言った。

「どうだ、大したものだろう、俺の部下だ」

マコトヤは欣然と、

「ミカエロと組んでやらせよう。彼も逸材だ」

アガメムノンとマハールーシャは怪力を生かし、大きな岩や大木を軽々と運んだ。人間重機だ。

慣れてくると、マハールシャとアガメムノンは二人丈の木材運搬リレーを始めた。直径二m長さ三十m以上はある丸太をアガメムノンが百m先にいるマールシャに投げて渡す。次にアガメムノンは全力で走って、マハールシャの百m上に待ち構える。この間、五秒ほど。急斜面の二百mを五秒で駆け抜けるのである。そして、マハールシャが丸太をアガメムノンへ投げる。かくして巨大な丸太が五秒で二百mを移動した。これを繰り返すのである。

「凄え」

イリユーシユの驚愕をよそに、アガメムノンは言う、

「いや、独りで担いで走った方が、もしかしたら、速いかもしれませんが、それも何百回かやると、多少疲れるので」

「ま、そりゃあ、そうだろうぜ……」

丸太は立てられる。

そのために、春も夏も秋もなく、数千万年来、積もり続けた深い雪を除け、氷の層を打ち砕き、太い鉄の棍棒によって、雪の下の方（岩盤）を砕き潰して穴を作った（アガメムノンやマハールシャがやると、岩はまるでチーズみたいに簡単に加工された）。

そこに、太い杉の大木の下三分の一を嵌めて立ち上がらせ、神象の聖堂を大きく囲むように、いびつにならべた（わざとじゃなくて、急傾斜という地形のためと、環状にする余裕がなかったせいである）。

土のように踏み固められないので、補強のために丸太の基部に大きな石を積み上げる。こうしてできる塀は、城壁と言ってもいい、その高さは雪から出ている部分丈でも、十四、五mはあった。

塀（城壁）の上部には人が歩けるように棧を設けた。ただし、アガメムノンを筆頭に巨漢たちは歩けなかったが。

城砦の門は一つ丈である。

黒く真っ直ぐな、柱のような細長い尖った石を左右に、分厚い檜材の板で扉をつけ、檜材の門を備えた。なお、石は元々モニュメントのように、その場所に立っていたものである。

石板に『龍肯』と刻んだ。文字の原版はマコトヤが書いた。二つの字は熱く滾り、光と炎のようであった。

扁額のように門の上に掲げる。これが後に奇観で有名になる龍肯砦、又は龍肯城砦の始

まりであった。

それ丈ではない。門の左右に物見台兼櫓やぐらを建てた。リヨンはそこへ大砲台のように、あの超弩級の大々弩を据えつける。

同様に東・南・北側の各々の塀の上にも置いた。

「近いうちに本物の大砲を据え置こう。そんなに先の話ではないさ」

彼は櫓に立って腕を組み、そうつぶやく。

さらに、塀で囲った敷地内に、太い丸太で、岩よりも頑丈な丸太小屋を三つ建てた。

一つは聖堂を保護するようにマガダの骸を大きく蔽って建てられ、マガダの部分を除いて、板が二重に敷かれた。巨大なワンルームで、当面、イユたち以外（マコトや、アガメムノン、マハールーシャ、リヨン、ミカエロ、リカオン）は神象の聖堂を囲むように雑魚寝した。後には、板で仕切りを作って小部屋を設けることとなる。そのときに、部屋はちやうど、マガダを囲む円陣のようになるのであった。

もう一つは、人狼たちの居住すべき三階建ての大きな別棟の家であり、斜面に建つため、西側の正面では三階に見えるフロアが東側では一階であった。

なお、最後の一つは倉庫である。食糧と薪が入った。

いずれも、床は木製だが、板を敷いた丈ではなく、箱型にして、中に空間のスペースを作り、地面の冷気が直接来ないように工夫されている。

建築と同時に、すぐに調達部隊が編成され、薪や食糧を集めに出た。飲料水については周囲が雪なので、熱源さえあれば不自由しない。

窓はどれも小さかった。ガラスがないので、厚さが四十センチ以上ある氷を窓に嵌める。内側が暖かくても、外は氷点下なので、融けてなくなることがなかった。見通しは利かないが、採光にはなる。

最大の喜びは風呂であった。人狼たちは温泉から運んだ水を沸かす。大石を削った湯船に満たした。

「素敵」

イユは歓喜する。

飛びつくように駆け寄った。暖かい湯に手を浸す。

「あゝ、じんじん痺れるように気持ちいいわ。あゝ、暖かさ、忘れていたわ。もういつも指先と足先が冷たくて。あゝ、素敵。血管が広がる……。火に当たるのとは、全然、違うわ。とても幸せ。あゝ」

そしてさつと振り向く。

「お風呂に入るから、いなくなつて！　ねえ、カーテンとかないの」
一人の人狼が進み出た。

「屏風があります。杉の枝を編んだやつです。すぐ持ってきます」
確かにそれはすぐ来た。六曲一双で、ぐるりと、石風呂を囲む。

「凄い。じゃ、遠慮なくいただくよ」

思えば、ここに来てから、服を脱いだことがなかった。

「あーああ」

人狼たちは驚く。慌てて訊いた。

「どうかしましたか」

笑い声。

「あはははは、大丈夫。気持ち好過ぎたのよ」

その後はお湯のしずくの音、湯の面を打つ音、しぶきの音。そして楽しい鼻唄。

「石鹸があれば最高なのにね」

人狼沙門たちは蒼腿めた。

「申し訳ありません。気がつきませんでした」

「いいのよ、別に。あゝ、最高」

たつぷり一時間は浸かっていた。

まるで、生き返つたように艶やかに、血色もよくなり、双眸は生命にあふれ、生き生き
澆漑とし、眩く輝いて見えた。誰もがその美しさに見惚れる。

「うーん、ドライヤーが欲しいわ」

「それは、ちょっと。電力供給のシステムがありませんから」

石鹸（オリーブオイルを煮詰めたもの）は、翌日、来た。

イリユーシュは人狼沙門たちを手伝いながら、登り窯式の暖炉を、大きくするとともに、
普通の煙突式のものへと組み建て替えた。

棚を作ったり、椅子を作ったりもする。

「家をいじるって、こんなに楽しいことだったのか」

また、身につける物も然り。

特に革製品だ。人狼沙門たちからタンニンで鞣した革をもらって、鞄が作れないか、と考えた。

最初の頃の悲惨な状況と比べれば、天国の絶頂のような快適さで、何とも居心地のよい家であった。世界を征服した皇帝でも、これほど幸せではないだろうと、イユは思う。

アヴァは指で雪の上に円を描いて、所望した。

「何だよ、それは」

イリユーシユは十数分後に、それが鏡であることを理解した。

「手に入るかな」

「お安い御用で」

リカオンはその日のうちに調達して来た。

アヴァが鏡をどうするつもりなのか、幼いとは言え、やはり女の子なのだ、などと見ていると、棚を指さし、その指を動かして空いている壁を指す。

「棚を作れとな」

イリユーシユとリカオンがあつという間に端材で作ると、アヴァは鏡を置いて自分を映し、合掌して礼拝した。

「自分を拝んでいますよ」

さすがのリカオンも気味が悪そうであった。

「あゝ、言われなくとも、見ればわかるよ」

イリユーシユも安然としていた。

その頃、イユは満ち足りた表情で、『我が家の外観をうつとりと眺めている。

倉庫の一部は、自然の冷凍貯蔵庫とした。狩猟で集めた動物の肉（野兎、雉、猪、羚羊、鹿、野牛など）や川魚を保管する。木の実などは、乾燥した普通の部屋（普通の部屋は、どこも乾燥していた）に保存した。一冬分以上の山積みの薪も同じくである。

食糧もまた、千人いてもあふれあまるほどだった。

しかも、人狼沙門たちは獲物の毛皮を売って、その現金収入を資本とし、村人から塩やチーズやミルクなどを買い、持って来てくれる。オリーブオイルやパスタなども、時々あった。

今も料理人が作るそれらを食べたばかりである。人狼沙門の中には料理が得意な者がい

て、典座と呼ばれ、主として皆の料理を作った。ちなみに、禅宗に於いては、食事も修行、料理も修行であるため、飯炊きなどと軽んじられることはない。典座は重要な役職である。それゆえ、典座は古参の人狼沙門の職とされた。

ちなみに、塩については、後に（と言っても、城砦竣工から数日後だが）採取できるようになる。廃坑となっていた塩坑から、採取できることを発見したからであった。

さて、アヴァとの一件が片づく、イリユーシュはアヴァ丈に作ってイユに何もしないことが後ろめたく思う。

余った革で、手袋を作った。イユに渡す。彼女は瞼に涙を溜めた。

「おい、何だよ、まさか感激？ って訳じゃないよな？」

「だって、イリユーシュがわたしのためになんて、信じられない」

「俺って、そんな奴か？ すまなかったな」

「バカ、嬉しいのよ、当たり前でしょう。もう！」

イリユーシュの懷に飛び込んだ。笑って、

「ありがと！」

イリユーシュは、なぜ照れ臭いのかもわからずに、ただ、照れ臭くていたたまれずも、笑いで誤魔化し、

「あはは。いや、何だか、よくわからんけど、まあ、よかった、よかった。めでたし、めでたし」

などと、面白くもない冗句を言った。

そうして一日が終わる。イユとアヴァとイリユーシュとリンレイは以前と変わらず、聖堂の中で寝た。部屋の中の部屋に寝るような感じであったが、見ようによっては、宮殿などの寝室によくあるような、天蓋つきのベッドに見えなくなかった。ただし、スプリングもクッションもないが。

数日は静かであった。

イリユーシュは相も変わらず、武術の稽古と狩り以外は、家で家具を作った。家具に木目の美しさを出すなど、凝り始める。芸術は必然的な欲求らしい。

その起源は動物の巣作りにも遡れるし、又誇らしげな花の美しさにも繋がるとすれば、決して個人の意思ではなく、全体の意味であるとも言えるものであった。

暖炉に当たりながら、革紐と木の枝で弓と箭を作る。

そんな姿を見ると、イユも充たされた気持ちになった。

かくして、何日かが過ぎる。

暖炉を囲んだ食後の団欒、オレンジ色の炎。

「恐らく、敵は我々を見つけている。様子を窺っているんだろうねえ」

マコトやは暢気そうに言った。ミカエロも同意し、

「間違いないそうだ。見つけたけれども、これほど作りこんだ砦だ。安易には近づけないのだろ」

暢気にイリユーシュが、

「じゃ、安泰か」

と言うと、ミカエロは顔を顰め、

「まったく逆です。」

勢力を集めて来るでしょう。山賊の党がいくつも集まってくるでしょう。恐らく、聖剣のことは漏れています。

マハールシャが率いて来たオークらはバラバラに逃げ出しています。それを訝しがって、事情を聴取した党がいてもおかしくない。きつと、聞き出しているでしょう。

オークやトロールには、忠誠も守秘義務もありませんから」

第六章 聖賢者マコトヤ・アマヤス、究竟を語る。

イリユーシュは夢を見た。

よく見る悪夢である。ただし、この世界に来てからは見ていなかった。夢は我々に、いったい、何を為そうとするのか。彼が観たものは、忘れ得ない過去の記憶がデ・フォルメされた夢だった。悔悛の情、罪の意識。

跳ね上がるように布団を飛ばし、上半身を起こす。

「はあ、はあ」

隣でイユやリンレイやアヴァがすやすや眠っている。

マガダの骸を出て、丸太小屋の暖炉の前に坐った。

先に坐っていたマコトヤが訊く。

「どうかしたか、悪い夢でも」

イリユーシュはマコトヤが悪夢を見せたかのような不快な表情で、

「あゝ、そのとおりだ」

マコトやは黙った。どんな夢か訊かないのか、と言おうとして、イリユーシユはやめた。なぜ、そんなことを訊く？ 構って欲しいのか？ この俺が？ そんなバカな。バカバカしい。

二人とも、そのまま黙っていたが、マコトヤが、

「答は自分で探すしかない。冷暖自知（暑さ寒さは言葉で説明しても理解できない。体感することでは知りようがないということ）とも言うしね。又は経験知でしか見つけられないのかもしれない。或いは、肚で理解するしかないのかもしれない。本当の納得のためにはね」

「人それぞれ、答は違うものなのか。答は一つではない、ということか」

「それも一つの答だ。おまえが腹の根底からつかんだ揺るぎない答がそれならば、それが答だ」

「なるほど。かたちはない、ということか。空か」

「それもかたちだ。空がもしも、小生らが慣習的に、普通に思うような空であるならば、それは空ではない。空という特性を持つからだ。いや、かたちがない以上、それさえも言えない。

かたちがないとすら言えない。逆にかたちがあるとすらも言えるのだ。或る意味、過剰に自由過ぎて、狂裂な自由である、とも言える」

「答は自分で探すしかないとは、そういうことか」

「違う。ただ、現実丈しかない。結果が全てだ。起こったことが現実だ。瞬今、將に、だ。理はない。唐突だ」

「そうだな、現実だ。誰でも知っていることだな」

又も沈黙。

唐突にイリユーシユが、

「仏陀は病に罹って、喉の渴きを訴え、水が飲みたいと言い、最後には棄れて衰え、沙羅双樹の下に横臥して死んだそうだな」

「そうだ」

「偉大だ」

「あゝそうだ。だが、それが解つても、何の意味もない」

「そうでもない」

「それがおまえの答だ」

イリユーシユは暖炉に吊るされた鍋で煮えていたスープを、浅い杓で掬って、慎重に啜った。

「偉業を遂げて名を残しても、人類が滅びたら、栄光は意味がない。すべては無に帰し、消えてしまうな」

「そうとも言える」

「皇帝たちは無意味なことをしている」

「そうだな。スパルタクスも、シルヴィエも。他にもマールコ帝国のラハン皇帝や西大陸のヴォード帝国のユナイ皇帝もね。王国の王たちも、そうさ。ロードやフロレチェの王たちも」

そんなことから、話は国際情勢に及んだ。

イユが目を覚ましたので、マコトヤは話を打ち切る。

しかし、瞼を擦りながら、イユはこねた。

「ねえ、ちょっと待って。」

もう少し話してよ。教えてほしいわ。わたしたちしかないんだって思っていたけど、国がいくつもあって、たくさんの人たちがいるのね。ねえ、町もあるの?」

割り込むように、暖炉の前に坐る。

「そりゃあ、あるよ。町どころか、帝国があるくらいだからね。たくさん的大都市がある。

あなたたち同様に、昔から、現象世界（現実世界）から、多くの人たちがこの真如の世界へ来たのさ。

もしかしたら、こちらからも向こうへ行っているかもしれないが、そのところはよくわからない。そこまでは知り得ない。

さらに想えば、この真如の世界から現象世界へ行った者たちのうち、何人かがまたこちらへ来ているかもしれない。往来が繰り返されていたかもしれない。

憶測でしかないが。小生とても、すべてを知っている訳ではない。でも、そういうふうに考えると辻褄の合うことがたくさんあるのも事実だね」

「そうなの? わたしたちが思っていたことは、全然、違うのね。皆、わたしたちと同じなのかしら。ねえ、わたしたちの体験を聞いてよ」

イユは自分がここに来た経緯を話し、それがどういふことを問い尋ねた。マコトヤは答える。

「我々はここに来るときに、人間が生まれてから、存在を自覚するまでの再経験をする。しかも、体験を記憶に残す。

誕生に関して言えば、真如の世界と現象の世界との差は、記憶するかどうか丈だ。他は変わらない。

現象世界では、自分の生誕した瞬間の意識がない。ここでは、人は自分がどんなふうに意識を始めたかを記憶する。

言わば、どこから来たのかを、感覚的に確信し、知る」

「そうだったかしら。どこから来たのかなんてわからないわ。何もなかった。無よ」

「そうそう、それを記憶しているじゃないか。記憶がなかった訳ではないということだ。

論理的に規定される無は（何もなかった、ということも同じですが）一つのかたち・様式・性質・特性を以て差異を做る。

すなわち、それは理論上、無ではない。もし理論上の無であるならば、差異を成さないものでなければならぬから。

又差異がないことも、差異がないとは言えない。差異がないということは、差異があるものとの、差異を做るから。

これは論理という思考の進行を規定する法則が原的に孕む自己矛盾さ。ふ。論理がなければ、この矛盾はないが。

しかしながら、論理思考以外の思考は小生ら、普通、ないからな。どうしようもないがね」

「じゃ、何なの。どうしたらいいの」

「どうしようもないね。矛盾が矛盾して矛盾を許さない。じゃ、許されないなら、しちゃいけないってことだから、矛盾しなくてもよいのか、たとえば、そうはならない。なれない、と言うべきか。そうもなれない。

アンチノミー（二律背反）だ。解決不能さ。そういう設定、仕様なのさ。

尾を噛む原蛇の喩えは永遠に解決しない。

尾を噛む蛇は喰らうのか、喰られるのか（むろん、四次元の世界ではあたりまえのように成立するが、三次元の世界では絶対的に矛盾する）。

さて、ちなみに、解決不能とは、どういうことか。未だ解決を遂げず、いかなる見解にも収まらない。未遂不収さ。

中途、ただ、遣り掛けな丈だ。

ただ、現実丈しかない状態だ」

イユは唇を尖らせた。

「ふうん。」

どうにもならない話ね。って言うか、『とてもかくても候』な話ね」

「何だ、それ」

イリユーシユは眉を上げて疑義を呈した。

「あら、知らないの？」

法然とか念仏行者三十数名の言行を聞き書きで集めた『一言芳談抄』って本にある一節ね。鎌倉の終わりか、南北朝時代のものよ。

比叡山の社に、偽って神籬の真似していた女が鼓を打って歌った一節。とてもかくても候、って言うのは、どうあっても宜しゅうございます、って意味らしいわ」

「それはわかったが、繋がりが、まったく何もわからん」

マコトやは清ました顔で、キャラバツシユ・パイプに火を点け、

「つまり、そういうことさ、現実丈」

「さっきの話に繋がる訳か」

とイリユーシユが言うのと、イユは、

「さっきの話って？ 何を話していたの？」

そう尋ねた。

第七章 新たなる革命 Revolution Remain the Same

闇を走っていた。

人を殺して逃亡している。

免れたい、生き残りたい、是非善悪などかなぐり捨て、生存のための羅刹と化していた。

ギラギラした野獣の双眼と、艶の濃い黒髪を乱し、こけた頬、鞣革のような皮膚、

伊香鋤磨^{いかづちまか}迦はがむしゃらに奔っていた。自分のやらかしたことが、やつちまったんだからもうしょうがないじゃないか、俺は悪くない。そんな想いで無我夢中に、やみくもに奔

っていた。だが、その時だ。

黒い巨漢が突如、立ちふさがった。土佐犬のような、闘争心が滾って荒度胸の坐った不

敵な眼だ。北欧の峻厳なる神々のような過酷なまなざし。だが、熱くはなく、凄みある冷厳さを湛えていた。

その威容たるや、暗い山中の夜に迷って突如見る、武神の依代なる大巖のようである。爛々たる眼は睜かれていた。

「ひ、ひええ」

マカは腰が抜けた。黒い男は赤い眼でぎょろりとにらむ。

「懼れることはない。おまえは我らの仲間だ、イカヅチ・マカ。

おまえは欲望した。それは神の与えたもうた機^{はた}らきだ。天然の真義に沿うものだ。それは長い歴史で否定され続けていた。現実には、それが世界を席卷し、動かし、支配していたのに。

禁欲的理想主義が生の原理を否定するのは、ルサンチマンに他ならない。弱者の強者への復讐だ。結局、誰もが王様になりたいのだ。それこそ生の原理だ。

おまえは思いどおりにならない者を排斥した。遂げられない想いは人を苦しめる。人は皆、苦しみから遁れることを希う。おまえは想いを叶えてくれない者へ復讐した。生の原理だ。

我らは新たなルネッサンスである。

最も古い価値観であり、今となっては新たな価値でもある。

いずれにせよ、革命者だ。古くて新しい真理を謳う。

何もわかるまい、イカヅチ・マカ。

おまえは怠惰だ。おまえは身勝手だ。

激しく欲望しながらも、それを得るための努力や工夫、すなわち、自己抑制や彼女を喜ばせる企画を怠った。

ただ、彼女からの完璧な愛を求め、思いどおりにならないことに自己の存立の基礎を揺さぶられ、存在不安に駆られて憤り、その激しい生存への執著から、確かさを求めて根拠もなく執拗に彼女を疑い、甚だしく邪推し、妄想で妬み、責め立てて非難した。

そして、殺して逃げている。おまえは我らの仲間だ。獣よ。来るがよい。古代の暴君のように、無慈悲に高貴であれ。

暗所に安らいで、その湿潤な環境に蠢くおまえの魂、その自然はあまりにも長い間、無礙に否定され続けていた。

時代は変わる。誰もそれを止められない。月の精を受けて、闇と湿潤に生きるおまえは

我らのエリートなのだ。

そして、混沌たる混濁の闇と、優しい癒しの生暖かい温もりと、鬱屈した湿り気が生存の実態である。

古くて新しき革命よ。

我らはいずこから来れるや、又いずこへ赴くや。天然自然の理に遵って生き、死す。天知る、地知る、吾知る、君知る」

さてさて、山賊の一人が隠れ家に戻って行った。

「どうしたんでい、貴様、その様子は」

「てえへんだあ、親方、てえへんでえい」

「親方はもうやめろやい、隊長と呼べ。俺たちや、一昨日までとは、違うんでえい。昨日、山賊大連合がなった。この辺一帯の大物山賊の頭が手を組んだんだ。

俺たちも軍隊みてえに組織された、再編だ、いや、新たに編成、初めて組織化したんでい、それが合理的で強力だからな、意味があるんでい」

「へい、親方、わかってらあい」

ごつんと兵を殴って隊長は言う、

「で？ どうだったんでい」

「へい、お見込みのとおりで。

ちよいと手強そうなああの砦も、この急斜面でつさあ、少しばかり上へ登ってみなせえ、そつから眺めりゃあ、塀なんざ、ないも同然、足下に砦の屋根が見渡せますや」

「じゃ、決定だな。大将に報告する」

「どうするんで？」

「ばっかやろ、わかってねえのか。

夜襲だよ。

決まってるんだろ。夜の寝込みを襲うんでい。上から火矢で攻めりゃ、いちころよ」

山賊連合の頭に押されたイマニユエルが腕を組んで唸る。

「聖剣がどういうものかは知らん。しかし、スパルタクス皇帝が犠牲も顧みず北上している。

あのシルヴィエでさえも、実は虎視眈々と狙っているって言うじゃねえか。

こりや、凄いものだ。歴史が変わるのかもしれない。計り知れない価値だ。それを山賊でしかない俺たちが手に入れる。すべてが引つ繰り返るだろう。世界に革命が起こるだろうな。

そうさ、奇襲の夜は革命の夜だ。

山賊が皇帝になる日が来た」

イユは驚かれた。

兄の夢を見ていた。葬儀、殺された街の路傍の風景、亡骸、大学に通って人工知能の研究をすることが夢だった。しかし、それは突然、途絶えた。

軽薄な少年たちの無知と愚行のせいで。

絶対に赦せなかった。弁護士を同罪だと憎んだ。家族の気持ち理解できたら、わたしが弁護士なら断るだろうと考えた。

眼を覚まし、明けの明星と月光がならぶのを見る。遙かな、あくが在刃離れであった。人は皆悪夢を生きる。※あくがれ……在刃（あく）を離（か）る。

人狼沙門は皆、貪欲な餓狼の頃の面影を濃く残し、陰刻（くぼみ彫、沈み彫）のように痩せて、跳梁跋扈するしなやかさを持ち、背が高い。

かくして、人の姿になっても、狼としてのスキルは健在であった。狩りでは一日に数十kmを移動して毎日、大量の獲物を捕らえ、貯蔵用の倉庫に溜めていく。毛皮は高価に売れた。夜も昼も山野や人里を廻って、あらゆる情報を収集する。

或る日、リカオンは龍背の城砦よりも高い位置で、小さな目印をつけたり、雪洞を作ったりしている山賊を見たことを報告した。山賊たちは砦の人間に見つからないように夜間に大きく迂回して、そこまで来たらしい。

「でも、何もない大斜面ですからねえ、バレバレでつまあ」

リカオンは嘲り笑った。

マコトヤは言う、

「予想どおりだな。ふ。」

斥候や工作部隊だ。恐らく、完成した砦の出来映えを見て、正面からぶつかっては味方

の損失も大きいと判断し、奇襲を考えたつてところか。

奴らの考えは手に取るようにわかる。この山の地形を活かして、この砦よりも高い位置に秘かに登り、上から奇襲をかける、夜にね」

暖炉の周りに屯していたミカエロとリヨンらがにやりとした。

「早速お楽しみだな。山賊大連合の噂は入手している。その一端だろ。

奴ら袋の鼠だ。一気に掃除ができてよいね」

イリユーシュがひよいっと立ち上がった。

「何だか、外が騒がしくないか。俺、ちよつと見て来らあ」

第八章 エリイカ（叡璃彝迦） 炎の赤い髪

イユたちにまた一人、強力な戦士が加わることとなった。

青天、雪の斜面を歩く少女。

炎のような赤い縮れ髪で、背中までたつぷりある。そのせいか背中の中からは隠されていた。古代希臘ギリシアの海神ポセイダーオンのごとき、長い三叉戟をにぎり、広大なる純白の中、小さな一点の紅。

ボデイスを着て、長いスカートを穿き、十七世紀仏蘭西の村娘のような衣装。ボデイスは質の悪い絹で作ったグリゼットと呼ばれる布地で、普通は灰色が多いが、彼女のものは緋色であった。ボンネットは被っていない。腰に剣を佩いていた。

その衣装から想像もできないが、彼女は現象世界に於いては、姉妹ともに武闘家であり、鍛錬のための山籠もりで、山岳修行の修験者のようなことも経験していた。彼女の家が代々巫女であったことも無縁ではあるまい。

彼女自身体が熱くなって、古代の巫女のようなトランス状態になることがあった。

空手を習って、たちまち上達したり、大会で優勝したり、願望実現能力が異様に高いのは、もしかしたら、そのせいもあったかもしれない。

ちなみに『若』という字の原型である象形文字は、髪を振り乱した巫女のトランス状態を表すというが、そういう女性は若い人が多かったせいで、若いという字に当てられたらしい。巫女の言葉は神の言葉で、そのとおりに実現するから「若し」の意味にもなるという。

峻しい山を登ることは得意であった。

その証拠に聖なる山イヴァントの絶壁を越え、ここまでたどり着いている。いずれ、なみの者ではない。じつと前をにらんで進んでいた。

彼女の鷹のような眼は十数km先のイユたちの砦を捉えている。

「砦のようだわ。あそこまで行けば、誰かいるわね。絶対に、あたし丈ってことはないと思っていた。思ったとおりじゃん」

ところが、数百mも行かぬうち、髭面の山賊たち三十数名に囲まれる。

「へへ、小娘だあ」

「うひょひょひょ、久し振りのご馳走だわー」

「最近、狼どもを見ないと思ったら、お嬢さんのお出ましかーい、やつぽー」

「はあはあ、ぐふふ、金もありや最高だかな」

「バカ、そううまくいくもんかよ」

愕くでも怯えるでもなく、むしろ、睥睨するように見廻す。

「ふーん」

それを見て瞋り出す山賊もいた。

「おいおい、なめてんじゃねえぞ」

少女は一喝する。

「ざけんな。キタねーてめえらなんか舐めて堪るかよ」

「んだと、コノヤロー」

山賊が腰の大鉈を毛のついた革製の鞘から抜く。だがその刹那、コンマ一秒で三十m近い間合いを詰めた少女がその山賊を串刺し。さらに両刃の三叉を振って斬り捨てた。眼に留まらぬ。山賊は上半身と下半身が泣き別れ、真つ二つ。

「何だとー！」

愕く余裕もない、次々惨殺。

「助けてくれー」

まろぶように走り逃げる山賊ども。十数名か。

「あははは、そうはいかないわよ」

ヴォツという、空気を押し開き裂く音とともに、背中から左右二枚ずつ、計四枚の大きな翼が出て来た。どうやって折りたたんでいたものか、その大きさは一枚が二m以上もある。その色は強烈な深さの緋色で、どこことなく黒光りを思わせるが、決して黒ではなく、

鮮やかな緋色であった。

バサツバサツとゆつくり空気を叩き、ふわりと持ち上がったかと思うと、もの凄いい速さで賊どもに迫った。

「ひえええ、た、助けてくれえい」

だが、少女は哄笑する。

「あはは、あはは、あははは、莫迦な奴、助けてくれだど？　では、おまえは命乞いする女やこどもを助けて上げたか？　無慈悲に殺してこなかったか？　殺したくせに、なぜ、おまえは助けてもらえるんだ？　人にそんな仕打ちをしたくせに？　自分丈は助かりたいのか？　自分丈赦すのか？　自分丈赦されるのか？　なぜ、赦されると思うのか？　あはは、なぜ？　なぜ？」

無限に浅ましい。生きる資格もない。人間ですらない。おまえらに人権などない。生きてみと一緒に燃やしてもよい存在だ」

楽しむように追い回して追い込んで、殺す。

「おい、そこまですることもなからう」

イリユーシユだった。騒ぎを聞きつけて、来たのである。

キツとした表情で、赤い少女がにらみ返す。その眼は歩いていたときとは、まったく変わった、鋭くなっていた。

「ふ。」

蒙昧な輩め。

さては貴様も仲間か。あそこは賊の砦か」

「何をバカな。奴らの仲間だから言うのではないぜ。人の命をそうそう簡単に奪ってよいはずがあるものか。俺にとっても、山賊どもは敵だが」

「愚かな。」

生存権は生得権だが、永久権ではない。他者の生存権を尊重せぬ者はその権利を喪う。権利は行為によって、常に査定されるべき。これほど明瞭で、当然の理論があらうか」

「それは理だが、裁くは難しく、安易に殺すは」

「問答無用。さような似非人道主義が被害者を虐げ、加害者を優遇する愚の骨頂をなす。加害者を守ることは、被害者を犠牲にすることでしかない。その逆も真だ。二兎は追えない。どちらかを現実には選択しなければならない。自明の理だ。それすら解せぬか。愚劣者。縁なき衆生は度し難きかな。闘うのみ」

少女はイリユーシユの前に舞い降りた。

「あたしの名はエリイカ。貴様の名は」

「俺はイリユーシユってもんだが」

彼は抜剣しかけたが、止めた。

「なぜ、止めた。あたしは止めぬぞ」

だが、イリユーシユの眼から闘気は消えていた。

「おまえも山から来たのか。どうして翼がある」

少し呆気にとられたようであった。

「それがどうした？ 貴様に関係ない」

「そりゃ、そうだ、あはは。」

悪かったな」

「はあ？ おかしな奴だ。」

あたしも何だか闘う自分が莫迦みたいに思えてきた。恨みもないしな。想像くらいつかぬか。

山を越えて来たに決まっている。あの絶壁だ。翼が欲しいと強く願った。強く希って、想い画いたとおりの翼が生じた」

「おまえ、凄いな、意志の塊みたいな人だ。その強さも、意志で獲得したのか」

「つくづく脱力させる奴だな。元々武術で鍛えていて、山籠もりなどしているうちに修験道に目覚め、山深い野生で生きるうちに、勘が鋭くなったのだ。」

だが、貴様に関係ないだろ。そっちこそ、ここで何している、あのような砦で」

「うん、大した意味はない。けど、おまえも面白い奴だな。武術で山籠もりか。本当に変わっているぜ。」

その三叉戟も凄い」

「これか。『海神』と名をつけた」

「海の神、古代ギリシャのネプチューンか。確かに三叉の鉾を持っていたが。」

なあ、少し休んでいけないか。話も聞きたい。立派な翼があるとは言え、疲れただろう、あの山越えは」

「いや、道を急ぐ。生は疾く去り逝くなれば」

「まあ、白湯でも飲んで行けよ。これも縁さ。そもそも、この世界の地理がわかるのか、何が解るか、知り得るか。それも意志の力か、そうか、さもありなん」

「何が、そうであろうものか。ふざけるな、知る訳がない。勘と観察を頼りに、探りながら、進むのだ。他にどんな方法がある？ 確かさのないすべての世界に於いて」
「なるほど。」

確かさは、確かに、どこにもないが、地理についてなら、マコトや・アマヤスという男が少し詳しい。人は何も知らないわけでもないのだ。

だから、始末が悪いとも言えるが。ふ、まあ、どうでもよいか、そんなことはな。来いよ、紹介するぜ」

そう言って、無防備に背を向けた。山賊どもは疾く^と消えている。平然と歩む。

反って隙がない。無意識な、自然な強さか。虎や獅子の強さ、鍛錬の成果ではない。のんびり昼寝をしていても、めきめきと備わる天然理の強さ。

しかし、イリューシユの足は止まった。空を見上げる。眩そうに手を翳すも、

「ん？ あれは」

何事かとエリイカも見遣るが、驚愕。

空から何かが降りて来る。

龍の頭首に、鷹の翼と胴体、虎の四肢を持つ神獣が舞い降りて来た。ずんという音とともに雪に深く四肢を埋める。

又それに乗っていた女騎士が凄かった。

エリイカは巨魁な女闘士の凄まじい闘気と殺気をまざまざと見上げた。それは炎のような光背となって現れている。尋常ではなかった。双眸は冷血なる蛇の縦の瞳孔で、微動だにせず、表情もない、非情なる殺戮の眼であった。

エリイカ問う、

「何者か」

黄泉の国で絡み合う蛇の群れのような長き髪を、鋼鉄の兜の下から靡かせ、その女戦闘士は言う、

「ふ。我を知らぬとはな。ならば、教えてやろうぞ、我が名はジン・メタルハート（隕・鋼鉄心魂）」

黒い鋼鉄の鞘から抜いた大剣、刀身の長さ二m四十cm、その幅三十cm、その黒い刃は黒い叢炎とともに、黒龍が絡みついて、熾え盛っている。黒龍は彼女の気を錬成し、龍の構造を造って、その依り代に龍神の精髓を召喚したものだ。

地獄のような、見たこともない妖剣であった。これぞ彼女の象徴である。漆黒の鎧兜、

楯とともに、天下に轟く、無敗無敵の殺戮兵器、リャーマ・ネーグロであった。

それを振るう巨漢女戦闘士は、戦場に出れば数千の兵士を屠り、かつてハン・グアリスの平原で、武器を持たぬ無抵抗の難民数十万を虐殺した、非情残酷な殺戮神である。

しかしながら、この世界に来たばかりの二人は知る由もない。エリイカは三叉戟をすかさず構える。これほどの敵を眼の前にしたことがない。全身に戦慄が走った。あのような巨大な剣も見ることがない。ジンも二m超える長身であるが、その背丈よりも長している。

あんな剣が振るえるのか。しかし、現に彼女は片手で軽々と持っていた。手に汗が滲む。

「どう攻めるべきか、凄まじい気魄で、一切隙がない。剣から発する気の力。大岩でも豆腐のように切りそうな威力だ。しかも、あの龍は」

焦りを感じ、イリユーシュを見遣った。

「ジン・メタルハート？」

彼は女豪傑の空前の凄絶に動ずるもなく、首をかしげるも、剣を抜く。ジンの双眸が睜かれた。

「うぬ、それは、きさま」

「ん？」

「龍背の聖剣。ここで見ようとは思わなんだぞ、運が廻って来たか。手に入れば、神霊や四天王・十二神将ですら、我に跪こうぞ」

「何だって！ これって、そんなに凄いのか！」

エリイカもまったく訳がわからないながらも、眼を丸くしている。確かに見事な彫の神気あふるる剣ではあるが。

「イリユーシュ、おまえのそれは何だ」

「知らん、拾った石ころだ」

「バカな」

今でこそ鋼の剣だが、最初は石であったから、嘘ではない。

エリイカが必殺のタイミングで雷よりも速く三叉戟を繰り出すも、蚊ほどにも思わぬジンに斃される。翼が折れた。全然レベルが違う。こいつ人間か！ エリイカがそう想った刹那であった。

全身から炎のような闘気を噴き出し、ジン・メタルハートがまさに飛び掛かんとする時。

割れ鐘のような銅鑼声が、

「待て、待て、そこな怪物、待たんかい」

山々に響くその大音声にイリユーシュが振り向けば、

「おお」

勇ましい巨魁の猛者が二人、アガメムノンとマハールーシャであった。さすがのジンもこの二武者に比すれば、半分ほどに見える。

「メタルハートなんざ、何するものぞ」

しかも、その後からは、杖を振るリンレイ、弩を持ったリヨン、不敵な面構えのリカオンだ。数十の人狼沙門もついて来ている。

「あゝ、来ちゃだめだ」

そう言ったのは、イユとアヴァの姿が見えたからである。あのアヴァが走っている！

「何でだ？」

黄金のアガメムノンと黒き怒髪のマハールーシャが襲い掛かる。空気を裂く巨きな豪剣が同時に襲う。鋼と鋼がぶつかり合う激しい音、まるで大鐘のように轟く。

「あゝ」

信じがたい光景、アガメムノンとマハールーシャが弾き飛ばされていた。二つの剣を一撃で弾き返したのだ。転倒し、二人が唸る。「ううぬっ」

間髪入れず、攻撃の後の隙を突くようにリヨンが弩を引き、投げ槍のような矢を次々と射た。

「はっ」

絶妙なタイミングだったにもかかわらず、ジンはいとも簡単に斬り落とす。

「凄え、武闘の神だ」

敵ながらイリユーシュは唸った。

リンレイとリカオンが囲むも、手が出せない。リヨンは遠くで照準を合わせた。人狼沙門たちも円形に周りで構えるも、同じく手が出せない。

そんなところへ、イユとアヴァが。

「莫迦、来るなって言っただろっ、何で来たんだ」

「だって！」

だが、メタルハートは彼女たちを見て眼を剥く。

「何とー！」

しかし、言い終わらぬうちに、イユが真兇を唱え、

「やどるふばむしうにやたやしうにやたたどるふばむ」

それは有名な聖句『色即是空空即是色』であった。さらに続けて、
「ぶやぶわろふくわやてゐすまぶわんちゃすくわんだわすたふむしうちゃすぶわぶわわしふんにやんぱしうやてゐすま」

順は逆だが、漢訳して『照見五蘊皆空』、漢文は正確ではなく、和語で直訳すれば、「五つのものの集まりであると見抜き、（さらに）その五つのものが空であることを覚った」とでも言うべきであろうか。

その聖句は燦燦たる光の潮となつてあふれ、アヴァの頭上に集約して留まり、アヴァの頭上から龍肯の聖なる剣を荘厳した。

「おおっ」

剣が天の光神のように炸裂して輝き、イリユーシュに力が漲る。身体は自然に動いていた。眼にも止まらぬ速さで、ジンを激甚に打し、黒き龍をも裂く。

「バカな！」

ジンが驚愕と、常には見せない、畏怖を泛べる。だが、イリユーシュの天威も超える勢いは止まらない、

「うらあああっ！」

大きく振り被つて襲う。

「うわ」

あのジン・メタルハートが転げるように逃げた。素早く立ち上がって、体勢を直そうとするも、

「はあ、はあ」

息が荒い。

「そら、これを喰らえ」

山が落ちるような重く激烈なマハールーシャの大剣。今度は防ぐのが精いっぱい、後ろからアガメムノンの剣が水平に飛ぶと、「うぐわ」

鎧が缺した。ほとんど伝説化しているあの鎧が。エリイカが飛んで首を狙うも、三叉戟は躲されたが、ジンの太腿の皮を破る。

「うぬ、くっそう！……うぐわっ！」

リヨンの弩が腕に刺さった。憤りが眼窩から噴き出す。

凄絶な眼で、

「うぐわわあ、うぎやああありやあうおあああつ」

絶叫を上げて鬼神のごとく暴れ、周りを薙ぎ斃し、素早く龍鷹虎に乗る。

「このままで済むと思うな」

悪鬼のごとき捨て台詞を残し、矢のように飛び去った。

「あ、待て！」

エリイカが飛翔して追おうとするも、この時によりやく着いたマコトヤが止めた。

「やめよ、深追いするな。やめよ、翼ある者よ」

言われるまでもなく、翼の怪我で飛べない。そもそも、神速の龍鷹虎に追いつけない。

余りのことに言葉を失っていた禿のリンレイがも眼を丸くして感嘆の叫びを上げた。

「ジン・メタルハートをやつつけた。あのメタルハートを。凄い。本当に凄い。驚くべきことです。信じられません」

同時にもしいリユーシユたちが敵だったら、と想像する丈で恐ろしかったし、味方でよかったと安堵もするのである。

それはともかく。

「くそう、逃したか」

エリイカがそう言いながら戻って来て、純白の雪上に真緋も鮮やかに血を流し、膝を突く時、その刹那である。

「まいった！ 降参だ！」

と大声で叫び、イユたちがいる位置よりも、数十m高い位置の雪の下から、雪を蹴散らして、唐突に、数十名の男たちが現れた。山賊だ。龍肯城砦の高い位置から奇襲しようと、雪の下に洞を作って隠れ、夜を待っていたのである。

それを見た他の山賊の連中も、何だよ、そうかよ、やってられっか、馬鹿らしいやとばかり、雪を蹴散らして、次々出てくる。さらには、もう数十m高い位置からも、数百の山賊どもが出てくる、出てくる。

その体たらくに怒り猛った山賊の幹部も、堪えられずに雪の中から飛び出て来て、

「ちくしょう、おまえたち、裏切ったな」

そう言われては、山賊どもとても黙ってはいない。

「裏切ったもくそもあるか、こんな闘い無意味だ。蟻が巨鯨と海で闘うようなもんだ、いや、その方がまだ勝ち目がある、俺たちよりやあな！」

「そのとおりだあ、親方、人間あきらめが肝心さ、早めに降参して赦してもらおうや」

「あゝ、そうともさ、損得で考えてみようぜ、親方」

「いや、いや、損得丈じゃねえ、俺は見たぜ、この世にや、まだ真実があるんだ、見ただろ、あの鬼神よりも恐ろしいジン・メタルハートを倒したんだぜ、物的な力の権化みたいな奴に、聖なる力が勝ったんだ。聖句の力が現実の力に変換された瞬間を見ただろ」

そう言ったのは、ジョン（與繁）という男だった。

「確かだ、俺も見たぜ」

「なあ、おい、あのお嬢ちゃんの聖句が、あのちっちゃいこどものところで増幅して、俺たちが狙っていた聖剣に神の力を与えた。

こりゃあ、俺たちが奪って使えるようなもんじゃねえ。俺たちにどうこうなるような代物じゃねえんだ、わかっただろう、見ただろう、むしろ、この聖なるものを護り、仕えることがせいぜいのお役目ってもんじゃねえかい？」

苦虫を潰したような顔で聞いていた頭領イマニユエルが言った、

「わかった、わかった、そうしようぜ、降参だ、降伏だ、白旗さ、さあ、この方々は聖人様たちだ、きっと俺たちを赦してくださいさるだろうさ」

イリユーシユは笑った。他の彼の仲間たちも哄笑した。マコトやは冷笑を泛べ、言う、
「いいのかなあ、首領イマニユエル、せっかく、小生らを上から攻撃しようっていう名案だったのに。勿体ないなあ」

静かな声であったが、静寂の中、よく響いた。

すると、どうだろう。それを聞いて、突如、雪を蹴散らして姿を現わせるは、腹を抱えて笑う人狼沙門、山賊どもよりも高い位置、完全武装し、数十名。

それを見上げて、あ然とする山賊ども。

「何てこったい！」

「まいったぜ！ 奇襲されるのは俺たちの方だったって訳かい？」

「完全に裏をかかれていたぜ！」

「やばかったな」

「危ねえ、危ねえ、降参して大正解じゃねえかよ」

「こんなこったろうと思っただ、あの頭領について行った日にや、命がいくつあっても足りねえや」

イリユーシユが笑いを堪えつつ、

「つてことだ。貴様らが攻撃しようって瞬間に、貴様らは全滅さ、上から下から挟撃され

るってえ訳だ。

負けたと思うなら、俺たちの下につけ。飯丈は保証する。人狼沙門どもは狩りや採取の天才だからな。倉庫からはみ出すほど、食うものはあまつてる。

その代わり、おまえらは当面、人狼以下の預かり身分だぜ」

イマニユエルは呵々大笑した。

「まいった！ 本当にまいった！ どうか、こんな俺らでよけりゃあ、手下にしてくださいえや」

「応ともよ、来い」

かくして一同はぞろぞろと砦、龍背の城砦に引き返した。山賊どもは砦の外の焚火で煮る大鍋の野兎スープを振舞われ、早速、自分の住む小屋の製作に取り掛かった。

それ以外の主要な者ども、暖炉の前にマコトヤを中心にイユ、イリユーシュ、エリイカ、アヴァ、アガメムノン、マハールーシャ、リヨン、ミカエロ、リカオンなどが集まった。しばし、和やかに白湯など啜っていたが、

「アヴァの存在意義がわかった。まあ、そうだろうなとは思っていたが。

アヴァアローキティーシュヴアラ、観自在菩薩は観ること自在、遍く衆生を観て救う。普く実相を観て般若波羅蜜多を観取体得する。魔訶般若波羅蜜多心経に於いては、空の思想の語り手であった。

実現者、実行者である。

一つの仮説を置こう。イユを究竟究極の真義の实在実存だとする」

「んな、バカな」

イリユーシュが嗤うも、マコトヤは冷笑を泛べ、

「アヴァは真義の語り手、表現者、表出者、実現者、実行者であると言える。神髄はイユにある。いや、イユである」

「わたしがあ？」

「うむむ、凄い話なんだろうが、よくわからない」

エリイカが唸った。

マコトヤは火打石を打ってパイプに火を点ける。

「本日、小生らが見た、あの現象を説明することができる、さように考えるならば」
マコトヤはさらに自説を述べ、

「イユの力は癒しを基本とする。

女性原理的なもの、陰と陽とで言うならば、陰。その最たる象徴は月だ。

原始的な、暗黒時代的な獣性、湿潤の生命、本能、海馬、野性の叫びだ。

易経で言えば、乾坤の坤。仏教で言えば、胎蔵界的だ。

維持と育成、融合的、有機的、健やかな生命の充溢、時には暴力的なまでの、超越的氾濫だ。

女性原理だからと言って、優しいとは限らない。生の全体を網羅する力だからだ。豊穡、気紛れ、非情なる大自然、大地、水、龍神、歓喜と幸福と養生と暴虐と音楽と舞踏と陶酔、オルギア狂躁秘祭。

美と詩歌。デオニュソスのな、又はオルフェウスのな。

それに比して、聖剣は男性原理的、太陽、乾坤の乾、破壊と創造、金剛界的だ。乾燥して明晰、禁欲的理想主義、合理主義、苦行、死、生存からの厭離。静謐、アポロン。ロゴス、イデア。

イユと聖剣とは、陰と陽の関係でもある。すなわち、陰陽が互いに補完する時、それは太極をなし、究竟究極の真義を生む。世界最強の力を生む」

マコトヤは懷から陰陽図を出す。白い勾玉型のものと黒い勾玉型のものが重なって、円を象っている図だ。

背反する陰と陽とがびったりと重なって、一つの円を作り、完全なるもの、全網羅的なもの、究極ということを表し、すべての本源である太極という概念の意義を表現している。

マコトヤはいつもこんなものを持っているのかと、イリユーシユは頓珍漢なことを感じていた。

「陰陽それぞれが極まって、陰が陰であることを超越して陽となり、陽が陽であることを超越して陰となる時、双方甚深微妙に相合わさって、太極をなす。

太極は一切を網羅する究竟の原理である。万象をなす。

それ、すなわち、全肯定なる龍肯の義を全うする。

すなわち、太極をなすことは龍肯をなすことでもある。

だが、龍肯は普段は現れない。

なぜなら、究竟の力であり、全世界（無際限に存在する一切の平行宇宙群もその一部）である龍肯、それはすべてであるがゆえに差異をなさず、されば特性も出だせず、差異も特性もなくば、現実には顕現し得ないからである。

なのであるが、差異なくしては顕現し得ないと言っても、現実には摩訶不思議な機らしきにより顕現することがある。

さように敢えて顕現するがゆえに、差異及び特性を帯びねばならず、陰か陽のいずれかの性質を帯びて顕現するのだ」

「なるほど、そこまではわかるな」

「聖剣の場合は剣の本質である陽として性質を帯びて顕現する。本来、両義全義である龍肯が陽の性質を帯びて顕現する。現に今回、陽の性質（金剛界的な性質）を帯びて顕現していた。

どうやら、これが聖剣の奥義らしい。

究竟真義である龍肯を顕現するから、イユの真兇を受けた聖剣の破壊と攻撃の力は凄絶なのだ。

宇宙など軽く凌駕する。

龍肯の聖剣が龍肯の聖剣になるのは、イユがいればこそなのだ。

そうであったとすれば、ジン・メタルハートなど相手にならなかったのは当然だ。いや、未だ今のうちだから、こんなもので済んだが、次に会うときは骨も残らないだろう」

「あの、ジン・メタルハートがか」

「他にジン・メタルハートがいるか？ まあいい、小生が今言ったとおりだとすると、一つの推測が成り立つ」

「何だよ」

「対をなす者がいてもおかしくないということだ」

「どういうことなの？」

イユが訊くと、マコトやは鬚を擦りつつ、

「胎蔵界を金剛界が補完して究竟究極の真義、太極、龍肯の義をなす存在もあり得るということだ。

金剛界系、男性原理系のイユがいて、胎蔵界系、女性原理系の『何か』を目覚めさせる、そういう組み合わせが存在するはずだ、ということだ」

「何だって!」

「さほど驚く話ではない。さまざま組み合わせがあり得る。起こったことが現実だ」

「そりゃ、そうかもしれないが」

「たとえば、イリュージョンの聖剣の金剛界的な力がイユに逆流して、イユが龍肯をなし、胎蔵界系の龍肯、女性原理系の龍肯、究極の陰の力を発揮するとか」

「どうして逆流が起こるか想像もつかんが」

「おまえが拒めば、起こるかもしれないな。又はおまえが激しくイユを護りたい、力を与えたいと希えば、あるかもしれない。基本おまえはイユを受け入れている。だから、普段は逆流など起こらない。」

いつも仲良くしていれば、金剛界系の龍肯が成立するんだ。

ふむ、そう思えば、金剛と胎蔵を結びつける力は愛だとも言えるな。とすれば、いずれにも偏らない太極は陰陽の立場を超えた愛の完成とも言える」

「そうなのか。わかるような、わからんような。」

じゃ、話戻すが、金剛界系のイユが胎蔵界系の何かを補元して太極を起こす場合は、陰の力、女性原理、胎蔵界系の龍肯が起こるんだな」

「必ずしも攻撃とは限らないが」

「難しいなあ」

「わからなくてもわかっているし、わかっている何も知らないのさ」

「余計わからん。」

そうだ、俺も思いついたが、純粋な龍肯ってないのか、ないのかって言うか、起こり得ないのか」

「純粋な龍肯って、何だ」

「だから、偏らない龍肯だ」

「偏らない？」

「金剛系とか、胎蔵界系とかに依らない、男性原理とか女性原理とかいう色のない、龍肯のあるがままの龍肯、って言うのかな、何かの特性を帯びない、うーん、何かの様相を呈さない、純粋な龍肯自体の龍肯」

「何となくわかった。」

それは、陰陽の両義を具有し、かつ陰陽のいずれにも偏らず、双方の力を発揮するといふようなパターンはあり得ないのかということだな。

結論から言えば、ない。逆に言えば、いつもどこにでもある。

陰陽両義ならば、全肯定であって、他者がなく、平常道であって、何も起こらない。現象は偏りによって差異をなし、現出するからだ。

我々に先天的に備わる思考のパターンに依ってな」

「ふうん、まあ、そうなんだろうけどさ、だからこそ、逆に、あったりするんじゃないか
と思っただ」

「そうとも言える。」

機らきは不可思議だからな。

思惟を軽く超える。論理は所詮、ツクリモノ（捏造）でしかない。論理性に根拠はない。
そもそも、理由など必要なのか。

世界（宇宙ではない。一切の平行宇宙をも含めたあらゆる界のことだ）の開闢以前には、
物理的法則はなかったが、世界は起こった。

理由のない現象もある。起こったことが現実なのだ」

「それだよ、それがあがあるかなって、思っただ。俺が世界で初めて思いついたのかな」

「いや」

「そうだと思ったよ」

「大昔から伝承されている。」

知る人は知る。

有名な神の名で知られている。

人類の最も原初的な神の柱とも言える神、阿修羅だ。

阿修羅と言えば、悪鬼羅刹を想い泛べる人が多いが、大本は光の神アスラ。

究竟の始源神で、最も古い神、太古は月として獣を揺籃し、後には太陽となって稲や麦
を育み、月と太陽が表裏をなす、陰陽両極の神となった。

日本の奈良時代の阿修羅像が少年のようでもあり、少女のようでもあるのは、その本質
を直観していたからだ。当時は未だその感覚が残っていたのだ、或いは日本の古代に丈、
秘かに伝わっていたのかもしれない。

一切を凌駕するような、途方もない金剛界の機らきと、途方もない胎藏界の機らきが相
対し、止揚して相極まり、互いに超越し合って、陰が陽となり、陽が陰となって、太極を
なす時、両義的な、差異をなさずに、全肯定、究竟の肯定たる龍肯を維持したままの、純
粋な龍肯が眼前に現れる、という説がある。

真偽は確認のしようもないが、自在無礙の龍肯なら、あり得ない話でないことは確かだ。
いずれにせよ、純粹なる龍肯（と言うのも可笑しいが）である究竟神アスラは喻えるな
らば、無際限な透明、ただの現実。顕現しても、何も起こらないかもしれない。ともかく

も、予想がつかない。小生らに吉と出るか、凶と出るかはまったくわからない、わかりようがない、わかり方がない。

もし、その力が敵となつて、小生らを襲うならば、それは恐るべきことだ。史上空前の力がいたずらに動けば、宇宙も滅びかねない」

「滅多に起こることではないだろうな、マコトヤ」

「むろんだ。数千兆、いや、数千京の数億乗の一にも満たない確率だ。

だが、なぜ小生が金剛界系のイユを懸念したかわかるか。

胎藏界系のイユが起す金剛界系の龍肯と、金剛界系のイユが起す胎藏界系の龍肯が陰陽としてぶつかつて止揚し、超越極まつて太極を做す時、アスラは起こり得る」

「ううむ……。

だが、自らを滅ぼす可能性もあるんだろ？ まさかそんなことはすまい」

「だとよいがな。

一つの求道に凝り固まつた狂信者は得てして過ちを犯す。固執はプラスもあるが、マイナスも多い。

執著の強い粘着質な人間は、自らの異常を認めるべきだが、往々にしてそういう人間は愚かしく矜持し、自分を正義と見做して顧みない。

ストーカーとか虐待とかクレーマーとか、皆、その類だ。自分は赦されると思う愚かな人間だ。自分を赦すが、他人を赦さない。だから、己を顧みず執著し、粘着する。

人間はさらさらしている方がよい人間なのだ」

「誰のことを言ってるんだ」

「スパルタクスの皇帝モルグやシルヴィエの皇帝イータのことさ。

いずれにせよ、今日起こったイユにまつわる現象から、さまざまな憶測が成り立つ。粗雑な雑把な理屈だが、これが今回の一件の収穫とも言える。

さまざまな事象が繋がっていた」

マコトヤがそう語っている時でも、アヴァは相変わらず、燦燦と赫く双眸で彼方を見つめている。聖堂の薔薇窓のように。

イリユーシユはエリイカを紹介した。彼女は状況もわからぬまま、席を勧められ、毛皮の敷物の上に坐る。

「しばらく傷を癒すがよい。温泉もある」

マハールーシャがそう言った。エリイカは唇を噛み、無念の表情であつたが、已むなし

とあきらめ、黙って頷く。

「感謝する」

そう言った。翼の傷には秘蔵の白い布が当てられ、イユの聖句が添えられる。

岩の暖炉は赤々と、よく乾いた木を少し丈燃やしていた。

塩漬けの肉が冷蔵倉庫から出される。木の串に刺され、じっくり炙られた。

雪を溶かした水で、肉のスープが作られる。

塩は岩塩だった。地層の圧迫を受けてできた岩塩柱が近くにあり、古代の岩塩採掘坑であったが、今は廃坑となっていて、残った岩塩をイリユーシュたちがかき集めて肉の保存用に使っている。

初期の頃（と言っても、わずか数日前までのことだが）の冷凍保存は、解凍が大変であったため、狩猟した肉の保存方法を塩漬けに切り替えているのである。

さて、叡断なる聖者、甚深なる般若波羅蜜の研究者、最も偉大な沙門マコトやエリイカに説明した。まるで教授の講義のようである。

「現存する古代資料『マニユアル』に拠れば、この世界は主に南大陸（スール）、北大陸（ノルテ）、東大陸（オエステ）、西大陸（エステ）で構成されている。

総面積は二十億四千七百二十八万五千二百二十四km²、陸地の面積は約五億九千五百七十六万km²、現象世界の約四倍だ。

今、小生らのいるこの聖なる山は、北大陸（ノルテ）の北西部にある大山脈の一部で、アカデミア天領と呼ばれる聖域の東端にある。アカデミア天領の中心には、聖の聖なる真の学院がある。それがアカデミアだ。

真理を探究し、真理を保持し、真理を深め、真理を護る。この真理とは、実在実存の真義の究竟の真奥の臍下丹田たる本質神髄のうちの心臓たるべき部分の精髓である魂魄を精製した純粋なる、大本元基なる神聖究極真を言う。

アカデミアこそ生きる意味の至高であり、存在を支える柱だ。世界を構築する棟梁（アルケー＝原理）だ。最も重要な場所だ。

精神と魂の故郷。

現象世界から来る人間の多くが、ここどこかに着陸する。その由来は誰も、いや、今いる人間のほとんどは知らない。

エリイカ、あなたの目指す場所はどこか」

「よくわかっていないのだが、『黒い皇帝のいる国』だ」

マコトヤの顔がわずかに曇る。

「なぜ」

エリイカも顔を訝しげに顰め、

「いや、そちらこそ、さような面持ちで、なぜ、訊くのか」

マコトヤは暗鬱な思慮深いまなざしで、

「その名を聞いて、なぜと問わずにいられようか。

あなたに教えよう、その国の名はスパルタクス。今まさに、このアカデミア天領に侵入し、神聖を冒瀆しようとしている帝国スパルタクスだ。

そして、あゝ、口にするも忌まわしき黒い皇帝とは、スパルタクスの皇帝モルグ・マテリアル・ノワールソレイユ、黒い皇帝と呼ばれる。

彼が統治するようになってから、スパルタクス帝国は、この真如の世界にあるまじき国となった。この北大陸に、神聖シルヴィエ帝国のような国がまた一つ増えたのだ。

我らが北大陸^{ノルテ}丈ではない。四つの大陸は大きく物質主義へと傾きつつある。

この真如の世界は、かつては真義を第一とした。すべてに勝って優先されていた。

しかし、いつしか東西南北の各大陸に物質主義、利益主義に走る傾向が生まれ、武のみを優先する超大国が生まれた。彼らが猛威を振り、自ずから弱肉強食がまかり通る世界となってしまったのである。

その最たる者が神聖シルヴィエ帝国だ。アカデミアを篡奪し、物的にも精神的にも世界に君臨しようと画策している。

十億を優に超える軍兵を以て我らが大陸を蹂躪せんとし、巨大な経済力を背景に、圧倒的な科学力で他国を圧していたが、スパルタクスまでもがモルグの統治の下、正義を顧みない、人を獣化させる、力丈の価値観を謳うようになった」

エリイカは表情を動かさなかった。

「あたしの往く目的はそういうこととは何ら関わりがない。

私怨だ。強い私怨だ。大義を超える。

人々のためを思うのも結構だが、世界中の人の苦しみを、もし如実に知る能力があれば、その者は生きることには堪えられないだろう。どれほどの信じがたい悲惨が、理不尽が、残酷があると思うか。どれほどの絶望が。

人が他人の苦しみを他人事と思うのは、生き残るために已むを得ない智慧なのだ。いや、生き残るための本能だ」

冷然と言うのである。

「復讐ということか。しかし、あなたは現象世界で生きていた。誰があなたに教えたのか、黒い皇帝の存在を」

マコトヤが言うと、エリイカは語った。

第九章 エリイカの事情 世界の事情

土砂降り。

捜査は遅々として進まなかった。エリイカは部活が終わると、所轄の警察署に寄った。担当者がいないことも多かったが、最初のうちは、いれば差し支えない話をしてくれた。だが、三回目くらいからは、いても出て来なくなった。それでも通った。その後は、現場を確認に行くのが常だった。部活が午後八時半に終わるから、現場に行くのは八時過ぎで、暗い。

エリイカよりも強い姉がやられてしまったのだから、当然危険であったが、彼女の性分はそれを顧みなかった。

姉は数か月前からストーカーの被害を受けていた。

相手はまったく見知らぬ男で、下校の際、いつも尾行されていたらしい。或る日、姉は面と向かって文句を言ったが、男は何も言わず、背を向けて去った。肩を落としているように見えたので、快活明朗で直截的な性格の姉は、もう来ないだろう、と思っただけ。陰質な人間の性分をよくわかっていなかった。

攻撃は陰に籠もって激しくなる。姿を見せずに、盗撮し、それを家のポストに入れたり、通学路に破った姉の写真に血糊をつけて撒いてあったり、猫の死骸を家の前に置かれたりしたこともあった。

両親は心配し、警察に通報し、警察官が立ち寄って帰った次の日、姉の写真を使った猥褻なカラージュ写真が家の近くの壁や電柱に貼られた。恐らくは家に警官が来ていたのをどこかから見ていたのだろう。姉は激怒した。

警察官に激しく訴える。彼らは捜査すると言ったが、その悠長な態度に苛立って、待ち切れぬ姉は逆に待ち伏せて男を追跡し、アパートを突き止めた。表札に手書きされた小さな文字がある。伊香鎧磨迦という名であった。

そのままの勢いで、乗り込んで痛罵し、警察へ連行しようとする。

「わかりました。行きます。支度をさせてください」

マカ（磨迦）は、そう言った。

姉は許した。その判断は明らかに、こどもゆえの甘さであった。

最初に鉄の棒で後頭部を打ち、気を喪わせて、衣服を脱がして写真を撮って犯し、刺し、ゴキブリの餌を播いた。死骸をゴキブリに喰わせようと考えたらしい。むろん、死骸を消滅させようとしてのことではなく、ただ、「復讐」のため、ゴキブリの餌にするという、彼女がもし生きていたならば、最も嫌がるような、怖いことをしてやろうという動機、「恨みを晴らす」ためであつたらしい。

遺体は十日後に、あまりの腐臭のため、近所の人が通報し、家主から鍵を借りた警察官が発見した。その部屋の住人の姿はない。

解剖の結果、姉は最初の後頭部の打撃で意識を喪ったが、まだ生きていて、頭部への衝撃によって脳内出血し、嘔吐した痕跡があつた。だが、マカはそれを平然と、容赦なく強姦したらしい。その話を聞いて、エリイカの憤りは頂点に達した。

「必ず殺す」

もし、この怒りが正義でないなら、正義など要らない。もしくは、正義など、この世に存在しないものの名だ。その想いが貫く。

マカは殺害後、逃亡していた。エリイカは警察の逮捕の報告を待った。災厄はそればかりではない。

ニュースが流れ、ネットのパッシングが起こった。

『自分から男のアパートに言ったんだって（笑）』『女子高生だろ、男の部屋に行くって、どういう意味かわかるだろw』『その気がなきや行かねーでしょ（笑）』

匿名性に隠れた、卑怯で、陰険で、執拗な攻撃である。エリイカが少しでも反論しようものなら、さらに炎上した。

無数の憤りを抑え、エリイカは男を探すことに集中した。

見つからない焦燥の日々に滾る。ようやく、マカが逮捕された。彼はただ罪を逃れたいがために、「女が誘った」、「同意の下だった」、「女の方から先に暴力を振るつた」などと、嘘を主張し、弁護士は「心神喪失状態」と言った。

エリイカは憤激する。

「心身を喪失すれば、人を殺してもよいのか。そういうことじゃないと反駁するだろうが、

結果的には、そういうこと以外の何ものでもない。被害者の家族にとっては、そうだ。あたしたちの心情は顧みられないのか」

エリイカは警察に、姉の性格や、武術をやっていたことや、暴力を振るうことがあったかなどと訊かれた。まるで犯人扱いだ。

憤りと悔しさで魂も裂ける日々。

そんな時である。

あろうことか、男は拘置所から姿を消した。何という警察のずさん。世間の非難はやや矛先を変えたが、実際、不可思議なことであった。

まるで、消えたようにいなくなったらしい。

エリイカは説明を求め、警察署に行き、警察官に詰め寄ったが、口は閉ざされていた。「捜査に関することは言えない」

憤懣悲憤の涙。この絶対の正義の憤りが通らないならば、この世界に何の価値もない、消えてしまえ、そう思った。そう思い続けた。もはや日も夜もわからないくらい、思い続け、憎み続け、怒り続け、悲しみに裂かれた。その頃のことは、思い出そうとしても思い出せない。

だが、眠れず、食べられず、狂しい憤りの日々を過ごすうち、次第に、神秘的な、忘我恍惚の状態が訪れるようになった。何かを感じていた。予感していた。憤死狂死の日を、だろうか。

わからなかった。しかし、感じていたのである。

或る日、部屋に帰ると、白い貴公子がエリイカを待っていた。家人は気がついていない。気がついていれば、彼女に言ったであろう。

どこから入って来たのかさえもわからない、高貴で玲瓏な顔立ちに氷のような金髪を垂らした男を、彼女は怖れなかった。まるで、最初からそれを知っていたかのように。

自分でも不思議だった。部屋にいることに、驚きすらしなかったのだ。

「おまえの探す男は見つからない。この世界にいない。歪んだ拝物思想に憑かれた権力者に招かれたのだ。獣性を本来あるべき姿と捉えた逆転廻行の思想家にな。

さあ、どうするか。

来るだろうな。おまえは来るだろうな。必ずや。そこがどんな世界であろうとも。そうだとすれば、おまえの姉の死も畢竟、なるべき運命だったのだ」

エリイカは怒り、呆れた。

「意味がわからない。運命だって、よくもそんなことを」

「それだ。そうやって、憤怒に滾り、炎の巫女の性のなすがままに、おまえは奴を追って、その世界に行くことになるのだから。」

おまえのその性格もそのためのものでしかない」

「何を言っているのかわからない。奴は別の世界に逝ったということか。そんな話が信じられるか」

「見せてやろう。たとえ、信じられなくとも、見たものは、まさしく見たのだ。仮に真実ではなかったとしても、切実ならば、現実なのだ。人間である限りは、そこから逃れられない」

「おまえは、いったい」

「レコンキ・レヴォリューノ。ヴァイスコンティ州の侯爵、白い聖騎士団の騎士、スパルタクス帝国の譜代の臣だが、帝国の運命を憂い、敢えて大恩ある皇帝家に背く者。それもまた、君主の真意と国家の真の未来を思えばこそ。」

我こそは『革命の騎士』の一人でもある」

「革命？」

レコンキはそれに応えなかった。

空間を、まるで紙を手で裂くように、びりびりと裂いた。空間であった場所が平面な幕で、現実がそこに映った画像であったかのようなのである。その向こうには、鮮やかな世界があった。

白い山脈、深い森、湖、大河、緑の草原、壮麗な帝都、輝く鎧を着けた数万の兵士たち。

エリイカは見た。一瞬ですべてを。

壮大な世界だ。大帝国。

そして、さらには……………

皇城の謁見の間で、荘厳なる皇帝を拝謁するイカヅチ・マカがいた！ 黒山羊の頭を被り、カラスの羽根で作った長いマントを羽織っている。自分の血の狂気にすっかり陶醉していた。

皇帝が皇杖を振り、言祝ぎ、荘厳に恩寵を賜う仕草をする。その言葉は、

「おまえも今日から、自然の発生する魔性、瘴気、倉廩癡、湿生の生命、超越的で非情な、サイケデリックな悪魔だ。」

何と魅惑的なことか。古来伝承の文様のように。

マカ、悪魔マカとしてこの真如の世界に転生せよ」

エリイカはゆっくりとレコンキを振り返った。爛爛たる火の鳥のまなざしで。

「あそこへは、どうやって行けばいい」

レコンキは欣然と微笑んだ。底意に満ちたまなざしで。

「造作もないこと」

そこまで話すと、エリイカは嗚咽した。

「少し休んだ方がよい」

マコトヤの指示でエリイカに部屋が与えられ、彼女が下がっても、イユは暫時涙していた。止まらない涙を見て、イリユーシュが心配し、

「ひどい話だぜ。しかし、イユ」

「違うのよ、イリユーシュ。わたしにはエリイカの気持ちがよくわかるの。わたしも兄を殺されたわ」

「え」

イリユーシュは黙った。心なしか蒼白に見える。

イユも努めて涙を抑え、ようやく動揺が冷めると、今度は山の天気のように早変わりし、不満たつぷりの顔であった。マコトヤへ言う。

「あんな話は今まで聞いたことがなかったわ」

マコトヤは微笑する。

「あんな話とは」

「北大陸や南大陸とか、地理のことよ」

彼は平然と、

「訊かれなかったからね」

「わたしだって知らないから訊きようがないわ」

「小生も訊かれなくては答えようがない」

イリユーシュが間に入る。

「まあ、いいじゃないか。

ちなみに、マコトヤ、古代資料『マニュアル』とやらは、いったい、どこに所蔵されているんだ」

「写本であれば、各地の大きな修道院や神殿にあるね。

何よりも、アカデミアに、そのオリジナルがある」

「いつか行ってみたいな、そのアカデミアとやらに。俺も何か気になる、その『マニュアル』ってのが。

どうも引っ掛かるんだな」

板で仕切られた部屋に下がったエリイカは、しばらく興奮が冷めなかった。忘れる日はないのに、まざまざと見せつけられたような気分だ。辛い思い出だった。

今は悲しみ苦しみ時ではないと、心を律す。冷静に無慈悲になるべき時であると再び決した。深紅の翼を持つ復讐者の双眸は冷厳に沈む。

リンレイが来た。

「いいですか」

「いいよ、どうぞ」

「お風呂です。湯浴みしてください。温泉から汲んでますので、薬効もあります。傷を癒します」

香り高いシーダーの樹木を削り抜いて作った大きな浴槽に、湯気の立つ温泉の湯がたっぷり入っている。山賊らが運んだ温泉の湯を沸かして入れたものだ。こういうことがいとも簡単にできるようになったのは、短い期間で登窯式の暖炉や竈や湯沸かしなどが増設されたためであった。ミカエロがさまざまな都市計画とともに、温泉を直接引く方策をも検討している。

ほんの一瞬、エリイカは（男っぽい自分を棚に上げて）少年のようなリンレイの前で脱ぐことを躊躇ったが、バカバカしいと思い直し、さらりと衣を落とす。

素足の指先が浸かった瞬間から、

「あゝ、何と心地よいことか。気持ちいい」

静かに身を沈めて、

「手の指の先、足の指の先に血流が甦る。あゝ、疲れが癒えるよ。暖まる。素晴らしいものだ」

湯の源泉は特に傷を癒すものを選んであった。湯治も目的の一つであったからである。肉体と精神がともに癒されるような癒しをエリイカは感じた。

湯を掛けながら、リンレイはふと気がつく。

「これは」

思わず声にってしまう。それは刺青に見えた。だが、巫女であったという彼女に刺青があるのも（古代ならいざ知らず）不自然で、訳ありとも思い、言及すまい、と思うのと、声が漏れるのと、同時であった。

「え、何」

エリイカも何ごとかと思わざるを得ない。

「いえ、何でもないんです、あゝ、大したことじゃなくて、これです。この二の腕のところに」

「何だろうか、こんなものはなかった。もったも、こっちの世界に来てから服脱ぐことがなかったから、いつできたものか。」

痣かな

「それにしても形が整い、きれいに見えます。鳥でしょうか」

「鳥？」

「翼を広げた鳳凰のようにも見えます。美しい、赤くて」

「自分では見えにくい。うむ。どれ、どれ。っしょ。ん？」

「……え？」

「どうしたんですか」

「これは」

「何ですか」

「紋だ。我が神社の紋だ」

「鳥なんですか」

「火の鳥、なぜこんな痣が」

「何だか、気のせいかな、ますます鮮やかになって、かたちも細かく、はつきりしたように思いますが」

「湯のせいだろう、血行が良くなって、色つやが。」

不思議だ、刺青と言われても仕方ない」

その話は、それで終わった。

リンレイは手ですくった湯をエリイカに掛けながら、柔らかい布で拭く。そうやって湯浴みを手伝いながら、スパルタクスへの道程を話した。エリイカは聴きながらも、奇妙な感触を覚えざるを得ない。

「スパルタクスへ行くなら、直線の陸路よりエンジンボール川を船で行くのが速いし、確実

なようです。このまま峡谷を南下し、ヴォゼヘルゴに入り、ストラングラーという地方都市を目指すといふことでした。霧深い街らしいですよ。

ヴォゼヘルゴは、かつてシルヴィエ神聖帝国の策略で内乱状態になって危険でしたが、神聖帝国の勢力を撃退したクラウド・レオン・ドラゴ連邦の一部となって、今は非常に安定しているようです。

クラウドは、三年前の神聖シルヴィエ帝国とクラウド・レオン・ドラゴ連邦の大戦の後には、この世界で、最高に正義が生きている国と言っても過言ではありません。

アカデミアの守護者です」

「そうか。傷が癒えれば、すぐ出発したい。あゝ、焦燥する」

湯の成分が沁みて、傷が快癒するように覚えた。傷が癒えるような気がする、心もわずかに安らぐかのように感じる。

さて、その頃。

誰もがマコトヤの説いた言葉を考え、解釈し、憂慮した。

最大の関心事が聖剣のことではなくなり、究竟神アスラがもしも敵方になったら、という事に変わってきている。

リンレイがそれを問うがため、マコトヤの部屋（区画）を訪れると、既にアガメムノンが来ていた。イリユーシュもいた。マコトヤは語った。

「むろん、聖剣が大きな鍵だ。

イユの対になる金剛界的なイユの議論は公式にされたことはない。むろん、ありふれた思考なので、多くの識者や、ちょっと学問を齧った者でも考えついでであろうことは間違いないが、たとえば、神聖シルヴィエ帝国がそれを学究しているという話は今まで聞いたことがない。

アスラについても同じだ。

実は先ほどから、ずっと考えているのだが。やはり……」

マコトヤの眼が集中し、何もない虚空の一点を見つめる。

「アスラの顕現は、いつもあるがゆえに、絶対にあり得ないのではないか、という結論だ。実際、今まで起こったことがない。

もっとも、金剛界系の龍肯の力が起こったのも、イリユーシュの持つ聖剣で初めて見た

くらいだが」

「何だよ、それじゃ当てになんねえな……、ちょっと待て、じゃ、俺が世界史上初？」

「そうとも言える。有史以降はない」

「有史以前は」

「記録がないから、確かめようがないだろ」

「じゃ、ないのか」

「わからないな。」

ふむ。今、急に思いついたんだが、すなわち、アスラが顕象するとしたらどういう状況かということだが」

「何だよ、どっちなんだよ、あり得るのか、起こるのか」

「わからない。」

だが」

「だが？」

「陰が極まって陽となるように、又陽が極まって陰となるように、常識を遙かに超えた途方もなく大きな力が炸裂すれば、何が起こっても不思議はない。途轍もない、物凄く大きな力が起これば、あり得るかもしれない、アスラも」

「なるほど」

「物凄く大きな力だ、むろん。」

超弩級の力、一切の平行宇宙をもそのほんの一部でしかないとするほど無際限に巨大な、いわゆる全世界を凌駕し、その世界のすべてを吹き飛ばし、超越するような、途方もない力が起これば」

「だから、聖剣が狙われるのか」

「いや、聖剣では無理だ。それをしようとするならば、求めるものは聖剣の力ではない」
黙って聞いていたアガメムノンが眼を丸くした。

「不足だというのか、イリユーシユの持つあの聖剣では。あんなに凄いのに」

「不足だ。むろんだ。さすがに不足であろう、今、小生が言った言葉が理解できていないようだな。全然不足だ」

リンレイも問う、

「大きな力って？ たとえば」

「すぐに思い泛ぶの龍神だ。これほどの巨大な力はない。龍族のうちで知られる限り、最

大のものは、幾千の平行宇宙を跨ぐほど巨大で、髭がかすった丈で一つの宇宙が消滅するとまで言われる。

龍神は水であり、陰であり、胎蔵界の原理で動く。

それがもし金剛界系のイユの力を受けて発動する、胎蔵界の本質を帯びた龍肯として顕現するならば、アスラを生むための一方の力（胎蔵界の力）として足るであろう」

イリユーシユは銀嶺の方角を見上げた。

「龍の力なら、ここにも機らいているようだが」

「そのとおりだ。龍神の背がある。恐らくこのイデアの大地（イデアの地球、イデア・アース、Idea Earth I-E）に於いては、最大の龍神力であろう」

「では」

「ここも起り得る場所の一つだ」

「じゃ、もう一つの超弩級の力がここに来れば」

「それは、いったい、何だ」

「いくつか考えられるが、龍神の永遠の敵と言えば」

「鳥だ。蛇の敵が鳥であるように。それは」

「あゝ、そういう話なら聞いたことがある、迦楼羅天、ガルーダだ」

「だけど、それはどこに潜んでいるのか。ここに来させるように、図っている奴がどこかにいるだろうか」

「まったく、わからないね。小生も迦楼羅が怪しいとにらむが」

「ガルーダを扱う民族や国家があるか、あるいは団体、いや、個人でもいいが」

「東大陸のリヨンリャンリユーゼン（大華嚴龍國）か、イン||イ・インデイス（殷陀羅尼）だろうな。」

しかし、彼らはこの問題で表舞台には出て来ていないから、そういう謀りごとがあるかどうかについては、何とも言えない」

イリユーシユは問う。

「今、我々の眼に見え、知性で理解できる、諸々の現象から推測すれば、シルヴィエとスパルタクスという二つの大帝国は、聖剣を狙っている。彼らが金剛界系のイユを探しているとか、アスラを研究している痕跡はない。

取り敢えずそういう了解でよいか、マコトヤ」

「小生のアンテナでつかんでいる範囲内で考えれば、そうだ。それが情報のすべてを網羅

していないことを小生自身も承知しているがね」

「だが、知る限りに於いては、イユと聖剣が狙いなんだろう？ 狙いがイユと聖剣なら、イユと聖剣を集中して守ろう。他については、取り敢えず捨て置く。」

それでよいということになる」

マコトやは黙った。ミカエロが来た。

「その断言は危険だな。いろいろな可能性を考えておこう」

マコトやもうなずいた。

アガメモノンが言う、

「とは言え、現実優先だ。」

帝国スパルタクスは既にクラウド・レオンドラゴ連邦内に入っている。アカデミア天領との境は間近だ。峡谷を溯って来るつもりであろう。

シルヴィエの艦隊が北極圏の海を渡っているという情報もある」

第十章 兵（ツワモノ）

老人となった今も筋骨逞しいロンヴァル（爺婆瓏）・ウェイ・ヘミング少佐。

スパルタクス帝国の西部ガスパーニュ地方の古い貴族の出身である。貴族と言っても、すっかり零落して、庶民の富裕層以下の暮らしであったが。そもそもガスパーニュ地方は独立国家であった。スパルタクスに蹂躪された民族の一つで、征服された王国の一つでもある。

日焼けした、短い白い髪に、白く短い顎鬚を生やし、歴戦の老将は節くれ立った太い指に皺を刻んでいた。その指を組んで、逆さに立てた剣の柄頭に乗せ、じっと地方官憲の話を聞いている。

聞き終えると、書記官に報告書をまとめさせつ、今日までの労苦を思い返していた。

「ルイ（累）少尉」

少佐付きの将校、ルイは、

「は、ここにあります。少佐」

「いやはや、耄碌したものか。最近、過去を振り返る。」

我らが栄光の帝国スパルタクスから、ここに至るまで、いくつかの国を通過せねばなら

なかったが、それを思い出しておる。交渉もしたが、力で脅かしもし、遂にアカデミアの守護者を自称するクラウド連邦の勢力内であるハグレーポルガに到達し、戦争をしながら北上してきた」

「尋常な労苦ではございませんでしたから」

「兵たちには長く辛い思いをさせておる」

ルイ少尉はじつと老将を見つめた。

『いったい、この戦争に何の意味があるのか』

少佐の口調がそう言っているように聞こえたからであった。あたかも眼でその言葉を制止しようとするかのように。

『その言葉丈は言ってはいけません。皇帝はそれを言わせようとしているのですから。西部の人間を片っ端から、潰そうとしているのですから』

歴戦の結果、神慮に富んだ老将は微笑した。

「だが、兵とはそういうものだ。」

予備隊（庶民から徴兵され、二年間の兵役を義務づけられた者たちで編成される）ならともかく、帝国正規軍ならばいかなる艱難辛苦も堪えねばならぬ。わしも幾十年、辛酸を舐めた」

「はい」

「さて、アカデミアへの道はさらに過酷だ。東の壁は人間には登れぬ。北から攻めるには、北極の海を渡って、クロウミー海に入らねばならぬ。流水で、到底、進めぬ」

「西ルートは我々にとっては大きな遠回りであり、クラウド連邦直轄領をまともに横断しなければなりません。」

必然的に南ルートで大河を溯り、最短でクラウドの勢力下を縦断し、峡谷を逆行するしかありません」

「いずれにせよ、難儀なことだ。」

これによって、何千何万の人生が奪われる。一人の人間にとっては、その生が世界の始まりであり、終わりであり、すべてであるにもかかわらず。

家族を、仲間を、愛する者を、信じる者を護るためと言っても、純粹な戦争など存在しない。

その他のすべての現実と同様に、無数の思惑で動く。官僚の辻褄合わせであったり、政治家のパワーウォーズであったり、利権や大企業のお金儲けであったり、思い込みや自己満

足であったりするのだ。

その中に愛国や正義への思いや自己犠牲の精神なども入り交じるから、さらに複雑だ。現実には常に複雑な、ごった煮で、一様なことなど、かつて一度もない。

願わくば、独り皇帝陛下のお考えだが、掛け替えのない人生と引き換えてもよいもの、家族とを持つ何万もの人々の死を以ても贖うに値する真実正義であることを。

そう考え、そう信じるしかない」

あゝ、そうあってくれば、どれほど気が楽か。

だが、それは望み得ない望みであった。絶望的な望みであった。

第十一章 一騎当、二千の女戦闘士ジン・メタルハート（暎・鋼鉄心魂）

ジン・メタルハートはあの敗北の後、たちまち十kmあまりも下って、標高四千mにある上イヴァント村の近くに着いた。

村は古街道沿いにならぶ、玄武岩を積んだ三階建ての建物が中心である。窓が少なく、あっても小さく、仮面のような表情で、素材のせいもあって、厳めしい。

ちようど街道を底にした小さな谷のような景観であった。

ちなみに三階建てと言ったが、街道から見れば三階建てであっても、傾斜地に建つゆえに、谷側に建つ家の裏口から見れば三階は五階であり、山側に建つ家の裏からは三階が一階であった。

いずれも風雪に耐えた古いものである。中には、昔ながらの山小屋もあり、そちらの方が本来は古い家であったが、建築素材の性質上、数百年に一度は建て直しを行うので、物的には石造建築よりも新しい建物となっていた。

丸太を組んだ素朴な木造建築を見れば、この村が元々は、猟師や樵の住居や集会場であったことがわかる。

様子を窺う。怪しい気配はないようであった。だが。

よく見れば、ほとんど人影のない街道、村人の姿もこの寒さではあろうはずもないのに、バルの入口の階段に坐る酔いどれふうの男。

「間違いない」

バルの前に立つ。

魁偉なジンを見ても、坐っていた男は驚くふうもなく、親指で背後を指した。入れという意味だ。入った。

中は薄暗く、カウンターに五、六人の厳つい男たち。

「ジン・メタルハート、ロンヴァル少佐の連隊に属する斥候隊長、プログレス少尉だ。

皇帝が何を依頼したかは知らない。ただ連隊長から金を渡せと言われた。それがこれだ」
重い金貨の皮袋を置く。ジンは奪うように取った。

言う、

「一つ丈教えておこう。少佐へ伝えろ。イヴァント山の山頂近くで、物は確認した、とな。

それ丈言えば、わかる」

ジンは去った。

無敵の彼女も深慮した。さすが最高の聖剣、大宇宙の究竟と言われる丈のことはある。神ならぬ身なれば、勝てようはずもない。依頼主の依頼の意図を疑った。まことに我が勝つと思つて依頼したか。

「そう思えば、神聖シルヴィエ帝国の絶対神聖皇帝イータの意図すらも、計り知れない」
疑念は無限にループする。それを強靱な魂魄で制止した。

「ふ。

いかようなことも、疑うならば無際限に疑える。空疎な絡繰りにしかず。力丈が信に足る。我唯足るを知る」

我唯知足とは、不足を知らず、すなわち執著を厭離した結果、満足しか知らずの義であるが、彼女は敢えてそれを曲げて使った。

すなわち、実践的な充足を齎すもののみを知ればよい、他は知る要もない、と。

「復讐、おお、忘れるものか。あの大戦で、我とシルヴィエとともに勝利を目前に壊滅した。血が滾るわ。必ず斃す。

アカデミアを斃すためには、シルヴィエの力が必須だ。又報酬も莫大である。我は判断す。

暫時、行動する。様子を見る。捨てるべきは捨て、殺すべきは殺す」

超絶的最高級の傭兵（百万の兵と対等の価値があると言われる）である彼女は二重に契約していた。

むろん、主契約はシルヴィエ。スパルタクスとの契約は、シルヴィエの計略の一部であ

った。モルグはイータに紹介されてジンを雇ったが、それはイータの罠である。数か月前のことだ。

北緯七十度、神聖シルヴィエ帝国の首都ヒムロの中央にある皇帝の宮殿であり、聖イギ教の聖堂であり、朝廷及び政務の中樞であるヒエログリフ大聖堂にある皇帝の謁見広間、天井は見えぬほど高く、正方形の床の広さは五百m四方。

その巨大な空間に、ジン・メタルハートと、鬚のない端正な顔立ち、大理石の彫刻のように滑らかな白皙の肌の絶対神聖皇帝イータとは対面していた。前の皇帝レオン・フランシスコ・デル・シルヴィエ皇帝を廃位に追い込み、至高の玉座に就いた智謀のクーデター皇帝からの依頼はシンプルであった。

「スパルタクス帝国の皇帝モルグとは密約を交わしている。ともにアカデミアは挟撃し、征服しよう、とな。

朕がおまえをモルグへ紹介する。奴の命令に遵い、働け。それ丈だ。スパルタクスを支援せよ。

奴は龍肯の聖なる剣を篡奪しようと呼び掛けた。だが、奴の真の目的がそれでないことはお見通しだ。奴は究竟の太極を顕現させようと計っておる。朕がそれを知るとも知らずにな。

奴は、おゝ、その秘儀を全うし、朕を、いや、神聖シルヴィエの上に君臨し、全世界の頂点に立とうと謀っておる」

「愚かな」

「秘儀に関する研究に関しては、こちらに百年の長がある。

数千人の研究者や各界の専門家を擁する巨大な研究所を百数十年前に構築し、以来、微細緻密、精妙かつ柔軟に、広範囲に調査研究しておる。

モルグがいかに天才ととも、一代の、独りの超人の成し得ることには限りがある。百人の人間が成し遂げる仕事は一人の百倍ではない。千倍にも万倍にもなる」

皆が各居室に下がっても、イリユーシユは毛皮の敷物に半ば横たわり、羊毛の袋にもたれ、暖炉の炎を見つめながら、問う、

「たとえば、聖剣に限って論ずるとして、神聖シルヴィエ帝国は、どのくらいつかんでいるのだろう」

マコトやは応えた、

「すべてだ。」

彼らは百年以上前から研究機関を構築し、古今東西の文献を収集し、各界の人材を集め、又調査のために何十年もかけて優秀な探究者を現地に派遣し、精密なシミュレーションを描いている。

彼らは既に絵を完成している」

イリユーシユは感心した。

「大したもんだ。昔から、考える人間はよく考えるもんだな。」

だが、一人で、対抗できるあんたは、もっと凄い」

「光栄だな」

マコトやは片眼鏡を指で直しつつ、

「だが、彼らが聖剣をどのように使おうとしているかは不明だ」

「そうか」

「剣は龍肯（又は究竟神）の金剛界的な力の顕現だ。恐るべき兵器ではあるが、イユがいなければ機能しないし、今のところイリユーシユ、おまえ以外に触って無事な奴もない。」

スパルタクスはともかく、シルヴィエはこれも承知のはずなんだが。どう運営するのか見当もつかない。だが、長年の研究によって、何だかの知見に達し、何だかの方策を見出しているはずだ」

「俺をさらって部下にするとか？」

「無理そうだな」

そう言っていると、マコトやはかんからから笑う。

暫時、和やかであったが……

憂鬱な黒いまなざしのミカエロが入室し、

「夜分に失礼、宜しいですか。我々には準備が必要です。シルヴィエの空軍やスパルタクスの陸軍に対抗するためです。」

東の壁、青龍なる聖イヴァント山は越えられないという常識は間もなく崩されるでしょう。奴らはウィルスのように進化します。

さあ、時間は少ない。しかし、まだまだ絶望的ではありません。

まずは砦です。もっと強固にしましょう。少なくとも、今のままでは上からの攻撃に弱い。飛行機は已むを得ないとしても、歩兵にすら上から攻撃されるようでは話にならない」

「塀を強固に、城壁のようにして、なおかつ高くするのか？」

「足りませんね。嶺に城砦を造ればよいのです。その上はありません。嶺に沿って横に広がった、嶺の上の背鰭のような城砦を造ればよいのです」

「ここを放棄するのか？ マガダの亡骸を」

「いいえ。」

砦を強化するに当たっては、もっと都市としての機能と軍隊としての機能を充実させなければなりません。もっと装備の規模を大きくし、人を増やす。

砦を拡大し、軍事都市としなければなりません。そのためには、面積を拡大しなければならぬのです」

「嶺の砦を造って、ここも拡大するのか」

「それ丈ではだめです。物資を麓から輸送しなければ、ここは何もないから、とても成り立ちません。下からの物資を、少なくとも、この砦と嶺の砦とに上げるシステムが必要です」

「そんなに、いろいろできるのか」

「三つを一つでするのです。」

輸送のための踏み固めた滑らかな道を作り、橇で引き上げるのです。次第に発展させ、最終的にはレールを麓から嶺まで引きます」

「こんな急斜面を車輪とレールじゃ登れないぞ。だいたい、鉄がそんなにたくさんあるもんか」

「時間をかけましょう、最初は橇で。」

物資が豊かになれば、木材でレールと車輪を、最終的には鉄のレールと車輪を使うようにしましょう。

ただし、木も鉄も、車輪は齒車にして、レールには齒を刻み、齒車と噛み合わせさせ、ケーブルカーのように綱で牽いて登らせるようにすることを考えています。

車輪の齒車は逆回転防止の処置を施しましょう。

当面は大型の長毛牛を動力とし、大きな巻き上げ機を回させ、巻き上げるように引き上げるのです」

「しかし、砦の拡大は」

「防衛のために道の両脇を、塀、又は城壁で防護します。そして、壁の内側を街にするのです。麓から嶺までの細長い街が出来上がります。円形に広がった街に比べて連絡に時間

がかかるようにも見えますが、どこにいても、交通機関のすぐ傍なので、お互いの連絡は速い。

そうです、この砦と嶺丈ではなく、ポイント、ポイントで駅となる街を置くのです。

後でレールの本数を増やす必要があることを考慮し、最初からそれを想定した設置の仕方を行います。そのために、用地の確保をしておく必要があります」

「なるほど。物資と人材と時間があればできるかもしれない。

防衛と都市としての発展と輸送が同時に構築できるって訳か」

「最終的には巨大なT字型の都市となるでしょう。道もいきなり嶺は無理です。少しずつ延長するのです。

いずれにせよ、私の知る限り、できる丈、大量の職人を集めましょう。鍛冶や大工や石工や。建築士や測量士なども必要です。

そのためには、食糧を始めとする、さまざまな物資が必要です。お金もね」

「どうやって集める」

「自然に集まるでしょうね」

「え？」

第十二章 領主バロン・ゴリラテ 初夜権について

アカデミア天領はアカデミアの領地であるが、管理運営のために複数の王が統治し、緩やかな連邦的な体制を築いている。

それら王の下には封建貴族がいて、それぞれ領主として一定の権限を持ち、自治していた。

龍肯砦の所在地は一応、男爵ゴリラテの管轄となっている。なぜ、一応、などと言うかと言えば、ほとんど住む人もいない丈でなく、ほぼ人の手が入らない、広大な野生の土地のうちの一つだからである。森や湖畔、高原や小さな溪谷、そういうところばかりを巡回した。羊牧牛飼いしか産業のないところである。人も疎らであった。

そんな中であっても、ゴリラテが立派な龍馬（龍と馬の間に生まれた種族。一日、又は一夜で四千里を走る。なお、日本の里程で、一里は四km。ゴリラテは先祖代々この育成に努め、長い年月をかけて数百頭を飼育していた）に跨って領内を廻ると、誰もが姿を消す。

暴君として知られていた。最近、初夜権を復活させて、さらに悪名を高めている。

初夜権とは、その字のとおり、初夜とともに過ごす権利を（結婚相手よりも優先して）持つことであるが、主として男性領主が花嫁と初夜を過ごす権利を言う。

結婚した娘が処女であるかどうかを確かめるという名目と、終わった後に贈り物をするなど、結婚をお祝いする名目もあったようであるが、あからさまに怪しい制度で、近代化とともに廃れていったが、ゴリラテは敢えて復活させたのである。

だが、怪力で乱暴狼藉など屁とも思わぬこの暴君に物申す者などおらず、彼は何らの罪科も思うことなく、悠々と領地の、馬を進めやすい場所のみを、楽しく巡回した。

しかし、さすがに先週、興奮のあまり乱暴し過ぎて、娘を死なせてしまったときは、村人たちも黙っていなかった。激しく抗議したが、軍隊の出動に死傷者まで出す大事件となった。

軌道建設のために調査していた一隊から、その報告を受けたイリューシュは青ざめた顔になり、静かに立ち上がった。

「どこ行くの」

イユの問い掛けにも、

「わからない。少し頭を冷やす」

そう言い残し、速足で姿を消した。

「ふうん」

イユがそれで納得するはずもなく、リンレイに声をかけて、ともに後をつけた。案の定である。イリューシュが厩の前にいた。

「龍馬を出せ」

山賊に命じて颯爽と跨る。

「わたしたちも行くのよ」

「しかし、僕は龍馬に乗れません」

「わたしもよ。バカね、あそこにリカオンがいるわ」

リカオンはおかしそうににやつと笑い、

「とんだじゃじゃ馬娘たちだわい」

彼にはイリューシュの向かう方向の見当がついているようで、姿が見えなくなっても、迷うことなく進む。

高原と山との境にある森に着陸し、リカオンは、

「気をつけて、静かに。進むぜ、そつとね」

木陰に隠れつつ行くと、百mくらい先に、イリユーシュと龍馬が。彼は何かを拾っていた。遠くて判然としないが、イリユーシュがガラガラ滾っているように、イユは感じる。

さて、領主の館では、事件の後、巡回に出るべきかどうかを迷っていたゴリラテが出掛けなければ、臆したと思われるを考え、一人勝手に憤って興奮し、颯爽と甲冑を整え、龍馬を出させた。

しばらく村落や牧地を廻ると、高地を廻りたくなった。

「噂の砦を遠望したい」

護衛の騎士アコムは言った、

「殿下、御意のままに」

「いずれ成敗せねばならん」

「ええ、昨晚、偵察兵がやられました。軽傷丈ですが」

「ふ。韋駄天の異名を取るイスカンデル少尉がいながら、何たること。しかも、自慢の龍馬を奪われるとは」

「しかしながら、軽傷でした。つまり、噂ほどではないのです。噂なんて膨れ上がりますから。龍馬を奪われたのは残念でしたが」

その時、声が。

「やい、ゴリラテ、変態野郎、色魔、好色漢。虐殺野郎、おい、こっちを見ろ！」

見れば、既にイスカンデルの龍馬を乗りこなしているイリユーシュ、何かを投げつけ、

「これでも喰らえ、強姦野郎」

びゅつと飛んで、ゴリラテの顔にぶちゃつと当たって、どろつと垂れたのは、トナカイの大糞。

「ぶつ、ぶわっはつ、何じゃ、こりゃ」

「あはは、ざまあ見やがれ、クソだ、クソ！ おまえにお似合いだよ」

「何たる無礼者、何奴か知らんが、殺せ」

憤怒炸裂の男爵。だが、イリユーシュも剣を抜き、

「見やがれ、これが龍肯剣だ。悪辣を断つ！」

男爵ら、眼を丸くし、

「何とあれが」

「殿下、奪いましょう」

「応ともよ、言うまでもない、あれな小僧っ子など、屁でもないわ」

それを見ていたイユは焦った。

眼に手を当てて、リカオンも、

「あちゃ、独りで何をする気か、イユなくして軍隊に勝てるものか」

イユなくして聖剣の絶大な力は發揮できない。確かに神護の武器で普通に戦っても、使
い手に依れば相当の力を出せるはずであったが。

イリユーシユは未熟だし、敵は武装して多勢だ。

だが、怯むことなき聖剣の主は龍馬にグイッと踏ん張り、

「罪もなき乙女を姦し殺すなど、貴族の名にも武人の名にも恥ずかしき者 いやさ、男に
も相応しくなく、人にすらあらぬかな」

「あゝ、イリユーシユのバカ、無茶よ」

そう言つて、イユは堪らず真兇を唱え、

「のふまくさむあんだうわざらだんかあん」

龍背剣に光が照射し、イリユーシユの怒りが憑依したかのよう、威光が九龍のごとく天
へとまっしぐらに奔り、光裂く。

「おお」

人間どもが驚愕するを、顧みもせず、霹靂が轟き、雷霆は男爵を襲う。

「ああああああ、あぎゃああああ」

絶叫とともにゴリラテが電光に射られて消失す。骨すら残らず。

「見よ、これが天罰だ。文句ある奴は同じくする」

イリユーシユはちょっと吃驚しながらも、傍にイユがいるだろうと察し、動揺を抑えた。

騎士アコムはどうかと言えば、身が怖れで震えている。しかし、見栄で引き下がる訳にも
いかず、

「うらあ、仇だ」

恐るべき眼でにらむイリユーシユ、

「愚か。善悪も定かならぬか。肉体の死の前に、魂が死ぬぞ。さすれば、何のための生よ。
真の死を希うか」

騎士もまた灰となって散る。

誰しもが畏れ跪いた。騎乗の者は馬をおりて額で地を押す。

「お赦しを、どうかお赦しを」

イリユーシユは睥睨し、

「赦してやらあ、おまえらの多くは無罪だ。領主に罪があっても民衆に罪はない。将に罪があっても、兵に罪はない。民や兵が、どうして王や将に逆らえようか。そんなこともわからぬわからずやを、俺は赦せん。

おまえらは皆、俺たちの仲間になれ。この領地は俺たちが運営する。

文句あるか、色憤狂の強姦魔の下にいるのと、どっちがましか、考えろや」

皆さらに平伏する。

「へへい、何の異存がありませんようや。心から」

イユたちは気がつかれないように退散する。

かくして、龍背の城砦は約八百人の集団から、約一万八千人を擁する集団となり、なおかつ広大な土地を手に入れ、同時に、ほぼ零であった女こどもを一万人以上も抱えることとなった。

むろん、旧家臣団やら恩顧の騎士たちの反逆は多々あったが、聖なる剣の絶対的な神威を実際に目の前にすると、あまりの神々しさと荘厳と厳肅と甚深さを畏れ、抗う者は絶無となった。この頃には、聖剣はそれほどの神威を帯びるようになっていたのである。

風のように領内を見て廻ろうとしたイリユーシユの龍馬に同乗したイユは上イヴァント村から下イヴァント村へ、さらに峡谷の岸まで降りて川を下り、平野部に近い場所まで行った時、驚いた。

「何てことなの、まるで夏だわ」

同行していたマコトヤは呆れた顔をしたが、

「そうか、まあ、あそこに、ずうつといれば、冬だと勘違いしても、不思議はないな。今は初夏だ。

君らの住む場所は、季節なんて関係ない。標高八千m以上は万年冬だ。それでも、イヴァントは未だ標高一万八千ぐらいだからまだよ。眞神は四万四千以上だからな」

「眞神山にいたことがあるの?」

「まあね」

全体を俯瞰して深慮したマコトヤは税制を改め、庶民の暮らしに余裕を与えた。雇用が少ない地方だったので、築城などの公共建築工事を起こし、たくさんの人間を雇用した。

「学校を作ろう。アカデミア天領にありながら、学校もないなんて。ここの領主は最低だな。」

建築工事があれば、雇用も生まれる。義務教育を制度化しよう」

イリユーシユは笑って、半ば冗談的に軽い反対をした。

「環境を作ってもやらない奴はやらないぜ。俺は勉強ができない奴を莫迦だとは思わないが、勉強の機会があるのにやらない奴は生きる努力をしない莫迦だと思う。俺の言う勉強っていうのは、当然、学校の勉強も含むけど、それ丈じゃないぜ。」

智慧は生きるためにアイテムだ、知識は生き残るためのウエポンだ」

廃坑だった塩坑は新たな鉱脈が発見され、大量の塩が採取できるようになった。その塩を売る。市場よりも遥かに安く。

肉の保存には塩が不可欠だ。市場よりも安いので、大いに売れたが、これが王の逆鱗に触れる。

マコトヤがくすくす笑いながら、言う。

「塩は王が専売しているからね」

「専売？」

「王が専ら売っているのさ。独占だ。塩の販売をできるのは王のみ、とすることだ。国家の大事な歳入だ。ふふ、眼に見えるようだ、シヴィリアンの怒りが」

「塩は肉の保存に不可欠だ。誰でも必ず買う。自分丈儲けるってことか」

「しかも、家の経済状況などに応じて、各家庭が買うべき量を決めている。決められた量を毎度必ず買わされる。義務だ。何て楽な商売か！

かくして、国庫には毎年定額の安定収入ができるという訳さ」

「税のみならず、そんなことでも稼ぐか。いろいろ考えるもんだ。」

「例えば、酷いもんだな。さまざまに搾取するが、公共サービスも福祉もないからな。ただ、国家という呈が社会を安定させ、民衆のまとまりを何となく形成し、治安を守っている丈だ。守ってやるからと言って、徴収するヤクザの見ケベ（みかじめ）料と大差ない。」

「しかも、いざ、戦争となれば、民衆は多大な犠牲を強いられる」

マコトヤは言う、

「まあ、ともかくも、計算どおりさ。これで国も我らが統治下になる。近々アカデミアに正式な統治許可をもらおう」

「勝つ前提だな」

「当然だ、正義は小生らにある」

「そういう手があるなら、奴らの罪状を訴えて、戦わずして統治許可をもらった方が平和的だ」

「罪状の証明に時間がかかり過ぎる。

実効支配していた方が話も早い」

エステ（東大陸）はノルテ（北大陸）ほど広大ではない。

大華嚴龍國（龍深劉禪Ⅱリヨンリャンリユーゼン）の首都、大元汎都（ダイゲンハント）は華やかな国際都市であった。

北極圏にある神聖シルヴィエ帝国の首都ヒムロと対照的だ。シルヴィエには外国人というものがほぼおらず、外交官すらいない。

リヨンリャンリユーゼンの皇帝であるファンロン・チャンジングル（黄龍麒麟）の諮問機関『聖剣研究会』の顧問を務めるラフタヲ（老道）師は、皇帝の勅命を畏み拝受するも、時間稼ぎのような言い訳をした。

ラフタヲは、勅使として来た旧知の友人、コツウエン（忽焉）師へ言う、

「叡智を人は思考の成果と思う。果たしてそうだろうか。

思考とは華の咲くようなものである。花は生ある者を惹き寄せる。雄蕊の花粉は蜂や蝶の体に着いて、他の花の雌蕊に附着し、種を育む。

動物が雌雄に分かれて交尾するのと同じだ。

雌と雄とが分かれるのは、ウイルスに対抗し、遺伝子を混ぜ合わせて、さまざまな組み合わせを作るためである。

もし、皆同じ遺伝子の組み合わせであれば、型の合ってしまったウイルスが出現した時、一気に全滅してしまうであろう。それを避けるために、雌雄は分かれた。かつて単純な生命体は雌雄が分かれていなかったが、生き残るために生命の原理が智慧を絞って工夫したのである。

雌雄を分けること、それは大いなる発明であった。

しかし、どうやって思いついたのか。誰が思いついたのか。自然にそうなったと考えられるだろうか。もし、そうなら、『自然にそうなる』と言う時の『自然』とは大いなる叡智だ。

考えてもみたまえ、君が零の状態から思考を出発させた場合、そんな工夫をなかなか思いつけるものではない。

いったい、華は考えたのであろうか。漠然と存在していた丈で何万年何十万年と歳月をかければ自然に、そんなふうに形態や方法を選り分けて行くものなのであろうか。

自然の、生命への意志、それは偶然だろうか。もし、偶然ならば、偶然は叡智だ。

さよう、私はそれを叡智と呼ぶ。人の叡智も同じようなものだ。そもそも、言語とは何だ、諸概念とは何だ、どうやってそれを選んだのか。

しかも、雌雄を分けて、さまざまな遺伝子の組み合わせのパターンを作るのみならず、蜂に花粉を付着させて、他の花へ運ばせるなどという方法も工夫されている。これもまた零の状態から考えて、思いつけるかどうかすら、覚束ないのに、何もなくて、自然に存在していた丈で構築されるのか。

そうかもしれない。わたしはそれを叡智と呼ぶ」

「それでは」

「勅命は畏み畏み拝受いたすも、実りの時機は人の浅知恵ではどうにもなりませぬ。時節を少々お待ちくださいとお伝えいただきたい。

これ臣ラヲヲの怠慢に非ず。天然自然の理なるを、叡明なる陛下ならば、必ずやご理解いただけるものと、臣、ここに固く信じております」

その応えを運んで来たコツウエンに、細い口髭を垂らし、顎の先にまばらな鬚を尖らせる皇帝ファンロン（黄龍）は苦い顔をし、

「わかっておる。それを知る尊師なればこそ、摩訶不思議の願いを依頼するのだから。

しかし、使う方にも時節があるのだ。急がれよと伝えよ。

そして、ラヲヲ師に、もう一度、繰り返せ。

ガルダの本質を徴にせよ。火の鳥のアイデアを象れ。究竟究極の陽の陽たる炎の佳よ、火禽よ、火焰の孔雀よ、朱雀のロゴスを解析し、聖句となせ、と。

鳳凰を鳳凰ならしめる『法（ダンマ達磨）』をつかみ取り、その意味本質を具象とせよ、と」

承知しましたと言うしかなく、コツウエンは再び友の許を訪れた。

ラヲヲは嘆いて言う、

「あゝ、何たる情けないことか。

皇帝陛下はイータに騙されていることにお気づきにならない。

彼の企みに気づいておられない」

「そう言うな、友よ。」

そんな言葉がもし皇帝の龍耳に入ろうものなら、たちまち、九族までもが殺されようぞ」

ラヲタヲは深く嘆息し、

「そして、皇帝の依頼を断つても、同じ憂き目に遭うであろうな」

「それ以上だ。君の家族ばかりではない、友も知人、近隣者までも九族虐殺の罰を受けようぞ」

「是非もない」

ラヲタヲは筆を執った。

「しかし、それにしても、お日にちを。」

少なくとも、三十日ばかりはいただきたい、とお伝え願いたい」

コツウエンはうなずく。

「承知した」

その夜、ラヲタヲは一人、部屋に入った。いにしへの奥義書の積まれた部屋だ。香炉から煙が幽かに昇る。

太極図を書く。咒を唱える。藥草を噛む。印契を結ぶ。坐して瞑想に沈む。

太極図の中央に、鳳凰を観想した。ありありと、想い泛べる。鳳凰は秘宝をつかんでいた。秘宝の奥の奥の燠火を透視する。火を永劫に錬成する。濃縮され、煎じ詰められ、朱雀の妙薬ができる。妙薬を墨に溶かす。墨は真紅になり、真紅の墨で火の鳥の文字を書く。火の鳥の文字を組み合わせて、ガルーダ（迦楼羅）の曼陀羅を作る。

完成の日、眼に見えぬ不可思議な輝きの気が大きく図面からせり上がって大空に拡散し、世界に散らばった。各地でさまざまな感応が起こる。異変が起こっていた。

諦めのまなざしでそれを観取しながら、ラヲタヲは制作を始めてから二十日が過ぎていることに気がつく。

「キヨアキを呼べ」

弟子を呼ぶ。

「コツウエン殿に告げるのじゃ。完成したとな」

エリイカは布団を跳ね除けて、飛び起きた。

「あ、熱い」

全身が熱い。特に左の二の腕が熱かった。あの家紋のところだ。

「え」

見れば家紋は灼熱の光で輝いていた。

第十三章 ワイロー王国

長年の懷疑主義によって、すっかり老獪な表情となった厭世家、虚無主義の王シヴィリアン・コンテロールは、

「伝説の聖剣を有しておるとな、あの山賊どもが」

その双眼を爛爛と怪しく燃え立たせた。

「懷疑の極北に住む余が唯一望むものがあるとすれば、龍のごとき肯んじ。その聖剣より他にない。聖剣こそ、この世の土石流に卒差せる唯一のものだ。

いかな黄金の価値よりも、いかな権力の価値よりも、いかな聖なる価値よりも、いかな珍味の価値よりも、いかな美麗の服飾の価値よりも、いかな巧みな芸術建築の価値よりも、いかな傾国絶世の美女の価値よりも勝る。人の希いのすべてがある。

直ちに戦争の準備だ。大義はある」

翌日、王は宣戦布告、将軍の任命書、及び出陣命令書にサインし、勅使を出し、伝達を済ますと、翌々日には任命及び命令の授与式を行った。

玉座より王は祭壇に向かって誓約書を読み上げる。

「適法で民衆のための塩の安定供給を計った塩の専売を破壊し、王の臣下なるゴリラテ男爵を弑殺し、領土を篡奪した者、龍肯の聖剣を妄りに奪い、私有した者、王の天授の権利を軽んじ、国の安泰を脅かす者、龍肯岩と自称する岩を営む者どもを、神の御名の下に殲滅することを誓う」

その五日後、一万五千の兵士から成る軍が動いた。正式な宣戦布告の前日から、俄かに動き始め、わずか一週間後であった。軍部では各部門、皆、徹夜であった。

長い列が森を抜け、沢を登り、高地へと向かう。

慎重で実務的な王は同時に、東の大都市イミリヤに援軍要請を行った。

その大聖堂には大司教兼東方将軍及びクラウド連邦兵部之卿（軍事大臣）のイースが坐

している。わずか十五歳の少女であるが、二年前に、ジン・メタルハートを斃して一躍名を挙げた。

援軍要請を受けたイース兵部之卿は嘆息する。

「今はアカデミア内で争う時ではない。そもそも、シヴィリアンは以前から問題のある王であった。王に相応しくない人物だ。一応の仁義は切るが、対応によつては、潰す。

大いなる災いの前に、身内の小さな災いを除去すべきだ。僕はそう考える。異存異論はあるまい。

さて、ところで、龍肯城砦とやらの主宰者は、誰だ」

「詳細不明ですが、マコトヤ殿が主要な人物の一人であるとのことでございます」

「何、眞神山の、極北の玄武（四神相応で北の山に住む守護神）、なぜ」

「親書を出しますか」

「そうしよう。鳥を出だせ。ハヤブサだ。シヴィリアンとマコトヤに親書を出す」

龍隼が用意された。その名のとおり龍神と隼の間にできた生き物だ。一時間で千里を行く。二十時間でIE（イデア・アース）を一周（八万百七十七、七六四八km）する。

マコトヤは親書を受け取り、しばらく考えていたが、龍隼からペンとインク壺と紙までも受け取ると、

「気が利くな。小生に紙も筆もないことをお見通しか。生きた思想を文字にしたりはしないのだ、という訳ではないが。

さて、しばし、お待ちあれ。兵部之卿への返信をしたためるから」

さらさらとペンを走らせると、龍隼に持たせる。返信の内容はこうであった、

『当方には、和平の用意があるが、国王シヴィリアンは不正（塩の専売、及び聖剣の篡奪）を暴かれるのを恐れて応じないだろう。

こちらは正攻法で勝つ用意もある。むしろ、貴殿は我らの援軍となり、アカデミア本来の正義を取り戻せ』

マコトヤの予想に違わず、王シヴィリアンはイミリヤのイースからの親書を受け取ると、すぐに読んだが、

「ふふ。余はこれを見ていない。なぜならば、人は見たいものしか観ず、見たくないものを観ないからだ。五蘊は皆空だ。だから、これは存在しない。実体がない。この手紙の枚

数は零だ。

しかしながら、人は見たくないものばかりを、繰り返し想起する。不安だからだ。未来の自分の運命が気になるからだ。納得できるものへ変ずるのを希つてのことやもしれぬ。これが氣遣いだ。存在者を存在者たら令める、存在という作用のことだ、存在の源だ。拒否しながらも、それゆえに想起してしまうや、哀れ。ほほ。

見たいものしか観ぬとは、畢竟、見たくないものを想起せざるを得ぬ哀れに等しい。さても、もはや、イースのことを想起するはやめようぞ。行動あるのみ。余は自らの軍を直截指揮する。砦の山賊どもを一氣に征伐しようぞ」

シヴィリアンの動きは、すぐにイースの知るところとなり、彼女は容赦なく言った。

「イラフ（尹良鳧）を差し向けよ。彼女をマコトヤの助けとし、シヴィリアンを滅ぼせ」東大陸に近い島嶼国家コレイのコライ（コレイ人の意）で、東洋の神技武術を極めたジムイ（神彝、聖蘭士）であり、リヨンリャンリューゼン（龍梁劉禪Ⅱ大華嚴龍國）の特殊部隊『非』の傭兵部門に属した屈強の戦士であった。

かくして翌日、チェックインのため、旅館のカウンターに着いた途端に、イースからの手紙を受け取ったイラフは、

「すまない、宿の予約は取り消した。急いで行かなければならなくなった」

龍馬を駈って、山野を一氣に奔走した。

国王の進軍に砦の中が騒然としていた時、イユはイリユーシュがいらないことに気がついた。

「きつと、麒麟たわ」

そう思った。今朝、手に入れた麒麟に夢中だったからだ。厩に行ってみると、案の定。

「イリユーシュ、また！ どこへ行く気？ まさか」

「いや、散歩さ」

「じゃ、わたしもいく！」

「だめだ」

「何で？ 危険だから？ 何で散歩は危険なの？」

イリユーシュは口をへの字にしていたが、

「仕方ねえな、じゃ、言うよ。シヴィリアンのところで虚心坦懐、直談判するのさ」

「何を！」

「和平だ」

「バカじゃない」

「聖剣がある。いや、ともかくも、できるさ」

「何で？」

「イヴァントの絶壁もそう言っただけだぜ」

「わたしも一緒にね」

じつとにらむ、イリユーシュ、そして、笑い。

「わかったよ。後悔すると思うし、間違った判断だし、絶対、イユを危険に晒したくないけど、いいよ、来い」

疾風のごとく駆け、前衛を突き抜けた。

「いたぜ」

ワイロー王国軍の本隊を構成する、三つの師団の前にいきなり現れ、

「俺がイリユーシュだ、こいつはイユだ」

と大音声し、堂々と軍団の真ん中を歩く。気分は江戸無血開城の山岡鉄舟であった。誰もが気を吞まれて微動だにできない。

最初、シヴィリアンは信じなかった。罠だと思う。

歩兵や騎兵の囲む真ん中に、イリユーシュは立ち、

「ほら、これが目的だろ。受け取ってみな」

そう言っただけ、剣を差し出す。

誰も手を出さない。アガメムノンの逸話が知れ渡っていた。

「バカじゃねえか、おまえら。触れもできないものを奪って、どうするつもりなんだ。使えやしないだろうが」

そして、進み、

「そら、そら、そら、そら！」

近くの将校に近づいて差し出す。

「ひええ」

将校は恐れおののいて、退いた。

「これを奪いに来たんだろ？」

そら、取れよ」

将校は転げ、後ろの兵の陰に逃げる。

「バカ者め。」

受け取れもせず、何するつもりだったか。

おう、王様よ、王権神授のあんたなら受け取れるだろ、取ってみろ。できないのか。おら、これを取りに来たんだろ、おい」

王は使者を通じて言う、

「おまえを雇おう、高い地位に就ける、聖剣取扱役となれ。一生豊かに暮らせるよう保証しよう。我が臣下となれ」

「冗談じゃねえ、しかも、こんなに近くににいるのに、直に話もしねえ。

なめんなよ、このクズ」

雪を踏んで、ずかずかと、王の騎馬の前へと向かって、まっしぐら。近衛の騎士が立ちふさがるも、騎士ら聖剣に臆し、結局じわじわ退くのみ。何しに出て来たのか。王は憤り、

「バカ者、貴殿らは近衛の兵ぞ、臆するな、退くな。命を賭して王を護れ」

しかし、その言葉虚しく空気を震わせる丈。

さもありなん、兵が退くのは触れることが怖いからのみに非ず。剣の持つ、人間を根源から畏怖させる、神威に因ってであった。

神を前にした時の人間の畏怖、無際限な、巨大無辺の宇宙を眼の前にした時の畏怖にも似ている。

「弓隊、射よ」

その勇気のある者はいなかった……のはずであった。

びゅっ！

「うぐっ」

思わず肩を押さえて跪く。左肩に一本の矢が刺さっていた。

「イリユーシュ！」

思わず叫んで走り寄るイユ、危険も顧みず。

誰もが（射よと命じた将校すらも）安然としていたが、誰よりも射た本人が驚愕していた。

「う、うわああああ」

頭を抱え込んで、その場で崩れ斃れる。射たのは彼の意図ではない。何かの機らきが彼を操ったのであった。

イリユーシュは必死で顔を上げ、

「イユ、来るな！」

「だって！ 矢が！」

「うるせえ、来んたって、言ってるんだろ！」

「嫌っ！」

しかし、駈けていたイユは言葉と違い、立ち止った。瞑る。印契を結んだ。

「いふわしゃありいぷとうらあ」

イハ・シャーリプトラ、シャーリプトラとはシャーリーの息子という意味で、般若心経で観自在菩薩が「舍利子」と呼び掛ける部分に相当する。

すなわち、言葉としての意味はそれ丈で、真理も哲学も摩訶不思議の観想もない。しかし、それはそれゆえに真咒であり、神咒であった。

龍肯の聖なる剣が鈍く燃え光る。それは今までとは違い、強烈な光輝ではなかった。だが、深い存在であり、有機的に甚深微妙、生き生きとし、神妙義、繊細精緻、リアルであった。

真実性、実存性、現実性という深み。しつとりと、生々しく、鮮やか。

深く落ち着いたリアルだった、陰翳のリアルであった。

陰の力、月の力、水の力、龍の力、胎蔵界の力である。

イユの胎蔵界と聖剣の金剛界が太極を構成し、龍肯の機らきをなす時、今までは金剛界的な力を発したが、今回は胎蔵界的な力を見せたのである。

ワイローの兵どもは喚く。

「え？」

「おおおーっ」

「ああああああ」

「何だ、これは」

「いったい、どういうことだ！」

「バ、バカな！」

兵士たちの鎧が次々錆びて朽ち、ばらばらと崩れ落ちていく。落ちながらも、粉になって散って逝く。

剣も兜も槍も楯も同じだった。

さらに砂のように崩れ、風に散った。

旗も糸の繊維と化し、それすらも崩れ、粉と散る。

シヴィリアン王は恐怖に顔を引き攣らせ、

「こ、これは、ムジョーだ!」

それはアカデミアの学長ユリイカの究竟究極の真実奥義で、諸行無常の原理をつかんで、そのスピードを四、五十億倍以上に早める。百年が一秒もかからずに経過し、物質などが砂塵となって崩壊していく。

「これがムジョーなの?」

イユも驚嘆していた。

イリユーシユも驚く。

「今のは、これまでとは違っていた。聖剣のアイデア、聖剣の本質である金剛界の力ではない。陰、水、龍、月、胎蔵界の力だ。むろん、龍背は全肯定、二律背反する両義（全義）であり、太極だから、龍背の力を帯びる時に、聖剣が陰の力を発してもおかしくない、とも言えなくもないのかもしれないが」

一万五千の兵士は丸腰になってしまった。

「うわあああああああ」

誰かが叫んだ。恐怖の叫びだ。もう止められない。雪崩れるように潰走が始まった。

「待て、とどまれ、態勢を崩すな」

しかし、将校の声も虚しい。神の怒りを眼の当たりにした民のように、その恐怖は、もはや留まるところを知らないのだ。人は誰でも生きたい。生きていたいと切望している。その本能は細胞の一つ一つから発するのであって、人の意識など大海の上の木の葉のようなものである。その一万メートル下の海流など思いも及ばないし、変えようもないし、大波瀾のなすがままに翻弄されるしかないのである。

その生存への意志に駆られた兵士たちの怒濤の流れをさかのぼ 溯るかのよう、海を割って渉る聖人のように、こちらに向かって歩く小柄な、と言うよりは、華奢な者がいた。

華奢ではあったが、その堂々たる威風を畏れ、兵士たちはパニック状態にありながらも、自ずから左右に割れたのである。

小柄な剣士であった。顎のあたりで内側に丸まった青い髪、ペパーミントグリーンの双眸、チュニツクに鎧を着た十四歳の少女、イラフである。

王は蒼褪めた。それも当然であろう、イースとならぶ最強剣士なのである。

「イラフ殿、なぜ、貴殿が、ここに」

ペパーミントグリーンの双眸が強い光を放った。

「イース様の命だ。貴様を成敗する」

「何だと！ 余は王だ、神授の王権を持つ王だ！」

「愚かな、人の価値は行為で決す。すなわち、行為によって、常に変遷する。先天的で不動なる権威などない。さような戯言、既に生きる資格なし」

いやあああーつという奇声とともに、一飛びで数十mの距離を縮め、斬首す。

その空を裂く声に、ピンで刺し止められた蝶や蜻蛉のように、兵士や将校たちの潰走が止まった。

馬の背の上の王の死骸を跨いで立つイラフを一万五千人皆が見上げる。

声は鐘のように響いた。

「シヴィリアン王を廃す。当面は、わたし、イラフが統治する。暫定統治だ」

彼女が率いて来た傭兵隊を振り返り、そのうちの一人、瘡せていて暗鬱な表情の、背の高い、黒髪が浪打って靡く兵に眼を留め、

「リ्यूジュ（龍丸）、シヴィリアンの兵隊どもから武器を剥がし、この二人の砦まで連行してくれ。頼んだぞ」

「ああ、わかった」

さっさと行動に出る。

そして、イリ्यूシュとイユとにまた向き直り、

「愛想はないが、卓越した男だ。何でも確実にやり遂げる。信用できる奴だ。

さて、すまないが、マコトヤに会いたい」

第十四章 都市計画

初めて砦を見た時のイラフはその奇観に感嘆した。まだまだ完成ではないが、構想は見て取れた。巨大なT字型である。

T字の頭部、横棒に当たる部分は、聖イヴァント山の嶺だ。稜線に沿って、石を積み始めている。あたかも、龍の背にかぶさるように横に広がる頂上の砦。

中腹には、神象の聖堂を中心とする、円形をなす、最初の砦。

この二つを結ぼうと、上下の双方から延長工事がなされている。軌道が敷かれ、石壁が

それに沿って建てられ、防護壁となる。

また、峻険なる溪谷へも、砦を延ばそうとしていて、船で物資を輸入しようという計画であった。

物資の運搬のため、既にケーブルカー又は溪谷から頂上までできていて、巨牛が数十頭、大きな歯車を回し、巻き上げていた。歯車は数十か所、ポイントごとに設置されている。

「歯のついた軌道を護る壁がそのまま砦か。奇抜なことを考えたね」

イラフの言葉に、マコトヤは笑いもせず、

「天才の発想さ。で、小生らに協力する気はあるのか」

「事情はわかった。龍背の聖なる剣か。これは重要な問題だ。東の壁に、これがあるということは。」

シルヴィエは敢えて東の壁から攻めて来るといふ説がある。陰陽五行十二支に照らし、神霊の託宣やら、伝承された預言などによれば、難攻不落、人が越えられないどころか、ジェット戦闘機も超えられないこの東の壁を越えて来るといふ。

ともかくも、イミリヤには手紙を送った」

マコトヤはうなずく。

「イス殿ならば、必ず最良の選択をするであろう。

ところで、国の名前は変えないのか」

「それは考えていた。シヴィリアン・コンテロールの一族の名であるワイロー家の名を冠した国名など、見るも汚らしいよ。

マガダはどうか」

「いいね。そいつは最高だ。イユやイリユーシュも反対しないだろう」

実際、二人は大いに喜んだ。

イラフは真面目な顔で言った。

「この国の統治は君らに任せよう。しかし、マコトヤは長くはいられないよ」

「なぜ？」

「彼は四神のうちに一人だからさ。北を護る玄武だ。真神山に住み、永遠の真理で武器も道具もなく、アカデミアを護っている。

四神が相応すれば、アカデミアは永遠に栄光に包まれるだろう」

「真神山の！ 世界最高の真理の究竟者ってこと？」

「知らなかった。そりゃあ、引き留められないな。くそつ、寂しいぜ」

そう言つて黙つたが、しばらくして、イリユーシユは訊いた。

「他の四神は」

「東はね、まあ、君らだろうね。イユの真理と龍肯の聖剣だ。東は青龍が護るものだからな」

「うつ、そんな大変なことになるのか」

「仕方ない。運命は選べない。」

貧乏な家に生まれた者は好き好んでそこに生まれたのではない。しかし、その運命を背負わないという選択肢はない。理不尽であっても、背負う以外がない。そこに丈しか現実はない」

「まあな。そのぐらいはガキの頃から承知してるよ。」

で、南と西は」

「今はいない。」

だが、西の白虎については、小生に心当たりはある。今はスール（南大陸）にいるイレツ・イノ（~~ズ~~裂鬚之）だ。事実上、彼は世界最強だ」

「イスよりも強いってことか」

「今、世界で二番はジン・メタルハートだ。奴は生まれ変わるたびに強くなる。あつと言う間に進化して、次々と新しい型を生むウイルスみたいな存在だ。生命体を、常に滅亡へと追いやろうとする。生命の永遠の敵だ」

「三番目がイスか」

「いや、スールの超大国マールロの臂力皇帝、ラハン（羅范）だろう。奴は腕力丈で超大国の皇帝になった。尋常じゃない圧倒的な強さだ。マッハ2で飛ぶ戦闘機を投石器で墜としたという伝説じみた逸話もある。動体視力も並みじゃない」

「げっ、イスやイラフは三番か」

「戦いは正義が滾る方が勝つ。燃える正義の怒りだ。イスやイラフがジンを斃せたのは、それに尽きる」

「で、イレツとやらは、アカデミアに来るのか」

「彼がスールにいる理由はラハンだ。強い敵を求めている。闘うチャンスを狙っているのさ。一対一でね。」

自分より強い奴と闘うのが男つてもんさ。弱い奴と闘う野郎なんざ、ママがいないと何もしかないマザコンの坊やさね」

「無理だろ。いくら臂力って言ったって、相手は曲りなりにも皇帝だろ。そうそう会えるものか。ましてや、タイマンなんて。狂気の沙汰だ」

「彼もおまえに丈は言われたくないだろうな。」

彼は来るさ」

「何でだ」

「龍背の聖剣があるから。最強との戦いを求めている」

イリユーシユはほかあんとしたが、

「迷惑な話だ。」

で、南、朱雀は」

「まったく心当たりがない。ま、どうにかなるだろ」

「四神相応したら、永遠の栄光、って言ったな。具体的にはどうなるんだ」

「現実になる」

「は？」

「現実さ」

「今でも、現実だぜ」

「そうさ」

「何も変わらないってことか」

「全肯定だからな。それは言葉にする必要もないものさ。平常道よ」

「え？」

「茶飯事が究竟ってことだ」

「あゝ、来たか。何だか、そんなこと、言いそうな気がしていたよ」

「ふ。なぜ、ユリイカがアカデミアの学長になったかわかるかな」

「知るか」

「ただのお転婆娘だからだ」

「なるほど。腹減ったんで、飯食わないか」

「いいとも」

ミカエロは熱心に作図する。一心不乱でった。まるで何かに憑りつかれているようだ。実際、憑りつかれていた。

それはマコトヤの友人で、ユリアスという高貴な庶子が古王国コプトエジャから来た日からである。

世界最古の王国であるコプトエジャの王家の庶子であった彼は世界で最も古く深く精密な叡智を閲覧することができる立場と、身分的に気楽で自由であることを利用し、世界を自在に涉って、さまざまな知識人と交流し、眼に見えぬ影響を世界に与えていた。

ミカエロも影響を受けた一人と言えよう。世界の真なる奥に潜む燦のような智慧を彼は知った。大いに目覚める。そして、一瞬の時も置かず、仕事に着手した。

時に、城砦の建設が国家事業へと変わった時期である。

拍車が掛かり、すべてが予想よりも早く進む。彼の壮大な構想は急に具体的な現実として眼前に実在した。

工事が急ピッチで進められる。

ミカエロ自身が直截的に各所に立ち会うことができないので、精密な工事図面を作り、これを以て遺憾なく、彼の意図が実現されるよう、腐心した。

旧ワイロー国は仕事の少ない国で、ほぼ自給自足、現金収入のない人々は急斜面の難工事に喜んで参加した。飲んで参加したと言っても、決して安易ではない。急斜面での一切の作業は困難を極めた。

それでも参加希望者が減らないのは、聖剣への崇拜が影響している。言わば、信仰であった。

具体的に進めるうちに、ミカエロは最下部の峡谷の河岸部分を広げる必要を感じ、「今すぐという訳ではないが、いずれ商業の発展を見越し、丁字型の下部にも一を足して、Iの字の上と下の横の直線が長い、漢字の『工』が縦長になったようなかたちになるであろう」

そう独りごちた。彼はこれを奇跡と感じる。

なぜならば、聖なる言語では究竟の真義を『ゐい』と言うからである。つまり、Iの文字は『い』に通ずるからであった。

ちなみに、『ゐ』は龍を表し、『い』は言語によって睿らかにされる意味を持たたため、一般に『ゐい』という時は『龍肯』を表す。

「奥義書に遵い、俺は作成する。そのうちに意味がわかるさ。コプトエジャの石工の聖書『イーシスの預言書』を俺は昔から信じている。

シュリーマンがイーリアスを信じたようにな。

ユリアスと会って、俺の信念が真実であることを悟った」
ミカエロはそう言った。

エリイカは湯治のたびに、左の二の腕の家紋が赤く彪やかに、明晰に、美しくなっていることを感じていた。光を放つようになっていく。

また同時に、繰り返し同じ夢を見るようになっていた。飛翔する夢である。炎のようになって、彼女は天を駆けた。鮮やかに、艶やかに、麗々しく。

翼があるので、飛翔は不思議ではない。しかし、それは飛ぶというよりも、迸るよう、燃える弾丸のよう、彗星のようであった。

「あゝ、気持ちいい」

全身の細胞が甦る。

しかも、エクスタシスを感じた。魂が抜けて昇華するような快感、脱臼、自分を超え、自分から解放され、因果律から解放された、自らに由って、自らが在る、一切が如意である不死の悦び。一切からの解放。

阻むものも、滞らせるものも、縛られることも、抑えられることも、殻もなく、かたちも名もなく、何ものもない、解放奔放。

超弩級の快樂だ。

人の忘れた古代の真兜を唱えた。脳髓の海馬の奥から、それが甦ったのである。

汗をぬぐった。リオンは大型の弩のみならず、大砲も備え始めた。かなり大きなものも備え、

「戦闘機対策さ」

そう言う。

リカオンは眼を丸くした。

「音速で飛ぶジェット戦闘機がこんなもので撃ち落とせるものか。狙っても追いつかない外れるよ」

「予測迎撃の訓練をするのさ。予知能力を高めてな」

それとは別に、イリユーシユは労働者の賃金を可能な限り上げるように指示した。

「俺らは王侯貴族みたいに飾らない。会議も元老院も要らない。よいと思ったことは、どんどんやっていく」

それについても、リカオンが批判的に言った。

「そういうやり方で上手いくのは稀だ。誰もがトップに立つと、眼が眩む。口先丈は『同志よ』と言いながら、自分は皇帝のようにふるまう。大概、そういうふうになってしまうのさ。」

今は聖剣を背景に、圧倒的権力があるから、万事進むが、大概はさまざまなパワーウオーズがあつて、物事は本意を遂げられない。気を抜かれてしまう。折衷の結果、骨抜きにされてしまう。必ず妥協で歪んでしまう。

時には、性急な怒りや嫉妬で矯激な行動を起こす。そういうもんだ。

どこまで続くかわからないけど、今の好調さは国家の青春期丈に、稀に見られる現象に過ぎない」

彼は革命の初期のスターリンのような手腕があつた。揺籃期に必要な、荒っぽい手腕があり、何よりも経験知的な現実派であつた。

イリユーシユは敢えて黙った。己の無知を知っていたせいもある。

「体制を整えよう、普通にな」

マコトヤが言った。

それは経営についてだ。収支の運用についてだ。今までは収入と言えば、狩りの獲物や木の実や塩や木製の工作物であつたが、国家となつて、税収が生じることとなつた。

ミカエロ、リカオン、マコトヤが中心となつて、国家の基礎を検討した。

「税制を大いに改革しよう。」

歳入の計画に当たっては、歳出を研究しなければなるまい。当然、王侯貴族や高官の私腹肥やしはなし、役人たちの予算の分捕り合いもなしだ。実務担当者の眼で歳出を精査しよう。

政治家や法律家は実務・実態を知らない。

立派な色刷りのチラシを大量に刷る必要もない。題目丈が立派で、実効性や実態の伴わない事業は廃止だ。政治家が人気取りのために役人に積み上げさせた予算、そして、それを消化するため丈に無理やり作られたくだらない補助金もなし。

さまざまな人々の思惑を禁ず。純粹な動機のみとせよ。化粧で飾って辻褃を合わせた提案、欲望を隠した施策に対しては、全部廃止と厳罰とで臨む。

平和は経済のためにも大事だ。交通機関を安定させ、治安を維持し、流通を盛んにする。産業を興し、雇用を創る」

城砦は都市化した。

都市化にあたって、大きな建物が増えることが予測され、急斜面にそのまま建てるのは、不便なことが明らかなので、岩盤を削って（所によつては石を積んで）段上をなすように造られていた。段の数は最終的には八千を超えた。すべての建物は、ほぼ繋がっている。

その狭間、麓の峡谷から嶺までをケーブルカーのような鉄道が日々何十便も往復した。初めて乗った時にイユは感嘆する。

「凄いわ、素敵。こんな急斜面を。何て楽で便利なの！ 楽しいわ」

まるでテーマパークのアトラクションのように楽しむ。

商業の最初は市場だった。通貨が流通し、屋台の商人が増える。すぐに店を構え始め、数日で、多種多様な店ができた。街の様相を呈する。

服飾店や料理屋がイユの眼を惹いた。

「凄い、信じられない、このイヴァント山に」

しかし、イリユーシユが贅沢を厭うので、なかなか行けない。

ところが、沙門人狼の館で、キュージーヌという男がコック長となり、大食堂の指揮及び監督を行い、メニューを作り、料理人を采配するようになった。

イユはよくそこへ出かけるようになる。

行ってみて驚いた。新鮮なオマールエビやムール貝、鱈やヒラメなどの魚介類があるのである。

「こんな山奥に新鮮な……どうして？」

「応龍ですよ。翼のある龍です。」

龍馬は一日四千里、龍隼は一時間で千里、応龍は一時間で四千里です。世界一周は八万kmですが、その五分の一を一時間で行けるのです。

北のクロウミー海や南のマル・メディテラーノからでも、一時間とはかかりません」

本来、沙門人狼の館の大食堂は人狼沙門にはタダで食事を提供するが、イユはタダでは食べられない。そういう決まりだった。しかし、周囲からは頑固な職人と呼ばれるキューイ

ジースも、イユを特別に気に入っていて、

「内緒だよ」

そう言っつて、何でも出してくれた。イユも調子に乗って、

「鴨肉のオレンジソース添えをお願い」「白身魚のポワレを」「今日はペスカトーレよ」「去勢鶏の香草焼き」「寒いわね、濃厚なクラムチャウダーがいいわ」

などと言っつのであった。大満足で、コーヒーをゆつくり飲む。窓の外の雪降るを見ながら。

あまりにも激しい変化だ。

カフェ・ド・ランジェもイユのお気に入りであった。マスターはマーロイという男で、丁寧だが、ニヒルなダンディだった。

蝶ネクタイ、白いシルクのシャツ、黒いチョッキが常だが、時折着るクラシカルなツイードがしゃれている。

「カフェ・オレで？」

「うん、ミルク多めでね」

カウンターで本を読んだ。チャンドラーの時もあるし、阿部公房の時もあるし、ドストエフスキーの時もあった。

コーヒーカップを上げしげと眺める。

「素敵な陶磁器ね。とてもきれいな発色。鳥と薔薇とオリーブの葉とイルカの絵も繊細だね。金の細いラインがエレガントね」

マーロイは細い指で煙草の箱から葉を取り出して器用に巻いた。

「オエステ（東大陸）の職人を招いてね、ワイロー王シヴィリアンがこの国に窯を作ったんです。そこで作られたもんですよ。」

人間、一つくらいはよいことをするものです」

イユは溜息する。

「何だか、あまりにも何もかもが変わり過ぎて」

館も増改築された。

イリユーシユは最上階のテラスから急斜面の絶景を見渡す。

そこには大きな湯船も作られていた。お風呂好きにイユのためだ。

又テラスには武芸稽古場もあった。リンレイが鍛錬を怠らない。アヴァはベンチで防寒具に包まって、飽きることなく、西を見つめていた。

わずか二週間に足りない。短期間に、それほど変わった。

イユもイリユーシユもリンレイもアヴァも、相変わらずマガダの傍で寝食したが、聖堂を囲む建築は二重三重四重五重になり、壮麗な館となった。

税の無駄遣いだという思いがイリユーシユにはあったが、マガダのためと言われ、承知している。だが、召使や料理人を連れて来られた時は激しく拒絶した。

「布団は自分で用意し、片づける。飯も自分で作って皿は洗う。俺やイユにとっては、皿がある丈でも充分に贅沢だ」

リカオンは笑いを噛み殺し、わざと渋面を作った。

「食べ物をお布施したい人々がたくさんいます。それは受けてくださいよ」

「俺は沙門じゃない」

「信仰とは、そういうものですよ。人は運命が気紛れで、予測し難いものであることを知っています。」

だからこそ、奇蹟、稀有なもの、人知を超えた力に縋りたいのです」

「批判精神の感覚をマヒさせるためか」

「肉体も魂も本当に苦しんで、逃れようのない人々に対しては、モルヒネも認めなければならぬでしょう」

「ふん」

しなやかな細い腰、六つに割れた腹筋に息を込め、臍下丹田に気を凝らす。

夜明け前の稽古を終えて、部屋に戻ったエリイカは枕の位置が変わっていることに気がついた。

「気のせいかな。最近、自分でもよくわからない、魂が飛ぶような感覚に襲われることがある。何か現実を生きながらも、二重露出のように、二つの世界を同時に生きている。忘我の中にあるような不思議な感覚」

神の前でトランス状態になるのに似ている。彼女はそう思っていた。

「なぜだろう、山籠もりの時に、山の自然の神と一体になる訓練をしたが、体に染みついて、慢性的に神懸かりの状態になるようになってしまったのか」

家に継がれた祭祀が彼女の感覚に脈々と生きていて、深山幽谷で行われた山籠もりの修行の際にも、山の何かに感応し、自ずとトランス状態になることがあった。それがここに来てさらに深くなったか………半神懸かり状態のままか……

だから、枕が動いたように見えるのもそのせいかな。
いや。

意志の強い彼女は否定した。そんなはずはない、これは現実だ、あきらかに物的に動かされている、と。

「シヨルロック・エルメを呼べ」

探偵を呼んだ。事情を説明し、使用人の履歴を調べさせた。一時間もかからず、シヨルロックは報告した。

「偽装の紹介状を持って来た者がいます。リュパンと名乗っていますが、偽名ですね。ファイロ男爵の紹介状を持って来ましたが、これも偽物です」

「なぜ、わかる」

「一年前、ファイロ男爵はシヴィリアン王の下へ王命を拝受するために赴いたところ、何者かに襲われました。その時、所持していた印鑑を奪われているのです。

紹介状に押された印は、この日付では押せないはずです」

「知らなかったな」

「男爵の名誉のため、このことは秘密でした」

「なぜ、知っている」

「その捜査を依頼されましたから」

「なるほど。聴いてみれば、何でもないことだ」

「そのとおり。種を明かしてしまえば、つまらないことなのです。シャーロック・ホームズがワトソン博士によく言っていましたね、種を明かすべきじゃないと。

矮小な自尊心の話ですが」

「いや、失礼した。気がつくかどうかの差が大きいのだ。

そのリュパンとやらは、今、どこで働いている？」

「鍛冶職人スミス（栖巳酢）のところですが、今日は非番です。大部屋住まいですが、いれば、そこで押さえられます。出かけるとしても、高が知れています。この急勾配の雪しか

ない山中ですから」

「なるほどな。いつ刃物を研いでも怪しまれない職だ。考えたな。組織的な感じがしてきた。さまざまな手がこの中に紛れている可能性があるということだ」

「さしてセキュリティは高くないですからね、まだ今のところは」

「そうだな。構築中だ。マコトやを考えている。彼も大変だ。考えることだらけだ。ともかく、大部屋に行ってみよう」

だが、行くと一人の男が寝ていた丈で、

「リュパン？ 奴なら荷物を以てどこかへ出かけましたが。何であんなに一切合財持って出たのやら……」

「しまった。勘づかれたか。誰か情報提供者がいるのかもしれない」

「可能性はありますね。それも調査しておきましょう。人相はわかってます。」

野獣のような眼と、艶の濃い黒髪、こけた頬、鞣革のような皮膚、こんな感じです」

「捜索隊を組んでもらおう。あたしに対する恨みのようだが、組織的な暗躍が見られるので、イユやイリューシユも絡んでもらう方がよい」

イリューシユは鍛冶屋スミスのところで鎧をあつらえていた。エリイカが来る。

「やあ、エリイカ、傷は癒えたようだな。まさか出立で、お別れの挨拶じゃあるまいね。寂しいぜ」

「イリューシユ、本来なら出立だが、しばらく延期だ。どうも不穏な動きがある」

「何だと」

エリイカは手短に説明する。

「由々しきことだ。」

ところで、そいつがイカヅチ・マカの可能性は？」

「マカ？ 何だと？ 考えてもみなかったな。あたしが追う仇が飛んで火にいる夏の虫みたいに、あたしの下に来たってことか？」

「やられる前に、やってしまおうという考えかもしれない。先手必勝というからな。それ丈じゃない。」

おまえのようなストレートで単純明快な性格の者にはわからないだろうが、奴のような歪んだ性格の人間は、おまえの姉に逆恨みをしていたように、おまえに逆恨みを抱いている可能性もある。

気をつけろ」

そう言いながら、外套をつかんでいた。

「そして、俺たちは全力で捜査する。おまえは身の安全を計れ。おまえの方が強くても、狡い奴の計略は侮れない」

「おまえに単純明快とか言われたくないが、まあ、わかった。

と言いたいところだが、恨みはこっちの方が強い。あたしも奴を探す。見つけて殺す」
その時だ、リカオンが飛び込んでくる。

「大変だ」

「来たか、イカヅチ・マカか」

「何を言ってるんで？ そんなことじゃありません」

「では、何だ」

「大変です」

「だから、何だ。結論から言え」

リカオンは喉を動かす。

「どえらいことです。

アカデミアの学長ユリイカ様が応龍に乗ってやって来られました！」

「何だって！」

山の斜面に沿って登るような、細長い砦の中でも、神象の聖堂がある地域丈は円形の広場を持っていた。ちょうど、T字の縦の棒の真中に、小さな円があるような感じだ。

翼ある龍はそこに降りた。

ユリイカは十五歳の小さなギャルふうの女の子である。どこにでもいるような、普通の。だが、双眸の光丈は皓々とし、強かった。

何千人もが囲む中、つかつかと歩み寄って、

「あなたがエリイカね」

前に止まって、そう言った。

「そうだよ、あたしがエリイカ」

「あなたも今回の大きなキーワードのうちの一つね」

「え？ どういうこと」

それには応えず、一同を見回し、

「あなた方を正式に認めます。イヴァント山脈系を統治してください。

イラフ」

「はい、ここに」

「ありがとう。あなたの暫定統治は終わりだわ。彼らに任せる。お疲れさま」

「あはは、未だ来たばかりだし、何もしてません」

「それが何よりよ。」

さあ、イユ、東の青龍として、アカデミアを護ってください。イリユーシユ、ワイロー王国の後をあなたたちが統治することを祝福します。

いやさか
弥栄あれ、スヴァーハー」

マコトヤが進み出る。

「つまり、奴らが来るってことだね、ユリイカ」

燦然たる笑みで応えた、

「そうよ。」

シルヴィエの艦隊が流水を砕いてクロウミー海を覆い、スパルタクスの軍隊がクラウド・レオンドラゴ連邦の軍と剣を交えるわ」

最後にアヴァを見遣る。

「ここに生まれ落ちたのね。観自在菩薩」

アヴァは眼を伏せたが、

「ええ、あなたがこんなになるなんてね」

初めて口を利いた。イユもイリユーシユも驚く。

「何だって!」

「知り合い?」

ユリイカは笑った。

「彼女は何千億年も前から生きていて、しかも、観ること自在なのよ。何もかもを観ているわ。そうじゃなきゃ、色即是空なんて言う資格はない」

イリユーシユが肩を竦めた。

「なるほどね。そりゃ、そうだ」

第十五章 予兆 モルグ暗殺

暗鬱な黒い皇帝は言った。

「死が喉を壓す。

余は間もなく、死するであろう。シルヴィエの策略によって」

側近のブルトウスは困惑の表情を泛べた。モルグはその顔をじっと見続ける。まるで嘘がないか探るかのよう。

やがて、ブルトウスは逮捕された。皇帝の前に引きずり出され、釈明する。

「陛下、私は無実です」

シザエルが来た。

「証拠があります」

シルヴィエとの取引の手紙を証拠として出す。

「見せてみよ」

モルグはそれを一瞥すると、シザエルを逮捕、ブルトウスを釈放した。

護送されるシザエルをアウグストが刺殺し、出奔、神聖シルヴィエ帝国イータの下へ。

「よくぞ来た」

そう言つて、イータはアウグストを処刑する。

「ふ、裏切る者は再び裏切るであろう、今から処分しておけば後に憂いが減る」

その知らせを聞いて、「裏切りの裏切りか、辣韭の皮のようだ」とスパルタクス皇帝モルグはつぶやく。

その晩のことであった。

モルグが就寝前の酒杯を渡された時、それが毒の杯であることに気がつく。

「これをそちが飲め」

側近の薬師ヤルムークは慌てた。

「いや、皇帝陛下、それは」

その時、事が露見していることを察した警護と、警護を見張る見張り、それを見張る見張り、それを見張る見張り、それぞれに二名ずつで、計八名いる。彼らがモルグを襲つて惨殺した。

黒き皇帝は斃れる。

イータ皇帝は自らを囲繞し、自らを莊嚴する、聖の聖なるコレクションの過剰の上にも過剰なる、繁文縟礼を眺めた。

秘儀のために配置された、天然宇宙の理に適った美しき配置。コプトエジヤの学者たちが描くヒエログリフ、忘れ去られた砂漠の魔法陣、天文の精密なる科学、いにしへの数学、聖なる真兇による精緻細密なる大曼荼羅、聖杯や聖骸布、神秘なるルーン文字、法輪、經文、叡智の石、ウジヤトの眼、天空の金剛石、蜥蜴の皮、十干十二支、六爻八卦、神官の祈祷、聖仙の詠唱。

そして、リヨンリャンリューゼン（龍梁劉禪Ⅱ大華嚴龍國）のラフタヲが作った迦楼羅の太極図。

世界の最高の叡智のすべてがここにあった。

「すべてが黄金に変わるであろう。聖者イヰの真義が全うされる」

皇帝は膝真突き額突く（叩頭く）。幻のように、少年のような少女のような若々しい神が現れ、言う、

「私を顕現させよ。その時、真義が世界に聖なる悦びを謳うであろう。

見よ、私こそは究竟の真義」

細くすらりと伸びた四肢は初々しく、未だ熟さず、青く、とても華奢で、それでいて柔らかな生命に満ち、繊細であった。

イータはさらに平伏した。

「御心のままに」

未だ顕現しない幻の神は言う、

「完成は近い、疾く行え、良き知らせを、速やかに我が耳に」

「この世で最も崇高なる使命、必ずや果たします」

沈黙。神は去っていた。

去った後、皇帝は水盤を覗く。

大理石の盤は水面にシルヴィエ軍を映す。大航空母艦。ジェット戦闘機。聖イヴァント山の銀嶺。龍の背。そして、異様なランドマークとも言える龍肯の砦。それらが映し出される。

「これでよい。後は、その瞬間を待つ丈だ」

弩と大砲で、ジェット戦闘機を墜とす訓練。動体視力と予測能力を鍛える。リヨンが指揮した。

必然的に彼は龍の背のように連なる嶺の砦に布陣することとなる。ジェット戦闘機が奇跡を起こして嶺を超えた場合は最前線であった。

そこにはミカエロもつく。彼独自の希望で、

「すべてを俯瞰できる高い位置で、我が建築の崩壊を見たい」

というものであった。建設にあたつての最大の功労者の奇妙な願望は速やかに叶えられる。反対する者は誰もいなかった。

かくして布陣は、上の砦にこの二人の指揮官を配し、イユ、イリユーシュ、エリイカ、リンレイ、アガメムノン、マハールーシャ、リカオンなどは皆、龍背の城砦の中央にあたる、神象の聖堂がある砦を囲んで陣を構えることとなった。

マコトヤとユリアスは最下部、峡谷に作った港に研究室を構えた。

アカデミアの兵部卿、イミリヤを統治する司教にして大將軍のイースが兵糧と五千人の兵士を送り込んできた。

さらには、アカデミアのユリイカの取次で、クラウド・レオンドラゴ連邦と連携することとなる。

連邦の代表であるアンカと統合大臣であるエリコが兵糧と大砲二百門、二万の兵士を送ってきた。

人口は一気に倍増したが、ミカエロが十万人都市として造っていたため、余裕で収容が可能であった。

イリユーシュがしみじみイユに言う。

「何だか途方もないところまで来ちまったな。二人つきりだった頃が懐かしいぜ」

彼に他意はなかったが、イユは頬を染めた。イリユーシュは複雑な思いで、何かをかなぐり捨てるように、ぐいっと顔を背けて眼を伏せた。

でも、いつかは訊いてみなくては。確かめなくてはならない。

第十六章 西のべ裂 スパルタクス陸軍とシルヴィエ海軍

ぐい飲みを傾け、喉を動かし、居酒屋でグイッと酒を呷る男。

砂漠の国に似合わぬ、よれよれ皺皺の紺緋に袴の幕末脱藩浪士のような蓬髪。

腰に下げたるは鞘もなく、剥き出しの木刀。

「神木から削った神剣さ」

と嘯くが、路傍で拾った棒切れでしかない。

「さて、逝くか」

「おや、お早いですね、どちらへ、イレツの旦那」

イレツ（~~ズ~~裂）と呼ばれた男はにやりと笑い、

「ノーマシー（絶非空）宮殿だ。ラハン（羅范）皇帝とタイマンを張る。何度、果たし状を出しても返事がねえから、こっちから赴いてやるのさ」

「あはっは、ご冗談を」

冗談ではなかった。

窓の少ない、厳めしい巨大城砦、ノーマシー（絶非空）宮殿は宮殿という豪華絢爛な名にまったく相応しくない。

城門は開いていて、役人や武人や商人など、人の出入りがあるが、衛兵が厳重に警戒していた。

「待て、その奴、どこへ行く」

「ラハンとタイマンだ」

「何だと、狂ってるのか」

木刀の一振りで起こった旋風に、数十の衛兵が倒れる。皆昏倒していた。

傲然と進む。次々門を通過し、庭を横切り、建物の入り口に向かった。その鬼神の凄まじさに何千もの兵も塵に等しい。

宮殿の前まで来ると、正面入口へ上がる階段の上に、まさに膂力皇帝が立っていた。数千の兵士が階段の上下、周囲に整然と武装し、殺気立って構えている。

ラハンが切齒扼腕していた。彼はかつて独りで敵の弓も砲撃も躲し、巨大な鉄門を素手で破り、城内で大暴れし、王宮まで昇って、家臣らの前で王を惨殺した男である。そのラハンが今は逆に攻められる立場となっている。

イレツの挑戦を断り続けていた。一対一の果し合いなど、端武者の闘いは皇帝の沽券にかかわるし、無限の強さと呼ばれるイレツへの畏怖とも言える懸念があった。

見よ、イレツはただの木刀を下げてやって来る。

「無礼者め」

ラハンの一喝は天地に轟いたが、イレツは微動だにしなかった。

「うるせえなあ、耳が痛くなるぜ」

「貴様あ」

「いいのか、逝くぜ」

飛ぶ。一撃、ラハンは抵抗の暇もなく、斃れる。あまりのことに誰も声が出ない。そして、一秒後に大騒ぎとなった。イレツを囲むも、襲い掛かれない。

「おい、命を無駄にするな」

その時である。マコトヤからの佳^とが来た。暢気に手紙を開く。

『アカデミアの真義に資せよ。 追伸 聖剣甦る マコトヤ・アマヤス』と書いてあ

った。

「仕方ねえなあ、逝くか」

あ然とするマローの兵たちを後に、ひらりと舞い降りて来た応龍に跨って去る。

ラハンは普段は嫌っていた医師団の努力によって、辛うじて一命を取り留めた。

シルヴィエの航空母艦。最大級はサンクト・イキ。聳える艦橋と広大な離発着の甲板、その威容は動く岩島であった。ジェット戦闘機搭載五百七十機。排水量七十万トン超。全長二km。流水を越えてクロウミー海に姿を現す。聖イヴァント山を目指す。戦闘機が次々と離陸する。

スパルタクス陸軍はゴルガストでクラウド軍と激突。撃破し、峻険なる峡谷を遡航する。その動きはクラウド連邦との共同で構築した斥候部隊が把握していた。彼らは応龍に乗り、空から俯瞰して確認する。しかし、時にシルヴィエのジェット戦闘機に撃墜された。知らせを聞いた時に、イリユーシュは死を覚悟した。

次第に思い詰めるようになり、まるで削るように鎧を磨く。明日はシルヴィエ空軍が襲撃するかもしれない。イユが来た。今、言わなければ永遠に言う日がないかもしれない。

「夜食作ったわ」

イリユーシュは悲しいまなざし。そっぽを向く。

「どうしたの。わたしのこと」

そう言いかけてやめる。闘いの前の日に、そんなことですねて心配させては。だが。

「イユ、おまえに言わなければならないことがある」

「え」

期待に満ちたイユのまなざし、はにかむような怯えるような。イリユーシユにはそれが悲しかった。

「おまえの兄が死んだのは、ジャミング・ストリートか」

イユは面食らったようであった。イリユーシユは悲しい期待を込める、そうでないことを祈り。

「そうよ、何で今更。ていうか、なぜ、知っているの？ 新聞には出たけど」
眉間を深めた。

「あゝ、そうか、やはり、そうか。そうでないことを希って祈ったが」

そう言つて、手で顔を覆った。

「どうということ、何なの、どうしたの」

予感に駆られ、イユは必死に食い下がるように訊いた。微かに兆し始めた疑惑の狭霧が間違いであつて欲しい、と。

「明晰判明だ。おまえの兄を殺したのは俺だ」

「まさか。何を、そんな冗談はやめて、怒るわよ、不謹慎な……」

「冗談なはずがない、こんなことを」

「嘘よ、信じられない、絶対嘘！ 信じられない、何で」

「俺は追われていた。待ち伏せしていたギャングに囲まれた。相手は五人いた。二人を斃し、もう一人からナイフを奪い、刺そうとした時、たまたま通り掛ったおまえの兄が正義感の強い性格だったのだろう、普通なら近づかぬと思うが、「やめろ」と言つて俺を後ろから羽交い絞めにし、制止しようとした。

俺はギャングの一味と思い、刺し殺した。他の奴らは逃げた」

理解できないことを徐々に理解しつつも、イユはあまりのことに唯、あ然として口を開いている。ものを言うことができなかった。音が途絶え、すべてが止まって見える。

「すまない、イユ。俺を殺せ」

その一言で、時の止まる烈しい衝撃から、自「」をどうにか取り戻し、イユは震え出した。あふれる涙とともに、どうしてよいのか、怒り、裏切られたような想い、哀しみ、いずれの感情も、今の彼女のそれではないような、それらすべてが混ざって、どうにも名状できないような、そんな感情であつた。存在を根底から崩壊させる喪失。

激しい逆上が熾った。

「兄を殺した、あの優しい兄さんを、あゝ、あなたを見損なつたわ、いいえ、そうじゃない、わたしを裏切った、わたし、あなたを、あなたを」

怒り、憎しみ、悲しみ、衝撃、混乱、牽き裂かれる魂であつた。

イユは部屋を飛び出した。嶺の砦に移った。イリユーシュは死を決意する。

「究竟まで燃え燦めき、その命の炸裂を天に捧げ、イユの兄への鎮魂とする」

イータは祈祷する。シルヴィエ聖教の真呪を唱える。

聖なる教祖イオの象徴、原理なる真言、日常の聖句、偉大なる聖典、神聖帝国経緯の法典、神聖なる紋、聖具、聖図、祭壇、炎壇。

迦楼羅の曼陀羅究竟の太極図。

「人は祈ることしか為せず……あゝ、……祈ることしか為せず、……すべては不可知な、いやいや、非知にもならず、ならずと言うとても、ならずともならずと、かくても言えれば、とてもかくても」

シルヴィエに於いて神聖皇帝は最高位の宗教者、法皇でもある。

迦楼羅太極図は燃えるように赫く。

ヒムロを裂くような怪鳥音。光の塊が飛び出し、空で広がった。

巨大な迦楼羅天が飛翔している。左右の翼は各々百km以上、アカデミアを目指して飛ぶ。彗星が天空を走るかのようにであつた。

峻厳な峡谷をクラウド・レオンドラゴの軍とたたかいながら、いくつかの辛勝を経て遂にスパルタコス軍はアカデミア天領の境を越え、侵入、雪深い峽に分け入りし頃、目前に立つ一人の男を見た。

蓬髪を靡かせ、紺紺によれた袴姿の若者だ。

「おう、待ってたぜ。アカデミアへの手土産に、てめえらを壊滅させてやらあ」

「何だと?」

「正気か」

「構うな、進め」

しかし、男は木刀を振るつた。

「しかも、木刀？ 相手にするな、狂人だ」

だが、弓や大剣や、移動式大砲を備えた軍は死者こそ出さなかったもの、手足を折る怪我で、当面は再起の見込みのない状態にまでぶちのめされた。

ロンヴァルは雪上に倒れ、呻いた。

「こんな、バカな、貴様は、いったい」

男は涙を噉って言った。

「イレツ・イノだ。覚えておけ」

そう言って、去る。

韋駄天のごとく、聖都アカデミアの聖ウパニシャッド大聖堂で、イレツはユリイカと会見した。

「イレツさん、ありがとう」

「おう、来てやったぜ、ユリイカ。ところで」

「わかってるわ、聖剣は聖イヴァント山よ」

イレツはまたも去る。

第十七章 龍と迦楼羅 エリイカの変容 レコンキ伯爵の陰謀 究竟曼荼羅太極図四神相応

何かが近づいて来る。

龍背の城砦では、誰もがそう感じていた。

「何だろう、この不安感」

「シルヴィエの戦闘機が近づいている可能性は高い」

「いや、この生存の根底から上がってくるような畏怖は、シルヴィエ空軍だの、スパルタクス陸軍などということじゃないような気がする」

風が起こった。

「珍しいな、イヴァント山のこちら側（西側）で風が起こるなんて」

「珍しいどころか、俺は初めてだぜ」

「西側は暴風だらけだな」

突如、世界が黄昏のように翳った。気温が上がったように感じる。風はさらに強く、立

ってられない。雪が噴き上げられ、舞い上がった。

「おい、何だ」

「見ろよ、何となく空が暗くなってるかい」

「ああ、山がせり上がって頭上を覆うから西の空は見えないけど、何だか西の光が途絶えているようにみえるぜ」

鳴り響くような、凄まじく大きな音。ゆっくりと鷹揚だが、途方もない大きさを感じさせた。

「何だこれは」

「まるで」

「鳥か」

「ばかな、山が揺れそうな風圧だぜ」

「うわ、堪んねえ、あちこち雪崩だぜ、地震みたいだ」

風圧で山脈が揺れるようであった。砦は実際、ぐらぐらする。雪崩は山全体に広がった。凄い轟音だ。

雪の怒涛の中、砦丈が激流の中の巖のように堪えていた。頂上から続く細い構造のせいで圧を受けずに済んでいるのだ。

「いや、だが、そうだぜ。こりゃ、翼だ」

「あゝ、まるで空全体が翼になって、羽搏いているみたいだ」
ミカエロは歯噛みする。

「見ろよ、遂に越えやがったぜ」

「え、あのライトは」

「ジェット戦闘機だ」

「なぜだ、戦闘機は越えられないはずだぜ」

急降下し、爆撃が始まった。マシンガン、ミサイル発射、爆弾投下。

「やばいぜ」

「砲撃準備だ」

しかし、風と爆撃の衝撃で揺れ、狙いが定まらない。

「ちくしょう、ダメだ」

「何だか、熱くないか」

「激しく戦っているせいさ」

「それよりも、応龍を出せ、麒麟もだ。天馬も」

たちまち数十騎が飛翔し、迎え撃とうとするも、音速に追いつけない。上空に行くと激しい熱風を感じた。

「この熱、何なんだ。うわつ、風の凄さ。飛び続けられない」

「それにしても、ジェット戦闘機が」

「百機はいるぜ」

「百機どころじゃねえ、数千機はいるぜ」

「ダメだ、戦わずして戻るのは無念だが、已むを得まい」

その頃、砦では大変なことが起こっていた。

恐怖の叫びが空気を裂く。

「ジンだ、ジン・メタルハートだ」

その叫びを聞いて、一番近くにいたエリイカが真紅の三叉戟『海神』を持って、飛び出して来た。

確かに妖魔のような巨魁な怪物が立っている。妖剣リャーマ・ネーグロが黒く燃えている。

「おのれ、懲りもせずまた来たか、ジン」

「ふ、イユとイリユーシュがともにいなければ、おまえらなどクズ同然だ」

だが、エリイカは既に尋常ではなかった。何かに憑かれている。神懸っていた。炎の翼を以て神速で飛躍し、移動し、動き廻って、三叉戟の威力も数百倍に上がっている。神のように強かった。

「うぬぬ、うぐっ」

信じられないものを見るように瞠目する。さすがのジンもてこずった。そこへアガメムノンやマハールシャが来たのである。リンレイやリカオンも。

イミリヤから派遣されたジヴィーノという野蛮な兵も、アガメムノンやマハールシャに劣らぬ超弩級の巨漢で、二の腕の太さは馬の胴ほどもあった。

「うぬ、貴様、ジヴィーノ」

「そうともさ、ジン、覚悟せい」

優勢かと思いきや、突如、エリイカがトランス状態に陥る。

「あゝ、熱い、明るい、眩しい」

エクスタシスだ。いかなる時よりも、強く烈しいものが来つつあった。

「あゝ来る」

何かを予感していた。

「どうした、大丈夫か、しっかりしろ」

「何とかしなくっちゃ」

イユが言うも、リンレイは、

「今は何もできません。砦の中に連れて行って上げて、寝かせるんです」

この好機をジンが逃すはずもない。大暴れで、巨漢たちを薙ぎ斃す。

「うわあっ」

「うぐ、こりゃあ、堪らん」

怯む彼らを見て、

「うら、うらあ、うらあああっ」

さらに駈られるかのよう、血に飢えて叫ぶジン・メタルハート、暴風も彼女には何の関係もないようだ。

「猶予はない、選択肢は一つ、一刻も早く勝つしかない」

リカオンが言った。蒼褪めていたリンレイはイユを振り返り、

「イユ、イリユーシュはどこ？ なぜ、一緒ではないの？ 聖剣に真兇を」

「ダメ、できないわ」

アヴァが黙ったまま、イユを見つめる。ミカエロが問う、

「なぜ」

「だめなの」

それを聞いて、ジンは気味悪く笑む。

「イユとイリユーシュが離れている時を狙えと言われたが、まさにそのチャンスが来ているようだ。陛下の智慧は神懸っている」

その陛下とは、イータのことであった。

その頃、イリユーシュは嶺の砦にいて、ミカエロの作った大弩を撃つ。大砲も撃つ。訓練の成果が出ていた。ジェット戦闘機が墜落する。だが、数千もある戦闘機の爆撃が止むことはなかった。砦のあちこちで爆発が起こり、石積みが爆ぜる。大弩も大砲も次々破壊された。

「ダメだ、無理だぜ、勝てやしない」

一瞬、風が数倍に強くなって、真っ暗になった。

「わ、わわわ、と、飛ばされる」

「この皆ごと飛びそうだぜ」

「しっかりしがみつけ」

「しがみつくのが精一杯だ、何もできない、呼吸さえ」

「あ、熱い、焼けそうだ」

「おい、あれは、うわあつ、うぶつ、うぶつ、おい、いったい、何だ、あれは」

「うわ、な、何だよ、ど、どうしたんだよ」

「え？」

漆黒の天はすぐに変じた。

天のすべてが真つ赤な炎を滾らせる。なおかつ物凄い暴風で、大岩でも宙を舞いそうだった。熱で雪が溶け始める。蒸発した。巨岩の皆さえ熱を帯びる。戦闘機はいつの間にか見えなくなっていた。聖都アカデミアへ向かったのである。

「なぜだ」

「うわあ、熱い、こりゃ地獄だ」

「おい、あれは」

辛うじて、空を見上げて叫ぶ。

「わかった」

「これはガルダ（迦楼羅）だ、龍神の天敵だ」

「龍神の力を殺いでいたんだ」

「だから、戦闘機がイヴァントの嶺を越せたのか」

「考えたな」

「暢気に言っている場合か」

「イリユーシユ、イユのところへ行け。龍肯の力が必要だ」

「いいんだ、このまま闘う」

「不可能だ」

「いや、負けない。絶対に負けない。負けてたまるもんか、麒麟よ」
イリユーシユは麒麟に跨って飛ぶ。

「彼丈に逝かせるな、続け」

応龍や麒麟に乗る者が次々と飛び立つ。

「最後は体当たりで滅ぼせ」

兵どもは口々に叫ぶ。

「イリユースと死ぬぜ」

「おお、死ぬぜ、死んでやらあ、大したことじゃねえや」

「逝くぜ、うらああ」

「やったるわあ」

激烈な風、灼熱に射られる。炎で前も見えなかった。息ができない、焼け焦げそうだが、麒麟の手綱も、燃えて切れそうだった。

「自分を超えろ、こなくそ、聖剣、聖剣よ、俺の軀も魂魄も剣とせよ、剣となって、突っ込め、斬り裂きばらせ、奴を斃せっ」

だが、隕石のような炎の塊が雨霰と襲い、

「うわっ、ちくしょー」

炎の弾に撃たれ、墜落するイリユースと麒麟。イカルスのように、燃え墜ちて。

イユにはそれが見えた。

「あ、イリユース、あゝ！」

激しい絶望が襲ったが、もはやそれを感じる暇すらない。

だが、まさにその時は、ジンがアガムノン、マハールシャ、ジヴィーノ、そして、アカデミアの巨魁な三騎士ソントグ、バロイ、カノンを薙ぎ斃し、イユに迫ろうと体勢を変えた瞬間であった。

「死んじゃダメ、お願い！」

イユは自分が既に走っていることに気がつく。

まったくの偶然であったが、間一髪で、ジンの攻撃を躲す結果となった。

「おのれっ」

悪鬼羅刹の表情。

イユは気づいてすらおらず、夢中で叫ぶ、

「龍馬を出して」

「どちらへ」

「決まってるわ、嶺よ」

「危険です」

「でも、行くわ。逝くのよ。誰も止められない、止めた人は魂ごと未来永劫に全世界から消え果てるわよ」

猛烈な勢いでイユに向かって走る、猪突のごとくに。

リヨンが慌てて弩を射て、リカオンとミカエロが投げ槍を擲つも、虚し。ほんの一刹那、動きを止めさせた丈。

だが、俊敏なるリンレイ、そのわずかの隙にイユを運ぶ。

「うぬああ、待てええい」

ジンは既に動けぬイリユーシユを顧みず、リヤーマ・ネーグロを頭上に振り被つて、瞋りに任せ、悪鬼のごとし、燃え滾る眼で、ずいずい迫り迫る。イユ目掛けて振り下ろさんとす。

「うらあ、喰らえええええええ！」

砦の組石が砕け飛ぶ。間一髪で転げ遁れるリンレイ。

「イユ、今だ。唱えて」

言われるまでもなく、それしか考えていなかった。

『イリュージョン！』

見つけていた、甦りの咒。禁じられた真咒であつた。

「でも、たとえ滅びようとも、止められない」

心で咒を唱えた。ジンが眼を剥く。

「そうはさせるか」

甦る前に殺さんとし、イリユーシユが倒れる場所へと身を翻した。

わずかの差、ジンの足下で、イリユーシュが息を吹き返す。イユは惧れもなく、リンレイの手を振り解き、飛び込んでイリユーシュの顔を抱いた。滂沱の涙あふれる頬を彼の頬へと擦り合わせる。

「イリュージョン、愛してるわ、イリュージョン」

彼の瞼が半ば開く。唇が動く。

「イユ・イヒルメ（彛俞・彛日雲）」

朦朧たる意識で、しかし、はつきりそう言った。

「なぜ、それを」

しかし、イユは覚った。彼の魂は今、本質に達しているのだと、イデアの世界にいるのだと。

あまりの命知らずに、呆気にとられていたジンも、

「うぬあ、舐めおって」

大剣を振り被ったが、五つの巨漢が同時に猛猪な体当たり、ジンもさすがに体勢を崩す。アガメムノン、マハールシャ、バロイ、カノン、ソントグが遅ればせながらも、急斜面を龍に跨って駆け上がって来たのであった。

「うぬああああ」

憤りが火焰のごとく全身を貫くも、冷厳な百戦錬磨の戦士としての計算が脳裏を廻る。この崩れた体勢をいかに直し、いかに攻めるか、聖剣がどのようにこちらに向かって来るか、それをどう処するか、戦士の本能的な、半ば無意識の計算であったが、瞬時の遅れ。この虚を逃さず、ミカエロが叫ぼうとする、

『イユ、真兇を聖剣に』

と。

しかし、光よりも速くミカエロの思考は、

『いや、待って』

一億分の一秒の逡巡であった。

『金剛界系の力は迦楼羅にも力を与える。少なくとも相乗的に影響するはずだ。……いや、しかし』

眼球がくるくる廻り、光の千倍の速さで考えが疾駆する。その結果、

「イユ、真兇を聖剣に」

最初の思いのとおりに叫んだ。

「イユ、真兇を」

もう一人、同時に言うものがあった。

アヴァだ。アヴァが来ていた。信じ難い光景に誰もが止まる。

いつの間に来ていたものか、誰も連れて来ていないのに。

「のふまくすわまんだばざらだんかあん」

真兇が唱えられた。

アヴァが増幅する。

聖剣が強く烈しく光輝き、人々の眼を眩ませた。

メタルハートが振り下ろす妖剣は、凄絶な轟音とともに、龍首の聖剣に受け止められる。

「ち、しくじったあああ！ 瞬時の躊躇が災いしたか、生涯悔やまれるわ、うぬああ、間に合わなかった！」

「そうだ。おまえの最後だ、ジン・メタルハート」

下から叛上がるよう、縦断ち裂きに逆裂く。真つ二つ。

だが、一難去つてまた一難か、イリユーシュたちの前に立ち塞がる男が。

「よう、ちょうど良いタイミングだったようだな、いざ、勝負だ、聖剣の主」
イレツであった。

「おまえは誰だ」

「イレツ・イノさ」

「スールにいたのでは」

「そうともさ。ラハンの野郎と闘いたくてな。だが、ユリイカに呼ばれた。嫌だったが、この勝負が楽しみで承諾したのさ」

「状況を考えてください」

リンレイがそう言い、イリユーシュも、

「敵か、味方か」

しかし、イレツは微笑し、

「小せえことを言うな」

だが、その言葉は止まった。

山の中腹から巨大な炎の柱が立ったからである。それは力を溜め込めてあふれ返るよう
に飛翔し、彗星のごとくに、山の嶺に衝突した。

イリユーシュたちのいる場所からも遠くはない。

「うわあっ！」

炎で視界が閉ざされる。嶺が大きく揺らぐ。

少し前に遡る。

その頃、日常的な意識状態以外の意識状態の陶酔から、放心的な精神状態にあったエリ
イカが、突如、起き上がった。剣を振り下ろそうとしていたマカは弾き飛ばされて窓から
墜落する。昏倒した。

「あ、あああああ、あ、あああ」

迦楼羅が発する金剛界系の力に激しく感応していた。

髪を振り乱し狂瀾、爛爛と滾る炎、数倍に翼が広がり、九重になる。左右各々に九枚の翼で十八枚であった。

三叉戟の刃は三重になり、九つの刃へと変ず。九は最高の陽数であると知られていた。巫女としてのトランス状態がいつもの数百倍にも激しくなって、彼女を襲う。

「XXXXXXXXYVVHHWWZZZZ」

それは未知なる古代の真呪であった。誰もが忘れた、もはや、神しか憶える者のない真呪。彼女の本質の真奥は神の言葉を預かっていた。そのような意味に於いては、人は書物である。

「IYEVHHIHXZZZ」

炎の性を持つ彼女は迦楼羅の影響を強く受け、放心状態から、深層心理の最奥部、爬虫類や魚類であった時代にまで遡る、激烈な興奮陶酔狂乱に陥り、さなぎが蝶になるように膨やかになっていった。

すなわち、体が内側から明るくなり、光が膨れ上がり、全身から炎の柱が立ち上った。

大陸間弾道ミサイルのように、聖イヴァント山の嶺に照射される。

その崇高で偉大な光景、炎の柱と炎の彗星は、砦のどこからでも見えた。

「これは、いったい、どうしたことか」

ユリアスが驚くも、

「エリイカだ。彼女は炎の巫女だ。その血が究竟の陽神迦楼羅天に感応したんだ、まさかレコンキは、これを」

マコトヤがそう気がつくも、

「と言っても、結果は同じだ」

ユリアスも理解し、

「なるほど」

胎児が母胎の中で進化の過程を繰り返すように、エリイカは変化する。

すなわちそれはよく知られるように、人が単細胞から始まって、魚類、両生類、爬虫類、哺乳類、最後に人間となっていく過程に似ていた。カンブリア紀以来5億年の生命の歴史

を、かたちの変化を以て人は母胎内で再現するが、それと似ていた。

黒から始まり、白い無空となり、碧い静寂となり、赤い熱となり、黄色い叡智となった。叡智は廻り、炎へと変じ、水が生じ、龍神となり、渦巻き状に回転し、熱を帯びて禽神へ変ず。

エリイカは炸裂し、一度は迦楼羅天となる。叢焰に包まれ、心神を喪失し、解脱し、真っ赤な孔雀に、いや、朱雀となった。その壮大な出来事も、誰からも見えていた。

マコトやは微笑む。

「これで南の守りも完成だ。玄武白虎朱雀青龍がそろった。これで龍肯の義は、宇宙開闢以来、史上空前絶後に膨れ上がる。弥が上にも究竟となる。

されば」

エリイカの炎が聖イヴァント山の嶺に照射され、陰陽が太極を成し、龍肯の力が籠もれ上がる。鳴動し、山が揺れる。

そうでなくとも迦楼羅の暴風と炎に包まれ、混乱状態になった城砦は、大バニックとなったが、ミカエロ丈がしがみつきながらも驚嘆し、感嘆した。

「なるほど、そういうことか」

「どういうことだ」

「龍肯の義が起こり、聖イヴァント山の龍神の陰の力として現出する」

「って、いったい、どういうことになるんだ」

「え」

「おい、見ろよ」

さらに大きな揺れとともに、ゴオオツという地鳴りだ。

「うわ、じ、地震か！ 砦が崩れる」

「あゝ、石積みが」

「う、うわ、うわつ、うわああああ」

嶺がバラバラに動き出し、崩れそうになる。だが、崩れない。

このことを予測していたミカエロが嶺の砦の建設に当たっては、縦横奥の各々が10mの正立方体に岩を削り抜き出し、それを集め、数珠のように、極太の数万条の鎖で何重にも繋ぎ、構築していた。

「おお、こ、これは。城砦に、こんな仕掛けが」

「地震だど？　だが、山がこんなに動くものか、地震なんてもんじゃない、嶺が生きてうねって、いや、跳ね躍るかのようだ、信じられない」

「まるで、龍神の背のように……」

「おお、つかまっている丈で、精一杯だ、堪らん、こりゃ、比喻じゃない、驚大動地だ、まさに」

「おい、見ろ、おい、おい、こんなことがあり得るのか」

驚くのも無理はない。蛇のような動き、イヴァントの嶺は、龍の背のようであった。城砦はあたかも背鰭にも似ている。龍神の背に、特に頭部から頸部に靡く鬣のようであった。

「動いてる、揺れじゃない、この動きは、意志を持って、複雑に動いている」

「そんなはずが、ばかな、あり得ない、それじゃ、まるで」

「うわっ、何だ、これはっ！　凄いつ」

天を割らんばかりの大咆哮であった。大地にあるものすべてをびりびりと震わせ、今や炎の大穹窿と化した天空に、幾重にも木魂する。

嶺が、熱でも溶けずに残った氷雪を崩し落とし、岩を壊して、山から離れようとした。悲愴なまでに、壮大な光景である。

「あり得ない！　なんと、何ということだっ！」

これもミカエロの準備が功を奏した。

嶺の上の砦と、斜面の砦とが、離れやすいように、敢えて接合せずに造っていたせいである。『イーシスの預言書』は偉大な書物だったのである。

「龍だ、見てみよ、信じられない、龍だ、龍神だ、途方もなく巨大な！」

嶺は龍脈であり、龍神そのものであった。龍神が起き上がる。飛ぶ。龍神の背にある砦を乗せたまま。

龍神はアカデミアへ向かった。数百km先の上空を飛行中のジェット戦闘機を追撃する。巨魁な龍にとっては、数百kmなど、首を廻す丈の距離でしかないのである。

戦闘機が次々と墜落した。龍肯城砦の兵たちも、龍の背の上、城砦の胸壁から、大砲や大弩を迦楼羅に向かって撃つ。

たちまち、迦楼羅が龍神に迫る。太極の陽にして乾（易经で言うところの乾坤の乾。陽の極致）である炎の迦楼羅天が叫びを上げて、龍神を襲った。その火焰は成層圏をも凌駕する。迎え撃つ龍神。

巴となった。超巨大な渦となる。陽の力と陰の力とが相乗的に累乗し、日常茶飯の平常となって、無際限に強烈な龍肯の義が湧き起こる。

突如、龍肯の聖剣が激しく感応し、堪え難いほどの美しさで、燦然と燃え光り輝き、胎動のように明滅するも、それは兆しでしかなかった。

迦楼羅と龍神の中枢で凄まじい光爆が孕みつつある。

狂裂な光爆が裂炸した。ビッグバンのような巨大な光で、一切の宇宙がゴールドアウトする。仏陀は喉の渴きを訴え、水を渴望し、終には斃れ、死す。

光ですら四百億年かかる大宇宙の規模を遙かに超え、その数倍 いや、数千倍 いや、数百倍の百乗、いやいや、数億倍の数億乗、いやいやいや、数千阿僧祇の数千那由他乗の九千九百九十九無量无数乗をも遙かの遙かに超えた。圧倒的な龍肯の義がすべての存在者を襲う。

何も変わらない。人々はこの時、知ることなく、それを知る、平常すらも、最も凄まじく強烈で、最も濃く鮮烈鮮麗で、彪やかな、嘶らかに響らかなる真のリアル、最大最高最狂裂な無際限の自由奔放なのだ。と。あゝ、霓の稲妻、天衣無縫の荒御魂、身も裂き碎き天翔け躍るよ。

大地が謳って鳴動し、大海は波瀾を以て狂操乱舞し、聖句を叫ぶ。天は真咒の雷霆に牽き千切られ、火山は祝砲のように跳ねて大噴火する。

首都ヒムロの水盤に光の柱が立った。

イータはその勢いに押され、部屋の間まで飛ばされる。

摩訶不思議の立体曼荼羅が空間に輝く。

アスラの召喚が成功したのである。

生まれたばかりのような初々しい、柔らかな、儚い、生命にあふれた、滑らかな美しい

肌をした少年、痩せて未熟な、青い林檎のように硬い、繊細な細さの、震えるような少女でもある。

双眸の燦めきの美しさは喻えもない。

青く蒼く碧く、藍や紺や瑠璃の色をモザイクのようにブリリアントカットのように煌めかせ、重層的に深く、紺碧や浅黄やチュニジャン・ブルーやコバルト・ブルーや、地中海の色やインド洋の色やカリブ海の色を湛え、深さの奥行きによるモザイクをも做る。

髪はさらさらと柔らかに靡き、紫磨黄金とも濃い蜜色の黄金とも、白金のような明るい輝かしい金とも、眩い太陽のような黄金色とも、金泥のような鈍き底光りとも言える、捉え難い細密複雑微妙精緻の色彩と輝きとをなす。

第十八章 アスラ誕生と遷都

その美しさに、皇帝イータは恍惚とした。

少女少年神アスラの薔薇窓のような双眸は燦めきの汨濫する湖、ブリリアントカットさされたダイヤモンドのように烈しく眩く、熾に燃え^{さかん}炫^{かがやく}。

イータは気がつくとは平伏していた。

「私はアスラ、ここに君臨する。今から私が皇帝だ」

「ぎ、御意のままに」

朝廷の間に、百官を集める。イータを後ろに控えさせ、玉座に坐る少女のような少年のような子どもを見て、驚き騒ぐ王侯貴族や宗教者や將軍を睥睨し、アスラは、

「ここに遷都を宣言する」

一同の驚愕、騒ぎは最高潮となった。公爵や大臣らの猛烈な反対。

「ばかな、わしは大反対だ、いや、誰もが反対だろう」

「いったい、いずこへ」

その問いに、アスラは平然と、

「むろん、アカデミアだ。他に私が鎮座すべき地があるか」

さらに憤る王侯貴族たち。

「失礼する。こんなところにいられるか。奴は皇帝ではない。我らが神聖帝国では、皇帝は五人の大権機卿の互選に依って選ばれるのだ」

「このままで済ますものか、反旗を翻すであろうぞ」

だが、逆らう者らは、その日のうちに屋敷ごと消えた。一家まるごと失せたのである。ヒムロから逃げ出す者もいた。だが、北極圏の永劫氷原で、見たこともない大きさのワールフ数千匹の大群に襲われ、骨も残らなかった。

又一軍を率いて首都を出た將軍は風速二百mを超えるマイナス百三十七度のブリザードに襲われ、戻ることさえもできずに壊滅する。

皇帝アスラは噓った。

「多くの民族を滅ぼし、多くの国家を蹂躪した者は、自らの魂に刻んだ轍に車輪を取られ、つまずくのだ。因果応報だ。彼れ有るゆえに、此れが有る。縁起の法だ。彼らは自らの癡かさによって、自ら望んで穴に落ちる。穴のある所へ飛び込めば、穴に落ちるに決まっている。希えば叶うということだ」

アスラは令を発する。

「帝国は解体する。神聖シルヴィエ帝国の範囲であった地域の政治を内政外政ともに、私を選んだ者へと、今この瞬間を以て委任する。

信義に基づいて為政をしなければ、背信行為直後に、あの世とこの世の双方から抹消する。心に悪心が生じた場合は、その心臓に小さな警告を与える。改めなければ、死す。

心せよ、私はすべてを知る。どのような説明も不要だ。一切の弁明は聴かない」

彼女（彼）を選んだのは、すべて庶民で、法律家や実務を行う下級官僚、各部門の学者や有能な事業家・起業家、そして、各分野の芸術家であった。

政治家養成学校を創設し、大学と政府機関を連携させた。

アスラは命じた。

「七月二十八日を出発日とする。民衆はここに残れ。すべての皇族と貴族は我に遵え。大臣、長官、將軍、司教も我に遵え。前皇帝であったイータも。

なお、私に遵うべき者の家の破風に、白い矢を射て立てさせる。それを目印とせよ」
発表されたのは七月十九日の正午。

「遅滞した者は滅亡の憂き目に遭うであろう」

ヒムロは新しき為政者に任され、百万人の大移動が始まった。

聖イヴァント山では。

イユもイリユーシユも、他誰もが無事であった。

龍神と迦楼羅による大極光のビッグバンが起こった後は、すべてが平穏無事に戻っていた。

今と変わらず、ただ、現実がある丈である。

あの一刹那以降、龍神も迦楼羅も消失した。皆のほとんどが崩れたが、嘘のように空が晴れ、晴れているのに静かに雪が降り始め、すぐに積もり、真っ白に。自然のつくる景觀丈は、あつと言う間に前に戻ってしまった。人の造った建造物丈が残骸となって、晒されている。

しかし、人々の心は希望にあふれていた。

なぜならば、龍肯の聖剣が完成していたからである。聖剣丈が燦燦と、黄金に輝いていた。金の剣となっていた。その神々しい美を見れば、魂の苦しみを癒され、誰もがエクスタシーを覚える。

マガダの遺骸は破壊されることもなく、微動もせずに、何も変わっていないかった。周囲には崩れた石が転がっていて、瓦礫の中にある永遠のモニュメントのようであった。

数日を経ず、アカデミアより伝書の龍隼が来る。神聖シルヴィエ帝国瓦解の知らせであった。衝撃が走る。

「信じられないわ」

「驚いたぜ」

さすがのリカオンも信じ難いという表情で、

「こんな日が来るとは！ 生きている間に、この世にこんなことが起こるなんて」

「何百年も北大陸で暴威を振るい、専制的に多民族を征服していたのに。諸国を翻弄し、蔑ろにして、蹂躪していたのに」

イユたちは口々に呻いたが、マコトやは、

「アスラを動かそうなどとすれば、こんな事態にもなり兼ねないことは、十分に予測できたはずだ」

「いったい、何が起こったの？」

「皇帝が自ら召喚した者に使役されている。ただそれ丈のことさ。さあ、小生らも出発しよう」

「どこへ」

驚いた表情でマコトやは、

「むろん、アカデミアだ。世紀の戴冠式だし、新たな学長に認定してもらわなければならない」

聖イヴァント山の龍肯城砦の一行は出発した。

「もはや、守備守衛は必要ない。

大陸内の敵は滅した」

マコトヤのその一言で、主要な者たちは、すべて旅立つこととなる。

その行列を見送っている黒い姿があった。イカヅチ・マカだ。

朱雀となってしまったエリイカは、もはや近づきがたく思えたが、彼の粘着な執著は収まらなかった。

「何としても復讐を。何かないか、何か手立てが」

山を下り、川を下る彼らに着かず離れず、どこまでも追跡した。雪はない。春めいた暖かさが、やがては爽やかな初夏となる。

だが、マカの眼には入らなかった。ただ、只管に追い、様子を窺う。旅籠にイユら一行が泊まる時も窺っていたが、とても忍び込める余地はなかった。焦慮する。

スパルタクス皇帝モルグの死後は部下も同僚もなく、彼は完全に個人で動いていた。資金も尽きかけている。

「何か智慧を」

神の啓示を求めて、教会に入った。巡礼者に成りすましていたので、誰が居ても怪しまれる心配はない。聴衆の坐る椅子に坐り、祈った。

巡礼者用の食堂で食事をしている時、近くのテーブルの話が耳を捉えた。アカデミア天領の巡礼者は外国人が多い。誰もが情報交換をしていた。

「悪魔の墓の話聞きましたか」

「ええ。名を口にするのも恐ろしいゾヴィルのことですね」

「アカデミアの破壊を目論見、天領の中で暴れ回っていたという、あの伝説の」

「五千年も前の話です」

「アカデミアの学長イクシュヴァーンが永遠に無明の巖に封印したという」

「何でも、その巖に触れた丈で巖の中に飲み込まれ、生きたまま永遠にその中で、意識も明晰なまま、苦しみ続けなければならないそうで」

「何て恐ろしい」

「永遠に閉ざされた岩の中に固定され、光も音もなく、呼吸しているかどうかもわからない無感覚の中で、意識丈が明晰とか」

「あゝ、もう聞きたくない」

「触れた丈でなんて、恐ろしい」

「柵はあるようですが」

「あゝ、そうだとしたって、恐ろしいですよ、とてもじゃないけど、近づけないですね。絶対に近づきませんよ。いったい、どこにあるんですか」

「古い教会、聖ルーパンヌ教会です」

「あゝ、あれですか。私は聖イヴァント山へ行くので別方向ですが、ここから、街道をアカデミアへと向かえば、近くを通りますね」

マカの頭に計略が湧き上がった。

マコトヤは街道沿いにある聖ガレクト修道院附属図書館が世界でも有名なことを知っていたので、是非、寄りたいと思い、そのようにした。

「少し待ってください。一緒に来たい者はどうぞ」

イユは、

「行くわ。イリユーシュも行こうよ」

「俺はいいや」

「ダメ！ もう離さないわ」

リヨンがヒューと口笛を鳴らす。

古色蒼然とはこのことか。オーク材を中心にした暗く厳めしい内装であった。彫刻や高窓、天球儀。

「おや」

イリユーシュは気がついた。彼らが入ろうとした時、独りの巡礼者が顔を隠すように急いで出て行くのを。

「あれは」

どこかで見たような、いや、見たというよりは、心に描いていた誰かであると感じたのである。マコトヤの顔を見た。

彼は厳しい表情をしていたが、首を振ってそのまま図書館の中へ入る。

マコトヤの後を追って、イリユーシュが言った。

「今まで見たことはないが、俺にはさっきの奴がマカに思えて仕方ない」

マコトヤが振り返った。

「恐らく、そうだろう。何を閲覧したか調べよう」

すぐにわかった。

その書物を広げて、マコトヤが読み上げる。

『……………自らそれに触れる者は陥るであろう。恐るべき荒野へ……………』

イユもイリユーシュも首を捻った。

マコトヤが言う、

「アカデミアの学長イクシュヴァーンが魔王ゾヴィルを無明の巖に封じたという、有名な話だ。

エリイカが見たとおり、奴がモルグと繋がっていたとすれば、奴は今、後ろ楯を失った状態だ。紐の切れた風みみたいな状態だ。

今やエリイカに手出しすることなど、まったく不可能であろう。彼女は今まで以上に強くなっている。

奴はそれでも狂執し、復讐とやらを遂げようとするだろうが」

「どうやって」

「まあ、無明の巖を囲んでいる鉄条の柵の二、三本をやすりで削って折れ易くしておいて、エリイカが巖に触るように、背中でも押す、つもりだろう」

「こどもの悪戯レベルだな」

「最近、そんなもんだ」

シルヴィエ御一行様も旅である。

永久凍土の旅は夏であったも、過酷であった。しかも、季節外れなブリザードもあり、シルヴィエの民を苦難に陥れる。

女、こども、年寄り、病人は自走式の車に乗せられた。数千kmも続く暴風雪は昼も夜も明るさの差でしかなく、一切の風景は見えない。男たちは燃料の節約のために、龍馬に乗って旅をした。ホワイトアウトした道中で、道を見失い、仲間とはぐれ、行方不明になる

者多数である。

しかし、過酷な運命を背負う人々は強靱でもあった。

困難ではあったが、シルヴィエは永久凍土の土地にさえも、いくつもの大都市があり、食糧・燃料・物資などの補給に事欠くことがないからである。

前皇帝イータは数日前から臥せていた。熱に浮かされているようでもあり、譫言のように繰り返し、

「栄光よ、我が勝利……、我が永遠の勝利、我こそはついに到達した。人類が待ち望んだもの、生きとし生けるものの真の望み、いやさ、一切衆生の悲願、朕のみが遂に竟に至りぬ」

彼の命は風前の灯火であった。

イユが立ち寄った旅館の食堂で、噂話を耳にした。

「恐ろしいところだよ」

「誰も近寄らないらしいね」

「実はそうでもない、逆に興味を惹かれる者はいつでもいるものさ」
その巡礼者が立ち去った後、マコトやは肩を竦めた。

「実にわざとらしい」

にやりと笑って、リヨンも同意する。葡萄酒をグイッと飲み、

「餌を撒いておりますな」

イユは眼をぱちくり。

「どういうこと」

ユリアスが優しく言う、

「誰かがお金をつかませて、言わせたのでしょうか」

晴れた街道をさらに一時間も進むと、先頭の斥候隊が飛ばした伝書の鷹が来た。脚に結びつけられた文を広げ、伝言を読むと、

「着きましたが、いかがですか」

今回の旅で、斥候隊長に任じられたリカオンからであった。マコトやは返信をしたため、再び鷹を飛ばした。

「秘かに様子を探れ。そして、小生らを待て」

イユたちが着くと、リカオンが手持ち無沙汰にして待っていた。

「何もありません。怪しげな掃除夫以外は」

マコトヤが苦笑した。

「だろうね。」

後ろ楯を失って、すっかり零落したな。マカにはもう、神秘も不可解も気味の悪さも捉え難さも謎も恐ろしさも、何もかも欠片もない、小賢しい素人芸に堕ちてしまったな」

そう言っただけ教会を見遣る。

聖ルーパーン教会。

それは不気味な様相を湛えていた。何でもない、よく有り勝ちな古い教会なのに、異様な雰囲気漂わせているのである。

尖塔を見上げた。空が青い。濃い青が異様にも見える。

「じゃ、行こうか」

マコトヤが言った。さらに附言し、

「念のため言うが、石に触れるな。触れたら、石に吸い込まれ、ゾヴィルのように永遠に閉じ込められてしまうから」

「承知してるぜ」

イリユーシュが笑いながら言ったが、そういう彼が一番危なっかしい……

ファサードから中に入ると、礼拝所である。誰もいなかった。閑散としていても、聖なる空間である。だが、禍々しい空気がじつとりと漂っていた。魔王を封じた、その石のせいで。

「へー」

イユが入ろうとすると、イリユーシュが止めた。

「俺が先に入る」

イユが唇を尖らせ、

「私がいないと、聖剣の力が発揮できないわ」

「なら、なおさらだ」

薄暗い内部は伽藍とした空間であった。椅子もない。奥の正面に祭壇があった。高窓から差す光がスポットライトのようである。

一方の傍らに、先端の尖った鉄条の柵があり、正立方体の石があった。柵には悪魔が苦悶の末に残したさまざまな呪詛が刻まれていた。

「これは苦悶の叫びだ。人も魔王も、苦しみを晴らすために、憎悪を炸裂させる」
そう言い、さらにマコトやは言葉を続けた。

「呪詛とは、苦悶の叫び。誹謗、屈辱、蹂躪、損なわれた自尊心が果たそうとする復讐、理不尽への憤り、自己の存在を防衛する本能から来る逆上。又は愛する者を喪った怒りと悲しみ、根底的な喪失、存在の不安である」

マコトヤが魔王誕生のエピソードを語った。

それは、昔、昔、で始まる。

或る街に貧しい家があり、少年が両親とともに住んでいた。彼には絵の才能があり、画材もキャンパスも買えないが、石畳の表面に尖った白い石で白線の絵を画いたり、捨てられたチラシや、貼紙の裏や、壁の隅っこに炭の欠片で小さな絵を描いたりしていた。彼は画家になることを夢見ていた。それは遙かな遠い遠い夢ではあったけれども、彼はそれを空想することを楽しんだ。空想で胸はいっぱいになった。いつも夢見ていた。だが、そんな或る日、彼の両親は金に困り、彼を乞食として出すことにした。父は言った。

「このままでは憐れみを誘えない。こんなに元気なのに、乞食なんて怠け者じゃないかと思われてしまう」

自分を柵に上げて、そう言った。まさにそのとおりで、父親が働けば、生活していけなくはないのである。

母親は言った。

「腕を縛って、腕が使えない者のようにしてしましましょう」

少年は従順に従った。肘から下を布できつくぐるぐる巻きに縛った。憐れむ人が小銭をくれた。家に帰っても、解いてはくれなかった。

「手が痛いよ」

「我慢しなさい。手が無事なところを見られたらおしまいだよ」

絵が描けないこともつらかった。そして、少年は気がついた。

「このままでは手がだめになります。どうか助けてください」

「そういうわけにはいくかい」

「絵が描けなくなります」

「そんな遊びのためにやめられるかい。バカ言っな。絵でおまんまは食えないよ」

「お願いします。助けてください、このままでは手がだめになります」

「なら、好都合さ。本物になれる、嘘を吐かなくてすむよ」

手が萎えて使えなくなってしまうた。汚い布は解かれる。少年は動かない手を見て絶望した。何日も泣き続けた。小銭はさらに多く集まって、両親は喜んだ。

絵画への愛は少年の魂に火を点けた。彼は足で描くようになったのである。明るさを取り戻し、小銭は減った。

父は言った。

「手丈では飽きられたらしい。足も縛ろう」

少年は懇願した。

「やめてください、どうか、やめてください」

「ふざけたことを言うな、どうせ絵が描けないからとか言うのだろう、気取りやがった芸術なんざ、クソ腹立たしい丈だわい」

「やめて、止めて、助けて、どうか助けてください、あゝ、神様！」

やがて、足も使えなくなった。

或る画家が壁の落書きを見て、

「これを書いたものに会いたい」と言った。少年の家に来たが、その哀れな姿を見て、首を振り、去ってしまった。

やがて少年ゾヴィルは正気を失ってしまい、扱いに困った両親は食べ物を与えるのをやめる。

「お父さん、お母さん、助けてください……………」

母は迷惑そうな顔をし、父は酒を呷った。

動けない少年は餓死する。十四だった。

イユは滂沱の涙を零した。

「酷過ぎるわ」

イリユーシユも言葉を失った。

「それがゾヴィルか」

「そうだ。死して後に、街に怪異が続いた。やがて、ゾヴィルが怨霊となったことがわかった。時を経て、彼は大魔王となった。彼が最初に殺したのは、彼の両親だった」

そう言うってから、マコトやはしばらく黙っていたが、

二兎追う者は一兎をも得ず。二つに良いことはできない。一つを優遇すれば、片方は損なわれる。悪人を利する者は善人を犠牲に捧げているのだ。それが現実であり、それ以外の現実はない」

真っ黒い石だ。

皆近づく。

「どうぞ周囲を廻って、いろんな角度から、ご覧になってくださいまし」

「そうか、そうしよう。ありがとう」

じつと、それを見ていた掃除夫が、突如、

體勢を亂し、バランスを（何もないのに）崩して、いや崩したふりをし、エリイカに体

ただの掃除夫とは思えぬ絶妙なタイミングで、武道の達人であるはずのエリイカがよろめく。よろめいて、鉄条の柵にぶつかった。猿蓑居の割には図に当たっている。きつと、悪魔に魂を売った成果であろう。エリイカが鉄条にぶつかると、あろうことか、その柵が一部、ガタン！と外れた。

「あああ！」

「何だよ、そんなバカな、クソだろが！」

マカは自分の思いどおりにならなかったことに狂憤し、もうなりもふりも構わず、正体を丸出しにした。

「いい加減しろ、クソバカ石、仕事しろや、やり直しだ、バカ」

ぽかあんとしているエリイカの手をつかんで石に擦りつける。何も起こらない？ いや。

「え？」

マカの手丈が吸い込まれ始めた。

「え、ええ？ 何で、そんな！ ばかな、何で、何で、俺が」

マカが吸い込まれ始める。

「え、そんな、バカな、何で？ あり得ないだろ、何でだよ、あり得ないだろ、え？ え？ 止めろ、ばか、死んじやうだろ、止めろ、あり得ない、バカ、助けて、あり得ない、助けて」

「自ら触れた者は封ぜられる。どうにもならない。エリイカは自分の意志ではなく、おまえに押されて、触れた。自ら触れたのではない」

マコトやはそう言った。エリイカは侮蔑を込めた冷厳なまなざしで、

「人を殺したくせに、自分は死にたくないのか、浅ましい、憎むことすらも、バカバカしい浅ましき。あゝ、見たくもない。復讐など、おまえのような生ごみには、もったいない。バカバカし過ぎた。早く去^いねよ」

「あゝ、あゝ、あそんなバカな、死んじやう、死んじやう、助けて、ばか、助けるよ、あり得ない、まじ死んじやうだろ、ざけんな、あり得ない、ばか、助ける、おい、まじ死んじやうだろが、おい、ざけんなクソバカ、お願い助けて、助けて、助けてください、お願い、死んじやう、まじ死んじやう」

見る見るうちに、吸い込まれていく。永遠に石の中で、何の感受も起こらない、意識丈が明晰で、呼吸しているかどうかともわからず、固められたまま、生きるづけることとなる。

終に完全に吸い込まれた。

マコトヤが肩を竦める。

「やっと終わったか。とつと行こう」

シルヴィエの皇族貴族たちはポルガ河を越え、さらに数千km、初秋の頃、漸く国境に辿り着いた。クラウド・レオンドラゴ連邦の管轄下となっていたヴォゼヘルゴに入る。人数

は十分の一であった。まるで、難民のように草臥れ果てている。

ヴォゼヘルゴのルーク侯爵が出迎えの任を担って、待っていた。

「聖なるアスラ神様のお出ましをお待ちしておりました」

シルヴィエの皇族貴族は吃驚した。出迎えられる意味が解らなかった。捕虜にされるかと、戦々恐々していたのだ。

そう思っているながらも、ただ、アスラが恐ろしくて脱走など思いもよらなかった丈である。やむなくここまでついて来ていたが、いったい、自分らがどうなるのか、毎日嘆き哭いていた。

それが取り敢えず無事とわかって安堵するも、まったく状況が理解できない。不安は消えなかった。

「どうなることか、あゝ、何ということになってしまったことか。世界最強を謳われている我々が」

さて、それはともかく、ルーク侯爵たちの眼を惹いたのは、一台の車である。

霊柩の車であった。乗せられていたのは凍結した亡骸、かつての絶対神聖皇帝イータである。

葬儀は民衆と同じく執り行われ、国境を越えた土地の土に埋められた。永久凍土から離れ、土を掘ることが可能だったからである。ここに埋めよと、アスラが指示したからでもある。一言

「国境外が相応しい」

聖イヴァント山を超えることはできないので、南方ルートを使って迂回する。

過酷な山岳地帯を進み、飛沫を上げる列流の峻険なる峡谷を溯り、聖イデア山を仰ぎ見た。

人工物のような縦長の立方体の山はエンパイアステートビルに喩えられる。八千m級の山頂に聖都があり、その中枢たる聖ウパニシャッド大聖堂の中央尖塔は高さ四千mを超え、雲上に建っていた。垂直の絶壁を削った道を登らなければならない。シルヴィエの疲労困憊した民の誰もが嘆息する。

「さあ、善処へ、善逝せよ、疾く歩め」

仮借なく、神の皇なるアスラは言った。

しかし、艱難辛苦の果てに、ここまでついて来たシルヴィエの大貴族や皇族はあ然とした。

本来、敵対すべきはずであったアカデミアの学長ユリイカがイデア山の麓まで降りて来ていて、満面の笑みで皇帝神アスラを出迎えたからである。

「ようこそ、お待ちしていました。これで、あたしは、めでたく退位ね」

繊細なる美の極限であるアスラも微笑んだ。韜晦者とうかいの含みを持つ魅惑的な微笑で。

「長い間、苦勞であった。私が絶対究竟なる龍肯皇たる天帝皇神として、一切世界を永遠に統治する。」

永劫の真理と、永遠の平和のために」

快活にユリイカは笑った。

「さあ、早速、戴冠式を」

「むろんだ。一刻も無駄にするつもりはない」

荘嚴の極みなるウパニシャッド大聖堂で、アスラの戴冠式が行われた。

アスラの聖都アカデミアに於ける戴冠式こそは、世界最大のイベントであろう。燦然たること空前絶後、一切宇宙（全平行宇宙群）を普く遍く照射した。激烈なる光輝を以て宣言する。

「ここを首都とし、ヒムロを地方都市とする。神聖シルヴィエ帝国を解体し、クラウド・レオンドラゴ連邦に併合して、大アカデミア連邦と国名を改める。聖者イヅの真義はアカデミアの思想と一致し、この合併は世界平和の第一歩である。」

以て、神聖シルヴィエ聖教とアカデミアの究竟真実義を一つとなす。

いずれは世界統一宗教となつて、その名が不要になるであろう」

シルヴィエの枢機卿ウィリアム・ジハイドが問うた。

「神は、神はどうなりますか」

「変わらぬ」

ウィリアムは安堵の表情を泛べる。

「では、シルヴィエ聖教の神に統合される、と」

「いや。すべての神は尊ばれる。もしくは、神は 神 としか呼ばれない」

「何と、多神教に」

アスラは表情を変えた。

「愚かな。その発言、貴様らの言葉で言えば、神を蔑む者とも言えよう」

「この私が！ 何と言うことを！ この胸には信仰しかない」

「ならば、何ゆえ、神を物のごとく数で扱う。存在のごとく数で処する。」

神は万能である。一であり、多である。唯一であり、無際限である。神は一でもなく、多でもない。神は一であり、多ではない。神は一ではなく、多である。そのいずれでもあり、そのいずれでもなく、そのいずれかのうちの一であり、そのいずれかのうちの二である。

神は因果律からも論理からも、一切からも解放され、無辺無際限であり、自らに由りて自らが在るもの。縁らず、縁なく、神は人でもなく、自然法爾でもない。

万象であつて、何者でもない。これは汎神論ではない。特性もかたちもなく、それすらもない。無空ではない。すなわち、特性もかたちもあつて、それ以外の特性を拒む。又は何も拒まない。何もかも拒む。そのいずれでもあつて、いずれでもなく、いずれかである。

神は崇高至聖の極みであつて、至聖を超越し、至高を凌駕する」

ウィリアム・ジハイドはその場で塩の柱となった。

神聖帝国のいかなる高位の宗教者も、歴史ある大貴族も、強大なる大將軍も、過酷な長旅で精も根も尽き、又アスラの圧倒的な、宇宙レベルの神威を怖れ畏み、もはや反する者もいなかった。

「遂に人類の夢は叶った。

真義による世界統一。永遠の平和だ。これから三か月は祭典とする。

まずは人の言葉ではない、真実そのものである私の言葉による真言を詠唱しよう」

その聖の聖なる声は音ではなく、実体そのものとして木霊した。鐘のようにその存在が高らかに響き渡る。

年号は永遠平和元年とされた。

論功行賞とも言ふべきか。叙位叙勲が行われた。

まずアスラは自らを大アカデミア連邦の絶対専制君主たる皇帝にして、アカデミアの学長となった。兼ねて神、及び天帝を統べる神統皇帝となる。万象を民とした。白燦する黄金の冠、これを取り上げて、自らに戴冠する。

「何人も、私の頭上に冠を被せる資格はない」

臣の最上はユリイカで、正一位、大アカデミア連邦の奥佑筆となった。

アスラは註釈する。

「長年の功労を含めて、叙し、又褒授する。ただし、私の文書は文字や言葉ではない。直截の真実を以て『もんじょ』とする」

次はイユとイリユーシユ、マコトヤであった。従一位。イユは真兇神、イリユーシユは真兇神將。二人は青龍の地（聖イヴァント山脈）を居地とすべしとされた。

また、オエステ（東大陸）の守とされ、名義上、東大陸を統べる者となることを許されたが、実際には、オエステは依然として、リヨンリヤンリユーゼン（龍梁劉禪）を主とする諸国の統治のままである。

マコトヤはアカデミアの真義塾最高顧問、兼ねて究竟真義永劫求究神である。玄武の地（真神山）を居とすべしとされた。ノルテの守とされる。

イレツ（北裂）も従一位、最高守護神。エステ（西大陸）の守とされるが、実際には、西大陸は未だヴォード帝国の掌中に在り、名義上丈であった。居は白虎の地とされた。

同じくエリイカ、従一位。迦楼羅大御神。朱雀の地を居とされ、スール（南大陸）の守とされた。南大陸はマールロ帝国皇帝ラハン（羅范）の掌中にあるが。

アスラは宣言する。

「かくして、IE世界の四神相応も完成した。現実の世界を素材とした、神なる大曼荼羅が遂に完成した。

太極は愛の完成でもある。二律背反する陰と陽の機らしきが愛によって惹き合い、結ばれ、十全を為す。

その究竟の大成は、陰が極まって陽となるように、又は陽が極まって陰となるように、神聖至高の極限、真実奥義の究極、未曾有空前絶後の激烈であって、これが極まって、竟には日常茶飯、ただのありふれた、今此処にある、日々の現実となる」

ユリイカが苦笑した。

「それはちよつと大袈裟ね。そうでもないわ」

第十九章 大統治

ニユースは世界を廻った。

国際的な大きな動きが起こる。

シルヴィエが大アカデミア連邦の一部になったことに伴い、北大陸にあるそれ以外の国も、大アカデミア連邦への編入を希望した。

シルヴィエ帝国は北大陸の四分の三（北東部・南東部・北西部）を占めていたが、それ

以外の地域、スパルタクスを始めとするロードやフロレチエなどの西南諸国が生き残りのために、自ら連邦への編入を申し出たのである。

大使節団が編成され、金銀や翡翠やエメラルド、瑠璃や赤いダイヤモンドや象牙や龍涎香、麝香などの高価な物や、珍重される美術、書籍など、さまざまなものが遠路を使節団の乗った応龍や大鷲に運ばれ、皇帝神アスラの御前に奉納された。

さて、他の大陸の超大国の動きはと言えば、スール（南大陸）のマーロ帝国では皇帝ラハン（羅范）が海軍工廠を増設し、大急ぎで海軍の人員を増やす。無敵の騎馬隊を乗せ、超大型砲を搭載する軍艦数千隻が造り上げられた。

オエステ（東大陸）のリヨンリヤンリューゼン（龍梁劉禪、又は大華嚴龍國）帝国の皇帝ファンロンチャンジングルー（黃龍麒麟）は、直ちにアカデミア連邦に使節を派遣し、平和条約の締結について協議することの利を大いに説き、是非、交渉に入りたい旨を申し入れてきた。それは一見、成功するかのようなであったが、帝国内のさまざまな思惑と、由緒ある階級と、古い既得の利権が絡んで、強硬な反対派を抑え切れず、破綻する。

この期に及んでも、私利私欲に走る、愚かな、近視眼的な、生きる価値も意味もない、生ごみ同然の人間がこのIE世界にすらもいるのだ。

アスラは言った。

「季節が来る。仮借ない、過酷な季節だ。恐るべき荒野では、執著のない者しか生き残れない」

贅沢なお世辞でも言ったかのように、豪奢に微笑む。

東大陸のドタバタ騒ぎを聞くまでもなく、そういった民の癡かさを熟知しているエステ（西大陸）のヴォード帝国のユナイ皇帝も又、スールのマーロに倣って、海軍大増強を図った。

同時に空軍の創設ができないものか検討するため、事実上、崩壊したシルヴィエ帝国からの技術の流出を探ったが、結果は虚しいものに終り、神々の皇帝アスラの無限の力を痛感することとなる。

さて、神聖シルヴィエは各王国に分裂したが、連合自治州（この場合、いくつもの王国が結びついて、一つの自治州を構成することを意味する）として再編すると、自治州代表と称し、神聖皇帝復活の嘆願をする者たちが現れた。彼らは大枢機卿らによる互選（コンクラーベ）の復活をも希望したが、曙光のごときアスラにあっさり却下された。

「何の必要があろうか。古き良き時代など、幻想に過ぎない。恋々とするなかれ。聖者イ

半の初期の衝動に戻れ。それこそが神聖シルヴィエの真のアイデンティティであり、大義であろうぞ」

レコンキ伯爵は窓ガラスの外の激しい雨を眺めていた。エジンバル川が増水している。川沿いの町ストラングラーの安宿の部屋に坐っていた。雨雲は暗く、濁流は凄まじい。

「さあ、どうでしょうか。そろそろ、お出でになつては」

彼がそう言うのと、闇からすうっと現れる、光る煙のような存在。やがて輪郭を作りなし、人の形となった。

薄墨の没骨のごときモルグの亡霊である。伯爵のかつての主君であった。

淡い灰色となつて、半ば透ける沈鬱なモルグは表情を変えずに、

「伯爵か、久しぶりだな」

「さようですな、陛下」

「ふふ。おまえらしい。怖じもせずか。さればこそ、おまえの図ったとおりとなつた」

「陛下の画策のとおりです。私がこのように計らうであろうことを知って、わざと私を放置されていました」

「ふむ、死して今さら、どうでもよいことだ。ふ。死んでしまふなら、世の言う価値など、空疎なこと、この上もない。

いつから気づいておったか」

「イカヅチ・マカが生まれる前から」

「残酷よのう。エリイカが知れば、激怒するであろうぞ」

「四神相応が招き寄せたこと。さようなればこそ、さようなるものを、いかにもしようがありません。大自然のなせる御業を」

「衆人の怒りを買う言葉だな」

「いかようにも。さて、突き詰めれば、人は祈ることしか為せないのです。さよう申される陛下にても」

「余の目的は世界の革命である。シルヴィエの滅亡はその枝葉に過ぎない。四神が相応じて、真理の永遠を保証し、世界に変革をもたらした」

「陛下のお考えになる真理とは」

「あるものは。」

人は祈ることしか為せず。いかな想いも、インパルスに若かず。何のことがあろうか。されども、人は無明の闇を生く。それ丈しか為し得ず。かくして、ゾヴィルのごとくに封ぜらる。いたし方もなし」

第二十章 南と東と西が合併し、北を囲めども、虚し。シャンパーニュの泡。

「世界の意志の統合、大協議、大連合が必要だ。世界の総和だ」

古代のローマ帝国のように軍事と建築に優れ、経済を大いに発展させた黄金の皇帝がどのように宣言する。

エステのヴォード帝国のユナイ皇帝であった。

スールのマールロ帝国のラハン、リヨンリヤンリューゼン帝国のファンロンチャンジングルー皇帝との三帝が結束し、究竟の皇帝アスラ神の率いるアカデミア大連邦に対抗しようとする。その主要な戦略が合併策であった。

三大超大国が結束し、ノルテのアカデミアを囲い込み作戦を開始する。史上最初で最後、空前絶後の大世界大戦であった。

だが、アスラによって速やかに挫かれる。

スールの砂漠には、霹靂とともに大豪雨が襲来し、大洪水が起こった。

エステでは、噴火と地震で経済が壊滅。

オエステでは、四千もの大竜巻が起こり、帝都は崩壊した。

いずれも一般庶民の犠牲者がいないという奇跡が起こっている。衣食住については、アカデミア大連邦からの救援で、一日と措かず、平常な生活が戻ったこと、貧窮者は、むしろ、生活が向上した。物資や人道的支援に当たっては、龍やガルダ数十万に拠る世界同時大輸送が大いに効を奏した。

最初に和睦したのはヴォードであった。

首都メタルピシユカインペラスチュートのマテリアル宮殿において、ユナイ皇帝が無条件降伏に調印する用意があると伝えて来る。

次にマールロのゴルバディ大草原の首都ゴラ・ゴジュダスのノーマシー（絶非空）宮殿に於いては、皇帝ラハンが降伏を申し出る親書を、応龍に乗った密勅使に託して送って来た。

リヨンリャンリユーゼンの大元汎都では、ファンロンチャンジングル皇帝が最後まで和睦に踏み切れずにいた。

国内の旧勢力のほとんどが新時代を認識できず、降伏に絶対反対で、和睦すらも認めず、それを抑え切れなかったからである。亡国の徒よ。

国難を招く結果となってしまった。

かつてのシルヴィエ空軍とマールロ帝国海軍、ヴォード帝国海軍が東大陸に攻め込み、大元汎都は、いとも簡単に陥落してしまった。

「IE世界完全制覇、全統治、及び勝利宣言。」

我が支配はあらゆる大陸に及ぶ」

世界中の軍備は解体された。

もはや、外国は存在しない。

アスラは黄金の杯にシャンパーニユをなみなみと次ぎ、祝杯を挙げた。

「この立ち昇る泡のようなものだな。ふ」

独神アスラは言った。

「私はいつ消えるとも知れない。

なぜなら、生まれたこともなく、滅することもないからだ。そのようなものが存在と言えるであろうか。

もつとも、パルメニデス (Parmenides 紀元前四百年代の古代ギリシャの哲学者) そういうものこそ存在であると言ったが」

パルメニデスは存在 (ある *being*) とは不生不滅で、他者を持つ部分ではなく、全体であって、唯一であり、従って、異動も移動も異同もなく、終わりも始まりもなく、未来にあるであろうこともないと言った (らしい)。在るものが無いものになることや、無いものが在るものになることは理性に基づいて考えれば、あり得ないこととしたのである。

「私が消えた後は……、いや、滅することはないが。

無と化することはあるかもしれぬ、心の赴くまま、気の向くままに、大自然のように人には計り難く。

だから、敢えて言おう、聖剣を以て、暗夜を行く燈明とせよ、荒野を逝く道標とせよ、と。

畏敬を以て聖剣を荘嚴せよ」

かくして、アカデミアの東を護る青龍である聖イヴァント山の城砦は、聖剣の設置所に相応しい宮殿へと、大改造することが第二位の聖務として優先された。第一位とされたのは、帝国解体に伴う財産の庶民への分配分與、又は（比較的富裕な者への）分割譲渡であり、その売り上げを、さらに貧窮者へ配ることであるのは言うまでもない。

城砦は豪華と絢爛と強靱と壮大を以て大拡張した。

城砦というよりは尖塔が壮麗に列する白亜の大宮殿となり、その建築は聖イヴァント山脈すべてを覆う、空前の規模であった。

建物丈で周囲四百km、敷地も含めた総面積は四万km²、世界の富が集まり、大いなる寺院・聖堂・神殿の大集合建築で、中央大祭壇の巨大さは千メートルを超えた。その中枢にマガダの聖堂があり、聖剣をその懷に託す。

又、龍肯の象徴である、巨大な『あい』と読む文字（文末参照）を、眞神山の頂の磐代に設置し、真義で全世界を荘嚴し、未来永劫に於いて、世界一切を眞の眞なる眞として輝かしめる。

さて、龍肯城砦の一室にて。

マコトヤは世界を統治する方法について、リカオンと議論していた。奥深い秘密の書斎である。

無理もなかった。議論のテーマは『アスラの去った後の統治について』である。大憲法が必要であるという結論に達した。

第二十一章 大憲法制定 永劫平和

むろん、アスラの在位は永劫に続くはずである。

彼女（彼）は不生不滅だからである。

だが、計り難い大自然のように、アスラが気紛れのように譲位してしまうような場合にも、すなわちトップが変わっても、平和の礎が崩れないように、永遠に続くように、イリユーシュとマコトヤは大憲法の制定に着手した。

聖剣を永遠に神象の聖堂に荘嚴し、常にイユのような存在を求め、聖剣を以て龍肯の妙機を生ぜしめ、龍肯を以て正義を判断し、平和を乱す者を即時滅亡させることを基幹とし、

要項細目を研究し始めた。

「人は必ずや、道を誤るからだ。理屈はあてにならない。理屈はどんなふうにも構築できる。道理はいくらでも造れる。だから、表面上は筋が通っていても、まったく何の拠りどころにもならない。心の正しさこそが唯一の判定すべき根拠であるが、それはかたちなきもので、客観的に判定すべき術がない。

ゆえに、人倫の客観的測定器として、我らは聖剣を維持する」

リカオンが皮肉を言った。

「今からでもいいから、諸悪を即時滅亡させればよいではないですか。アスラ様ならば、できましよう。盗みをした者はその瞬間に死ぬとか。

善悪の判断は無限に絶対であるアスラ様をお願いして、悪を為した者をその為した瞬間に死滅させればよいのです。恐れて誰も悪を為さないでしょう」

「それは暴力です。暴政です」

リンレイが反論したが、リカオンは納得せず、

「二兎追う者は一兎をも得ず。

犯罪者を擁護する者は、被害者を犠牲にする。両方に良いことはできない。アンチノミ―です。現実はこちらかを選ばなければならない。強いてどちらかを選ぶとすれば、無辜の者を救い、悪を為した者を滅すべきでしょう」

マコトヤが面白がるように言う、

「道理だ。しかし、悪者も悪者に生まれたくて、悪を為すのではないがな」

リヨンが不服を唱え、

「そういうのは、自分が被害を受けたことのない、他人事でお気楽な、似非人道主義者、偽善者の説だ。マコトヤ、それを言ったら、現実的ではない。埒が明かない。解決しない。すべてが無罪だ。悪を放置することになる」

「むろんだ。現実が既に現状のような仕様だから、そのダンマ（法）に沿って考えるしかない」

リンレイが、

「神は全知全能、天網恢恢疎にして漏らさず、です。現状のような仕様にしないことも、アスラ様にはできるのでは」

「できるけど、しないだろう」

「なぜですか」

「しないからだ」

リカオンが言う、

「理由はない、ということか。確かに、神は因果や因縁や理由や原因を超越している」

マコトやは片眼鏡を人差し指で上げ、

「つまり、現実しかない。現実丈だ。」

起こったことが事実だということだ。結果しかないという意味だ。意味も名前もない。

水を熱すれば、蒸気になるが、なぜ、水を熱したら、蒸気になるかは（現象的に構造は確認できるが）、理由も意味も目的も何もわからない。その現象が何であるかもわかっていないと言えない。

喩えのようなものだ。代数で解釈している丈だ。わかってはいても、何もわかってはいない。空に等しい。

つまり、イデア的な、ロゴス的な、本質論的な、理性的なことは、何もわからないままだ。ふ、そういうことさ」

イリユーシユは腕を組みながら、

「何だか、よくわからない。」

いや、全然わからない。ちつとも、わからないぞ。

最初から、悪人を生じないようにしてしまうとか、悪心を起こさせないようにしてしまうとかすれば、そもそも、処罰というものが要らなくなるではないか。それじゃ、ダメなのか」

「アスラはしないさ。いや、逆にするかもな」

マコトヤに言われてイリユーシユは想い出す。

まだイユやイリユーシユがアカデミアに滞在していたころだ。イリユーシユはマコトヤに呼ばれた。

「何だい」

「よかったらイユも一緒に」

アカデミアの壮麗な図書館に附属する土色蒼然たる文書館に行く。書庫に入った。埃が積もった、薄暗い広大な空間だ。膨大な書籍、巻物や椰子の葉を綴った経典、粘土板や石板が積まれていた。

無造作にマコトヤが書棚から一綴の小冊子を出す。

「これが『マニユアル』だ」

「え、これは」

手に取って、イリユーシユは驚く。それを覗き見たイユも、

「だって、マコトヤさん、これはゲームの攻略本よ」

長い顎鬚を撫でつつ、マコトヤは、

「そう、IEは元々ゲームだった。それが進化変革し、一つの事実世界になった。いや、実在する理想の世界、具象的な本質の世界、実存するアイデアの世界になった。

世界は自由だ。そんなことがあってもよいだろう？」

イユとイリユーシユは、ただ、あ然とした。開いた口が塞がらない。

「理解がついて行かない。それって、どういうことなんだ」

イリユーシユが問えば、イユも、

「そうよ、何で世界になったの」

「不思議はない。

ゲームは高度に発達した。

一切の遺漏のない完璧な人工知能が、まったく遜色なく人間と同様になってしまうように、ゲームの、高度に完成されたバーチャル・リアリティは一つの事実世界になった。

しかも、それはゲーム作者の意図ではなく、ゲーム自体の意図だった。

正確に言えば、ゲームはIEを生むために、IE自らが創ったゲームだ。ゲームを生むために、IEは世界を、全平行宇宙を含む存在非存在の一切を創った」

イリユーシユはまったく理解できず、反駁し、

「順序が違っただろ、時系列が」

「ただ、現実がある丈だ。起こったことが現実だ」

「原因と結果の順序が狂うことはない」

「世界の（宇宙の、ではなく）開闢前には、時間も空間もなかった。物質もなく、物的な現象もない。すなわち、物理的な法則も存在しない。何かが起こる原因は存在しなかった。だから、開闢前という時も存在しない」

「理論的にはな。

理論という方式、証明方法が適切妥当とは限らないぜ」

「鸚鵡のような奴だ。そういう見解も、論理に依拠して導かれるものだがな。

論理は自己否定の様式だ。自己否定は論理上丈に限っては、矛盾する。なぜなら、否定されてしまったものは、否定ができなくなるからだ。自らの尾を咬む蛇さ。食べられているのか、食べているのか。

どこにも着きやしないさ。未遂不収だ。

創られる者が原因で、創る者が結果だった。それ丈さ。創られることが主体的行為者で、創ることが受け身だったんだ。創られることは創られさせることで、創ることは創られさせられることなのさ。されるが能動で、するが受動だ。原因が未来にあつて、結果は過去にある。

かくして、IEは現象世界(現象世界にいる人と、諸々の物的現象)に於いて創られた。それはIEが意図を以て、主体的に行つたことであり、IEの意志であつた。

ちなみに、完全完璧体験型(疑似インパルスで脳神経細胞に直接情報を送って仮想現実を造るシステム)バーチャル・リアリティ・ゲーム『アイデア・ワールド』を創つたのは、IEが創られることをさせられたのは、天易真兮、すなわち、小生だ。さあ、どうかな。いかがかな。

これが事実だ。無味乾燥の非情な。

未遂不収、現実丈しかない、結局は、とてもかくても候、畢竟究竟の自由放縦、身も裂き砕く自在無礙にて天翔躍る、つてことなのさ」

大憲法をアカデミアで奏上し、数日の滞在のうちに承認された。

その帰路は何もかもうまく行くかに思えた。聖なるイヴァントへ。
しかし。

途上で見上げれば。

山嶺に黒髪を靡かせ、こちらを睥睨している非情の豪傑偉丈夫がいた。黒い炎を帯びた黒龍が絡むリャーマ・ネーグロを抜剣し、ぶらりと下げたまま、冷血な殺戮の蛇眼を爛々と滾らせている。メタルハートがあらわれた。

第二十二章 最後の戦い

「来たな、ふ、これからが本番だ。我らにとって、帝国軍など前座に過ぎぬ」

イリユーシユやアガメムノン、リンレイ、リカオンらが集まり、イユとアヴァが寄り添う。

「出やがったか！」

メタルハートは嘲笑いつつ、傲然と宣う、

「今日こそ絶世なる究竟窮極空前絶後の真なる戦い、さようにあればこそ我もまた、我が真究竟真実義を示めさん」

全身の怨霊が強く濃く現象した。

「今日のこの『聖』なる日のために温存しておいたぞ」

今までに殺戮した人々の怨霊が全身から湧く。その苦悶の表情がくつきりと浮かび上がる。

「きゃあ」

あまりの恐ろしい光景にイユが悲鳴をあげた。

だが、イリユーシユは意志の力を統合してレジストし、はつきりと言う、

「俺らの生きている姿もこれと何が変わるであろうか。人を恨んでは苦しみ、その苦しみから逃れ解かれるために恨みを晴らすとする。人は幸せになりたいのだ。恨みを晴らすために憎み憤る魂の根底には、生存が根源に在る。

恨みを晴らすことを、僕は否まない。正しいかどうかは知らない。ただ、否まない。

だが、すべてを赦すことは悪を赦すことではない。悪を赦さないことを赦す。

では、どっちつかずの中道・中庸か？ そうではない。どっちつかずの態度・見解を非難し、拒否し、どっちつかずの行為・意見を悪と見做し唾棄罵倒することを肯定する」

その時、

「あっ！」

思わず声を上げたリンレイ。

その魂魄も牽き裂けるかと思われる現象が立ち上がる。メタルハートの身体が放つ怨霊のなか、唐突に幸福そうな家族があらわれ、団欒の最中にいきなり虐殺され、身を裂かれて苦しみ、その苦しみの恨みから生々しい怨霊へと化す過程が繰り返された。

「貴様、ジン・メタルハート、赦さない」

イユは激越な憤りが全身から噴出する。止めども尽きぬ噴火のようであった。メタルハートはせせら笑っている。

イリユーシユは静かな炎を湛えていた。心を亂し敗北しては、本末顛倒と思うからであ

る。

リンレイも瞋りを滾らせ、氾濫させる。

だが、イリユーシユは言い放つ。

「怒りによって怨みは解消しない」

イリユーシユは瞑目し、『死を齊しく生と觀じ、生を死とぞ睿らめる』という、甚深究竟な瞑想を試みる。

「生死が事実としてあるか否かを確かめる術はない。事実が我らの想うような事実ならば、差異のない無色透明、無味乾燥である。死を死たらしめ、生を生たらしめるは、受想・行・識であつて、実体ではない。色を染めたもうものは、識・行・想・受であつて、人は投企したものを回収しているに過ぎない。空疎な往復運動だ。

従つて、死は死であつて死ではなく、生は生であつて生ではない。色即是空、空即是色ともいわれるゆえん」

崇高なる燦めき、さやかかろらかな光、きよらなあきらかさ、浄火の赫き煌めき、聖の聖なる蒼白き光明、太陽のときとき赫奕。その睿らかさによつて、怨霊は、救われ、苦が寛解し、世の価値觀を超えて解脱した。肉体がない分、解脱し易いとも言えるし、し難いとも言える。

動揺も見せぬメタルハートは、

「ふ、さもありなん。このようなこども騙しが貴様らに通用するなどと期待してはいなかったわつ。ふうぬうううんっ」

ジン・メタルハートは臍下丹田に息吹を込める。黒い霧のようなものが立ち込めた。

全身に悪辣な氣を籠らせ滾らせ、生存の根源的な力である、初期衝動的な、闇雲な、全方向的で、無方向的なる無明の氾濫怒濤の全否定を爆裂さす。

その勢い凄まじく、すべてを否定するというに違わず、おのれをも、全否定というおのれをすらも例外とせず否定し、一齊を否定すること自体を絶否定した。それゆえ、すべてを否定せず、一部をのみ否定する。又は、まったく何も否定しない、或いは、全肯定へ。されども、それらをすらも否定し、一切否定へ還る。かくして、メビウスの環のような解決不能の未遂不収、死という壓倒の事実のごとき、今將に、この瞬、現に此處に在る現実であつた。

「亡びよ、滅せよ、強き者が勝つ、我が勝つ」

滅亡の重壓の剛力。メタルハートの眞髓であつた。

「うぬぬっ」

イリユーシユたちは壓され、前後左右上下を喪い、膝を突く。物的な力尽くであった。唯一、イリユーシユが龍肯の聖剣に縋りしがみつくようにつかみ、構え、進み出る。振り向かずに叫ぶ、

「イユ、アヴァ、頼んだぜ」

二人の真兇が重奏される。

龍肯の聖剣はこれに呼応するかのよう、燦々赫奕たりて無際限に光爆奔裂し、龍の肯定を以て非をも肯定する。非（メタルハート）は肯定によって躬らをも非とす。非されて非は非として復活した。これは龍肯がメタルハートを赦さぬことだけを肯定し、他を肯定しないからでもある。究竟窮極の炸裂、未遂不收、平常という狂裂飛散、現実ということ。永劫の時間のなかで、一切の平行宇宙の一つ一つにある三六三千世界すべてをも含む史上空前絶後の裂。

光燦の爆裂に何もかも喪われる。長い時間のように感じられた。

光の霧のなかから、イリユーシユはゆっくりゆらゆらと立ち上がった。ジン・メタルハートが傲然と胸を逸らし聳えて睥睨している。その手には血まみれに死したアヴァの生首。「ふふ、こいつには何万年も苦勞させられた。遂に斃したわ、ぐふふふ」

少し離れてイユが頭から血を流し倒れている。イリユーシユには見えていない。勝ち誇って爛々とし、ギラつくメタルハートのまなざしは殺戮に燃えていた。

「すなわち、モノの力が勝つ」

「モノはおまえだけではない、聖剣よ、奴を再び、裂くんだっ」

そう叫んで飛び、垂直に振り上げ、究竟奥義の一刀で正面から縦裂く。

「ぐわあああああああああああああああっ！」

メタルハートが真つ二つになる。しかし、

「ふぬぬぬぬぬううぬっ」

怖いことに裂けた肉は再び結合し、修羅は甦ってしまった。

イリユーシユの剣は大地に刺さったまま動けない。

斬裂がメタルハートの否定性を進化増強させてしまった。

非は非をも否定し、その非性の威力は倍增した躬らを喰らい尽くす原蛇ウロボロスのように無限大に。

「ふわっはっはっはっ、もはや我が勝利しかあり得ず」

メタルハートはむんずとイリュージョンを爪でつかみ、牽き裂く。

「いやあああああ、イリュージョン！」

それは同時に、畏怖すべき深淵の沈黙であつた。

誰もが戸惑った。

イユは信じられぬ光景に叫ぶ。

狂おしき阿修羅イリュージョンを真つ二つに牽き裂いて凄絶な形相の修羅メタルハートが
 躬のなかから再びあらわる。

メタルハートが激烈に吐笑する。

が蒼白となつて、

「うらあああ」

全非となりて一切を無みす重力を籠らせ、奈落のような底へ曳き墮とし、無すらもない絶空、その狂亂壊裂を、死という事実、負の重き壓、何もかもを吸い込み、光や音さえも逃れられぬ無空の闇、空間すらも歪み、滅する。方位のない、上下左右前後内外中枢末端のない、ありとしあらゆる特性を無効化し、無も、無効ということすら特性を剥奪、無効化され、すべてが無限の透明に塗り潰され、何もかもが喪われる、齋く稜威き『死の儼』。

だが、その『恐るべき荒野』に一人だけ立つ魔物がいる。何千年も厳しい銀嶺で風に吹かれてぼろぼろになった裂(きれ)のように。

双眸が煌々と耀いていた。肩で息をし。それでも、今ここにじぶんしかいないと覺り、時の経過とともに少しずつ、おのが勝利を確信し、嘲笑う、「ふふ、我が勝利なり」

だが、突如、

「つまり、おまえの負けだ、ジン・メタルハート」

イユが存る。メタルハートはおのれの眼を疑った。

「なぜだ」

もう真兇は唱えていない。手指を絡め、印契を結ぶ。

メタルハートも一時は驚いたものの、イユ独りと見て余裕を取り戻し、さも可笑しげに嘲りを泛べ、

「ふふ、何をバカな。おまえしかないない。存在への直截の勘が我に告げる。おまえは独りだ。他に存在がない。独りしかないない。おまえは独りでは勝てない」

眼を睜き剥き、凄まじい形相で歩み寄る。イユは生を死と覺え、死を生と觀す。

「あたししかないなら、あたしは勝てないとおまえは言った。現実が現実でしかない、未遂不収だ。過剰極まりない狂炸自裂なる自由だ。

強く想い、強く觀じ、言えば、その言葉のとおりとなるだろう、すべて色受想行識、彝なる惟い、念い、魂魄、言霊、縁り結ぶ現象、脳髓の描く解釈に因って構築された差異にしかざれば。おまえはその力に滅ぶ」

「何だと？」

メタルハートは驚いて振り向いた。あり得ない。イユ以外の存在はまったくなかった。そのはずであった。

だが、現に、現実に、背を刺されていた。

「ジン・メタルハート、悪鬼羅刹、悪魔めつ、地獄に堕ちろ、復讐だーつ、修羅めつ、貴様をぶつ殺すっつっ！」

リンレイだった。龍背の聖剣で突いている。

「バカな、バカな、バカな……なぜ、聖剣がおまえの手に」

「イリュージョンの最後の魂が守ってくれた。すべては空だ、僕もおまえも、おまえの力も、イユもね」

メタルハートが全非なりて一切を無みす重力、上下左右前後内外中端のない無、すらも

ない絶空、その狂亂壊裂を、死という事実、負の重き壓をとして、齋く稜威き『死の儼』放った時、イリユーシユは魂魄の力、誰もが持つ大靈威でイユとリンレイとを空に帰し、救ったのである。

「猪口才なつ、聞き飽きたわっ」

籠手で聖剣を打ち払い弾く。

「きゃあっ」

イユとリンレイとはその煽りで飛ばされ、バウンドして気を喪った。メタルハートは焼け爛れた背なかの傷から青緑の血を噴く。

「ふふ、力が勝つ。生存は常に道を見出す。理由などは、どうでもよい、理不尽で一向構わぬ、すべては自叛自裂、自異自逆、あらずとも、かくても、どうあろうとも、いずれにせよ。既に我が勝利ゆえ、我が勝利なり。勝利のみ存。勝利しか在らず。

すべて我が意の随」

凄まじい執著であった。死にそうになりながらも歩む。リンレイの手から落ちた龍肯の聖剣をつかんだ。一瞬で躬が燃え尽きて滅した。

「おまえは勝てたよ、ジン・メタルハート、あたしが独りだったならばね。おまえの言ったとおり、つまり、史上稀なるその力によって、おまえはおまえの望んだとおりになった」

えびろーぐ
◆ Epilogue ◆

上下左右前後も知り得ない、色彩のない、黒すらもない、暗くも明るくもない闇（強いて言えば）透明な闇、むろん、銀の背景も持たない、喩えるならば、どこまでも無際限に透明な闇。存在性が四方へ千切れ飛び散る狂亂。存在以前の世界。牽き裂かれるような、苦しさ。メタルハートの哄笑が響く。

あゝ、助けて。もう、この悪夢は終わったはずなのに、ともかくも、逃げたい、遁れたい、免れたい、救われたい、楽になりたい、只管それ丈。^{ひたす}
この苦しみから、この苦しさからも、解き放たれたい。

存在のないことの、根底からの不安、内臓ごと吐きそうな嘔吐の感覚、生存の畏怖、存在の不安から、抜け出したいがため丈に。

真義も真実も、真理も理法もない。正義も本質も、正当も誤謬も、妥当も不当も、真も偽もない。一致も不一致もない。

ただ、助かりたい。願いがかなうならば、健やかなまま、無事でいたい。すべてはそのための儀礼装束に過ぎない。だから、そこに *gaga*（アイデア）はなく、擦り合わせた刹那のみの仮初めの架空の空漠がある丈。

眼が覚めた。

眼を醒ますと、イユは思わず、

「夢か……」

つぶやく。

そうわかった時の安堵感、嬉しさ。

びっしょり汗をかいていた。全てが明るい。窓も開いている。爽やかな乾いた微風。あゝ、幸せだ。幸福で、いっぱいになる。隣のベッドでは、イリユーシユがまだ昏睡していた。安らかな顔で。

『死といふ儼』はメタルハートと同時に失せた。皆、無事であった。「神の加護だ」と敬虔につぶやく言葉に、否を唱える者はいなかった。

「目覚めたのね、イリユーシユ」

イユの頭には、包帯が巻かれていた。血が滲んでいる。顔が寝れていた。寝ずに見ていてくれたとイリユーシユは思う。

「俺は。」

なぜ、生きているんだ」

イユが微笑した。

「どっちの意味？　あなたが存在する理由を問うているの？　それとも、どうして死なずに今、生き残っているかを問うているの？」

イリユーシユは眉を顰めた。

「なぜ、あの時、死なず、殺されずに今、生きているか、それを問うているに決まってい

るぜ」

応えず、イユはアヴァを指差した。燦々然と坐し、微笑まずとも瞭らかに欣然としている。眩い菩提薩埵騎獅像のように。

「彼女も生きているわ」

イリユーシユの唇が震える。

聖なるアヴァが聖剣の復活に合わせて降臨したのだと如実に感じた。だから、白き巨象は感慨に囚われたのだ。

「そうか、つまり、人間じゃないからな。」

そして、俺も」

輝くように美しいイユの悲しみと歓喜との綯い交ぜとなった表情が語る、「そうね」と。イリユーシユはその意味を考え、想い、そして、言った。

「つまり、ジン・メタルハートも甦るということだ」

皆がイリユーシユの意識回復を祝った。誰もが光に包まれ、喜んだ。

そして、翌朝もイユは飛び起きる。悪夢を観たような気もする。でも、

「そうよ、今日は皆で食事する日だわ」

笑いながら、ゆっくり湯浴みし、午前中は庭を見て過ごし、午後に支度して、何度も鏡を見た。

「さあ、行こう」

厳肅な実験のように、キュイジーヌが精密な、料理という名の科学に基づいて調理した暖かな夕餉の支度が整うと、東の青龍、イユとイリユーシユはテーブルに着いた。

今宵は四神が揃う大晩餐会だ。

眩いスターリング・シルバーのナイフやフォークが美しくならび、白さが光り輝くようなナプキン、ちょこんと置かれた可愛らしい茹で卵の容れ物。

「幸福ね」

イユは輝く瞳で、イリユーシユに微笑む。

遅くなった少年は少しはにかんで、無表情を装った。それを見て、イユはさらに微笑みを輝かせる。

坐るべき椅子のないアガメムノンやマハールシャは直接に床へ坐ってテーブルに着くも、他より遙かに高い。テーブル面は臍の位置だ。

イユはおかしくて笑う。

栄養ドリンクに入っている程度の、微かなアルコール分が入った飲み物がシェリー酒用の小さな銀の器に注がれた。アペリティフだ。

「リンレイ、あなたも飲むのよ」

「僕は苦手なんです」

大人たちには、本物のシェリー酒が給仕された。ミカエロは食事の前の祈りを神に捧げる。

酒類が出ると、男たちの顔はほころぶものである。

もつとも、バロイやジヴィーノなどは、食前酒など気に入らない。

「おい、そのバカでかい彩色陶磁器の、金の蓋つきジョッキに黒ビールをなみなみ注いで、四、五杯持つて来い」

リヨンとリカオンは、

「コニヤックだ。グラスにいっぱいいな」

ミカエロは、

「ヴィノ（葡萄酒）でいい、赤だ。いや、気が変わった。グラッパにしておこう」

リユージュ（龍咒）というアカデミアの傭兵も、

「スコッチで。シングル・モルトをくれ」

アガメムノンは彼らのわがままな要求を聞いても、自分は言わず、じっと大人しく我慢していたが、そんな面子など顧みないマハールシャは、

「何だ、いいのか。じゃ、俺はバーボンだ。ああ、そのピッチャーに入れてくれ。加水してない、樽出しのままの奴な、アルコール度六十の奴だよ」

皆どつと笑い、緊張が解れた。

アヴァン・アミューズが出た。大きめのスプーンに盛られた小さな料理で、小さなサーモンとスフレ、チョコの粉末がスプーンの縁に微かに振られ、仄かな香りづけがされていた。

ちなみに、アヴァンとは、前にということ、アミューズ・ブーシュの前に出る料理だが、アミューズ自体がアトレ（又はオードブル。前菜のこと）の前に出るものである。

さて、アミューズ・ブーシュ（直訳「口の楽しみ」）は茹でてから冷ました海老に、ゼラチン入りソースを華やかにかけて、トリュフを添えたもの。

イリユーシュがぺろりと食べるのを見て、

「ちゃんと味わいなさい」

澁面を作ってから、からから笑う。

イラフは給仕されたオードブルをニコニコして食べる。

「シンプルだが、味わい深いね。とてもおいしい。塩が良いように感じる」

その料理は、オリーブの実が添えられ、極上のオリーブオイルのたっぷりかかったプロシュートであった。リカオンが自慢げに、

「ふむ、ふむ、うん、うまい。」

おっしゃるとおりですな。

実は、これ、オリーブは南から取り寄せましたが、肉は地元の農家の豚で、最近、見つけたんです。ええ、イラフ様。

やい、からかうなよ、ジヴィーノよ。ふん、こう見えてもな、農家を廻って、掘り出し物を探すことも、割と好きなんだぜ。

おい、どうだい、イリユーシュ、これは輸出できるよな」

スープとパンが給仕される。カナッペがついていた。心和ませる湯気に、絵柄すらも清らかな皿である。

スープを匙で啜りながら、皿の上のパンにカナッペを塗りたくり、

「メインはまだか」

沙門であったプライドから、清々した雰囲気を保ってきていたアガメムノンもさすがに焦れてきたようだ。

「ともかく、俺にもビールをくれ。そのピッチャーで、ああ、そうだと、三つともくれば。そのぐらい、平気だぜ」

香草を添えた白身魚のポワソン。ユリアスは慎重に解剖するような手つきで、

「クロウミー海で獲れる鱈ですね。大きいのに大味ではなく、繊細で深みがあり、滋味に富んでいるのが特徴です。骨は小骨までピンセットで完璧に抜いてあるようですね。」

うん、おいしい。南大陸でも南極産の鱈を食べますが、風味が違いますね」

リンレイは掌を合わせてから、

「イリユーシユ、食べませんか？ 僕はちよつと」

第一のメインディッシュと第二のメインディッシュの間に出てくるソルベ（シャーベツト）は木苺から作ったもので、濃いソースが掛けられていた。一舐めで食べてしまうジヴイーノは肉料理が運ばれてくるのを見ると、

「やつと来たか。おい、マハールーシャ、バロイ、俺たち用に、超絶弩級の特大大肉もあるようだぜ」

ヴィアンドウ（第二のメインディッシュ、肉料理）は牛肉とトリュフとホアグラを重ねたロツシーニふうで、普通サイズで、美しい絵柄の皿に盛ったものは、繊細なデザインのような、細い鮮やかなソースが掛けられていたが、特大のものは子豚が乗りそうな銀の皿に、5cmはありそうな厚い肉が十数段重ねられ、湯気を立てている丈であった。

「これ、これ」

バロイががぶりと喰いつく。

「おい、ビールだ」

黒髪のリユージュが顔を顰め、

「いや、ここはタンニン強めの渋い赤ワインだろうな。雨が少ないと、水分を護ろうとして、葡萄は皮を厚くするんだ。そういう奴はタンニンが多く含まれている」

リンレイは戸惑った表情で、イユに向かい、

「食べませんか、僕はちよつと」

「え、いいの？ 食べたいけど。でも、何で？ 菜食主義だから？」

「殺生は」

「あら、野菜にも命があるわ。動物や魚貝は殺しちゃだめだけど、野菜は殺してよいの？ 細菌やバクテリアやウイルスは殺してよいの？ 理不尽だわ」

イリユーシユが仕方ないなという顔で、

「イユ、今頃、気がついたのか、リンレイの菜食主義に。自己中だな。しょうがないだろ。あまり理詰めにするな。って言うか、その人の自由だろ」

「そうなの？ 納得できないわ。殺さなきゃ生きていけないから、私は殺すわ。そして」
イリユーシュが眉を顰めた。

「そして？」

「愛するものを護るわ」

黙ってたくさん食べていた南の朱雀、エリイカが頷いて、

「あたしも同感だ。生きていけないんだからな。生きなくてもよいなら、生まれて来はしないだろ」

リカオンは顔を顰め、

「単純だな。そんな理窟のはずがないだろ。ま、どんな思慮も単純だな」

イリユーシュは強い、

「くだらねえ、飯がまずくなるな。消化に悪いぜ」

北の玄武、マコトヤも笑い、

「イリユーシュの言うとおりさ。しょうがないな、イユもエリイカも。だが、まさに君らの言う、そのとおりなのさ。理不尽ではあるがな」

イヴィーノが眼を丸くする。

「理尽も理不尽もないぞ。いや、待ってました、俺の好物だ。これ、これ。まあ、そういうことさね」

銀のワゴンに乘せられ、さまざまな色彩や質感・形状のフロマージュ（チーズ）が運ばれる。好きなものをいくつか選ぶのだが、

「全部、この皿に乗せる。このロココ調のブランコの絵が見えなくなるくらいな」

そう言ったのは、アガメムノン。絵が気に食わないらしい。食欲も同時に満たせるから一石二鳥だ。

可愛らしいアヴァン・デセル（デザートの前デザート）が給仕され、その後にデザート、最後にコーヒーで、お茶うけとも言えるプチフルは小さな焼き菓子だった。

「うーん、とても満足よ、キュイジーヌを称讃するわ」

リンレイも笑顔で、

「素晴らしいですね。いつになっても慣れないし、飽きない。あの頃と、あまりにも違い過ぎて。毎日、感動しています」

こんな時は、リカオンの表情も柔らかく、善人のようだ。マコトヤは愉快そうにパイプを煙らし、リヨンはコニヤックをボトルで七本要求し、ミカエロ相手に議論しているが、

今日のミカエロは微笑み、あまり語らない。

ソングやバロイやカノンは、どうにか特製の椅子に坐るも、やはりテーブルが臍の位置なので、どうにも坐りが悪く、落ち着かないので、無作法ではあるが、立ち上がって談じ始め、お互いの剣を自慢していた。

「名工と呼ばれる刀鍛冶のアウグステイスが鍛えたこの刃こそ、天下無双、世に類まれな、優れたものなるぞ」

無表情なメタルを光らせて、実に楽しげだ。やがて、詳細な刀剣談議になった。耳を傾けつつも、木刀を愛用する、西の白虎、イレツは、

「ふん」

と鼻で笑い、日本酒をグイッと呷る。

イリユーシユは幸福そうなイユを眺め、幸せに浸る。イユの笑顔は薔薇よりも美しい。

太陽の薔薇よりも、鮮やかで美しかった。

幸福というものの解釈を誤らなければ、幸福こそが望むもののすべてである。さにあれば、あなた方の幸福を祈り、最後に聖の聖なる『いゐ』の神聖文字を記して置こう。



唐突、丈を^{だけ}氣^キ附^{ツク}。唐突に “ で^{ある}存^{ゾン}ことに（又は、「 “ に^み存^{ゾン}ことに」）氣附、とい
うことではない。

“ “ であるとか、 “ “ の状態にあるとか、 “ “ に居るとか、そういうことには、未
だ氣がついてなく、ただ、氣がついたという丈でしかないということ。今も。

(参考データ)

龍馬は一日千里を往き、二十日でI E世界を一周する。

応龍は一時間で四千里を往く。五時間でI E世界を一周する。

現象世界の陸地の面積 1 4 8, 9 4 0, 0 0 0 km²

地球全体の表面積 5 1 1, 8 2 1, 3 0 6 km² (球体の表面積 $4\pi r^2$ に依る)

I E世界の表面積 2, 0 4 7, 2 8 5, 2 2 4 km²

ちなみに、半径は、 1 2, 7 6 7. 1 6 km

直径は、 2 5, 5 3 4. 3 2 km

一周は、 8 0, 1 7 7. 7 6 4 8 km

神聖シルヴィエ帝国面積 1 0 2, 5 8 9, 4 5 2 km²

2 0 1 8 年時点ロシア面積 1 7, 0 9 8, 2 4 2 km²